三重県埋蔵文化財調査報告１０７

一般地方道安乗港線道路特殊改良事業に伴う

西殿遺跡発掘調査報告

志摩郡阿児町国府

１９９２・３

三重県埋蔵文化財センター

序

広大な面積のほ場整備事業や道路改良及び河川改修などの公共事業、また民間企業による開発事業が、地域経済の活性化あるいは、住民の生活や安全のために行われています。一方、近年、社会の環境問題への意識の高まりの中で、埋蔵文化財保護の問題も年々増加の傾向にあります。

三重県教育委員会では、文化財保護行政の一環として、毎年各開発関係部局に事業を照会し、事業予定地内の文化財の確認とその保護に努めてまいりました。今後とも、関係者はもちろんのこと、広く県民の皆様方にも埋蔵文化財に対する、なお一層の理解と協力が得られるよう、公開・普及の面でも力を注いでまいりたいと考えております。

ここに報告する志摩郡阿児町所在の西殿遺跡は、一般地方道安乗港線（通称安乗港バイパス）道路特殊改良事業の施工に先立ち、事前協議の結果、発掘調査を実施し、記録保存されたものです。弥生時代中期末から近世にかけての人々の生活の跡が明らかになりました。特に中世から近世にかけての土葬墓が発見され、20数体もの人骨が出土しました。当地の埋葬形式を考える上でも、人類学的にも貴重な資料となることでしょう。これら、祖先の残した歴史的遺産は、貴重な財産として保護され、後世に伝えていくとともに、今後の文化の向上に、発展の基礎として活用していかなければなりません。

なお、調査にあたっては、県土木部道路建設課、志摩土木事務所、阿児町教育委員会及び同町建設課をはじめ、地元の多くの方々の惜しみないご理解とご協力を賜りました。文末ながら、記して深く感謝の意を表します。

1992年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　中林昭一

例　　言

1．　本書は三重県教育委員会が県土木部より執行委任を受けた一般地方道安乗港線（通称安乗港バイパス）道路特殊改良事業に伴い緊急発掘調査を実施した志摩郡阿児町国府字西殿に所在する西殿遺跡の発掘調査報告書である。

2．　調査は次の体制で行った。

調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター
　　主事　齋藤　直樹　　主事　上村　安生
調査協力　　阿児町教育委員会生涯学習課
　　社会教育係　前田　義孝

3．　調査にあたっては、県土木部道路建設課、志摩土木事務所、阿児町教育委員会、同町建設課ならびに地元各位の方々に甚大な協力を得た。

4．　人骨の調査・鑑定及び写真撮影の指導には、江原昭善教授（椙山女学園大学）に終始お世話になり、人骨の鑑定結果についての玉稿を賜った。

　また、中・近世陶器については、中野晴久氏（常滑市民俗資料館）及び藤澤良祐氏（瀬戸市埋蔵文化財センター）のご指導とご助言を得た。

5．　本書の執筆・編集は齋藤が担当した。また、遺物の実測・トレースは管理指導課と齋藤が行った。

　なお、調査及び整理そして執筆・編集にあたっては原則として、『埋蔵文化財の調査・整理・保管に関する基本マニュアル』（三重県埋蔵文化財センター　1991・3刊）に依る。

6．　写真図版の遺物番号は実測図の番号と対応させてある。但し、人骨についてはキャプションによる。

7．　西殿遺跡の遺構実測図・遺物実測図や写真等の資料及び出土遺物（人骨も含む）はすべて、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

8．　本書で用いた遺構表示略記号は下記による。

ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＫ：土坑　　ＳＤ：溝　　ＳＸ：墓坑
ＳＺ：性格不明遺構

9. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
　各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本 文 目 次

Ⅰ 前 言 …… 1
1．調査に至る経過 …… 1
2．調査の方法 …… 1
3．調査の経過 — 調査日誌抄 — …… 2

Ⅱ 位置と環境 …… 4

Ⅲ 遺 構 …… 7
1．層序について …… 7
2．主な遺構 …… 7

Ⅳ 遺 物 …… 12
1．弥生時代の土器 …… 12
2．古墳～奈良時代の土器 …… 12
3．中世（鎌倉・室町時代）以降の土器 …… 15
4．土製品・石製品・骨製品 …… 18
5．金属製品 …… 18

Ⅴ 人骨の調査について …… 19
1．はじめに …… 19
2．人骨の出土状況について …… 19
3．出土人骨について …… 21

Ⅵ 結 語 …… 42

図 版 目 次

PL.1 B・C区調査前近景／B・C区調査区遠景
PL.2 B区調査区中央部／B区SB33, SB34
PL.3 B区SK37遺物出土状況／C区SD28
PL.4 A区調査区遠景／A区調査区全景, SB43
PL.5 A区SK44／A区SD51
PL.6 人骨出土状況（1）No.1人骨
PL.7 人骨出土状況（2）No.1～9人骨
PL.8 人骨出土状況（3）No.8～10,12人骨
PL.9 人骨出土状況（4） No.13～19人骨
PL.10 人骨出土状況（5） No.20,22～26人骨
PL.11 人骨（1） No.1，3，7人骨
PL.12 人骨（2） No.12,15,20人骨
PL.13 人骨（3） No.22,23人骨
PL.14 人骨（4） No.24,25人骨
PL.15 出土遺物（1）
PL.16 出土遺物（2）

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 …… 3
第2図 遺跡周辺地形図 …… 3
第3図 調査区位置図 …… 4
第4図 明治初期の西殿周辺絵図（上村家文書）… 5
第5図 遺構平面図・土層断面図 …… 8～9
第6図 地区割図 …… 9
第7図 SB33・SB34遺構実測図 …… 10
第8図 SK37遺物出土状況図 …… 10
第9図 出土遺物実測図（1） …… 13
第10図 出土遺物実測図（2） …… 14
第11図 出土遺物実測図（3） …… 15
第12図 非計測形質分類基準 …… 22
第13図 出土人骨の歯式図 …… 37
第14図 人骨出土状況図（1）No.1～4,10,12,16人骨 …… 38
第15図 人骨出土状況図（2）No.18,20,22,24,26人骨 …… 39
第16図 人骨出土状況図（3）No.5，7,13～15,19,23,25人骨 … 40～41

表 目 次

第1表 遺構対照表 …… 11
第2表 出土遺物観察表（1） …… 16
第3表 出土遺物観察表（2） …… 17
第4表 出土遺物観察表（3） …… 17
第5表 出土遺物観察表（4） …… 18
第6表 出土人骨一覧表 …… 20
第7表 非計測形質分類の項目と基準一覧 …… 21
第8表 出土人骨計測値表（1）No.1，2，4人骨 …… 31
第9表 出土人骨計測値表（2）No.4～7,12人骨 …… 32
第10表 出土人骨計測値表（3）No.12,14,15人骨 …… 33
第11表 出土人骨計測値表（4）No.15,18,20,22人骨 …… 34
第12表 出土人骨計測値表（5）No.22～24人骨 …… 35
第13表 出土人骨計測値表（6）No.24,25人骨 …… 36

Ⅰ 前　言

1．調査に至る経過

一般地方道安乗港線は、安乗岬への唯一の県道で、地元の生活道路であり、また安乗岬や国府白浜海岸への観光客が利用する重要な観光道路でもある。

しかし、特に古い町並みを残す国府地区内には、乗用車の対面通行が困難な箇所もあり、また拡幅も難しいため、交通緩和と地域振興のためにもよりスムーズな交通路の整備が必要とされていた。

この道路改良事業はすでに字殿畑から字天神地内までの路線が完了しており、今年度は字西殿地内へとさしかかることとなった。

なお、この事業地内における埋蔵文化財発掘調査は、これまでに県教育委員会が調査主体となり、殿畑遺跡(1979)[2]・天神遺跡(1982)[3]で実施され、今回の西殿遺跡は3回目となる。

当遺跡は土木部への事業照会で、県教育委員会による分布調査が実施され、中世遺物の散布が確認されて周知の遺跡となった。

その後、県教育委員会文化課主事伊藤裕偉を担当として、1988年10月24日に範囲確認のための試掘調査を実施した。用地買収等の関係から、該当地域全てに試掘坑をあけることはできなかったが、道路センター杭№19～№29間に8箇所の試掘を行った。

この試掘結果をもとに、再度関係部局との協議の結果、路線の変更は不可能なため、特に遺構・遺物の濃厚なセンター杭№19～№25について本調査を実施し、記録保存されることとなった。

ところで当初、当遺跡名は御茶子遺跡とされていたが、遺跡の主要部分が字西殿にあることから、試掘調査後に改めて「西殿遺跡」と名付けた。

今回の調査は、用地買収等の関係から調査区を第1次調査区と第2次調査区に分け、前者を1991年7月6日～10月7日、後者を1992年1月31日～2月19日に発掘調査を実施した。(第3図)

なお、人骨が出土したため専門家である江原昭善教授に調査指導等にご協力を頂き、また人骨に関する詳細な報告を頂き、掲載させていただいた。

発掘作業は、砂地とはいえ、乾燥するとスコップが曲がる程堅くなり、雨が降ると腰まで水に浸かっての排水作業もありました。夏冬とも厳しい作業環境のなかで、無事調査が完了したのは、町当局及び地元の方々のおかげである。ここに第1次・第2次調査の現場作業に従事していただいた方々のお名前を記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)

大屋昭生・多都子　西尾義元　前田峰松　谷川原みつゑ　石川博之・幸子　大澤吉秋　甲斐野高喜・定子　桐谷一郎　山本禮次・美智子　和田勇次郎　大屋和子　浜村嬌子　瀬田はるの　北井三代子　小森トシ子　晝川つたゑ　田島健・博子　向井美英　渡辺輝男　小山田夏代　中瀬昌子　渡辺英子　池田鐵夫　尾崎捨一　木下佐太郎　坂下安市・さき　城山新作　仲野題五　橋爪兼三　村田喜三郎　森下茂直　山下彦太郎　池田はまゑ　亀谷志か　坪谷サイノ　出口はつえ　村山つたか　磯崎篤　橋爪喜也　仲野真紀　瀬畑文彦　小林博　中村拓志　山下登之助・コシモ　大西さい　森下うめ子

2．調査の方法

調査区の現況は、宅地及び荒れ地・畑で、用地買収や排土処理等の関係から、宅地をA区、荒れ地をB区、畑をC区とし、B→C→A区の順に実施した(第3図)。第1次調査は、B・C区で、東から西に、第2次調査は、A区で西から東に向かって調査を進めた。調査面積は第1次調査が1,080㎡、第2次調査が320㎡の計1,400㎡であった。

ほぼ東西に細長い調査区のため、調査区の壁は、山側を北壁、海側を南壁、安乗側を東壁、国府城側を西壁と名付けた。第1次・第2次調査とも、道路センター杭№22と№23＋14.5を結んだ線を調査区の基準線とし、北から南に1～5、東から西にA～Zとし、4m×4mの小地区を設定した。なお、各小地区の呼称は北東角の交点もって名付けた。(第6図)

但し、設定の不手際から第1・2次の両調査区に同名の小地区が存在するため、第2次調査の遺物カー

ド・注記には全て「西殿遺跡２次」と明記した。

３．調査の経過　― 調査日誌抄 ―

第１次調査［Ｂ・Ｃ区］(1991．７／６～1991．10／７)

７／６～７／12：調査区内の伐開及び搬入の仮設道工事
７／12：機材搬入、Ｂ区表土掘削開始
７／15：表土掘削中に人骨出土
７／16～19：排土の場外搬出に手間取る
７／22：現場作業本格的に開始、課長開始挨拶
７／23～26：№13人骨まで確認
７／27～29：台風９号の被害大、調査区の壁崩壊
７／30：現場担当２人体制となる。Ｂ区遺構検出と並行して、Ｃ区表土掘削開始
８／１：№20人骨まで確認、町長･教育長視察
８／５：小雨の中、江原教授第１回現地指導
８／６～８：台風10号の被害大、調査区水没･壁崩壊
８／10：Ｃ区表土掘削完了、遺跡周辺で古墳３基確認
８／13～16：作業員の盆休みのため現場作業中止
８／17～18：台風11号のため現場作業中止
８／19：台風12号に備える
８／20：排水作業のみ、記者発表の準備
８／21～22：排水作業、遺構実測と遺物取り上げ
８／23：Ｃ区遺構検出開始
８／26：乾燥のため８／５以来初めてシートを全面とる
８／27：記者発表、新聞記者取材
８／28：江原教授第２回現地指導。新聞記者取材
８／29～９／１：台風14号で調査区水没、排水作業のみ
９／２：遺構検出及び遺構掘削再開
９／４：南壁の崩壊で出現していた頭蓋骨は№６人骨のものではないことが判明、この人骨は改めて№23人骨とする
９／５：№18,23人骨周辺の拡張掘削開始
９／６：現地説明会準備、説明会資料搬入
９／７：午前中排水作業、午後から現地説明会約50名参加。説明会終了後、台風15号に備える
９／９：排水作業、台風の被害少なし
９／11：Ｂ区の航測準備、標点設定
９／12：午前ＲＣヘリによる航測、午後国府小学校の児童約100名見学、遣り方設定
９／13～16：台風16号のため全ての現場作業中止
９／17：調査区水没、排水しながら人骨実測
№10人骨の下層から№24人骨出土
９／18：台風18号と秋雨前線の雨、排水作業のみ
９／19：伊勢道路通行止め、現場に行けず
９／20：調査区周辺の畑まで水没。エンジンポンプ水没
９／21～23：排水作業のみ
９／24：排水し、作業できるところから実測開始
９／25～27：人骨実測、台風19号に備える
９／30：午後、雨が激しくなり実測中止
10／２：午前中排水作業、午後から人骨実測
10／３：Ｃ区平板実測
10／７：排水しながら南壁土層実測、現場作業の全てが完了、機材撤収

第２次調査［Ａ区］(1992．１／31～1992．２／19)

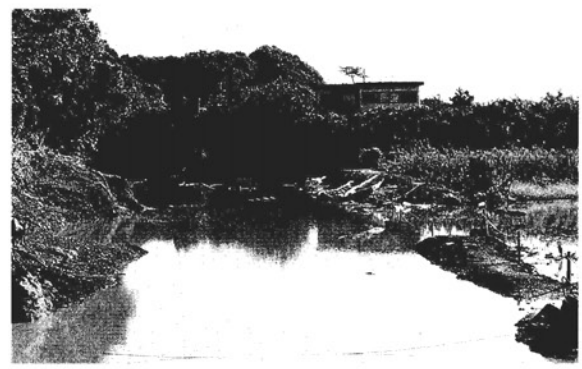
１／31：機材搬入、業者と打ち合わせ
２／３：盛土の除去開始
２／４：昨夜からの雨で重機入れず作業中止
２／５：盛土除去完了
２／６：旧表土の掘削開始、人骨２体確認
２／７～14：遺構検出及び遺構掘削開始
２／15：遺構掘削完了、写真撮影
２／17：平板実測、人骨実測及び取り上げ
２／19：現場作業全て完了、機材撤収

［註］

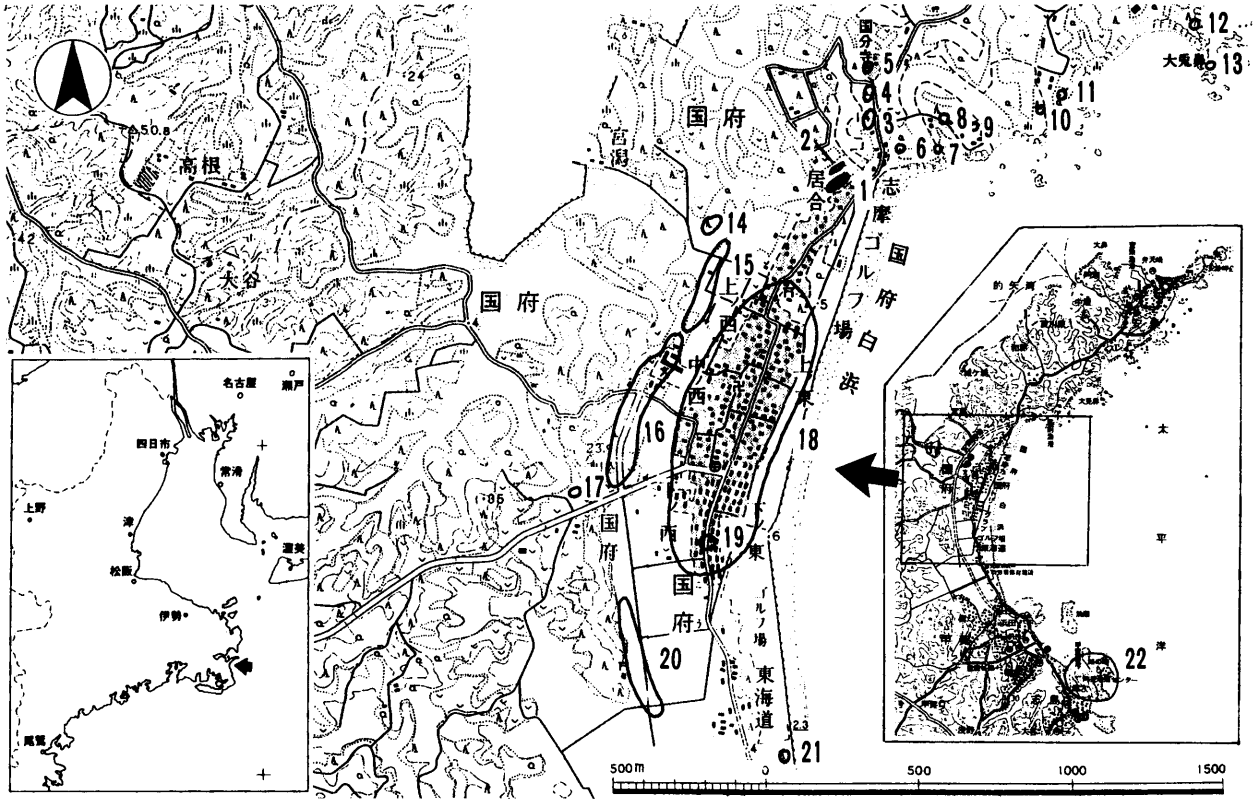
① 奈良時代に設置された志摩国の国府の推定地

② 新田　洋『殿畑遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1980

③ 中村信裕・伊藤久嗣『天神遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1984

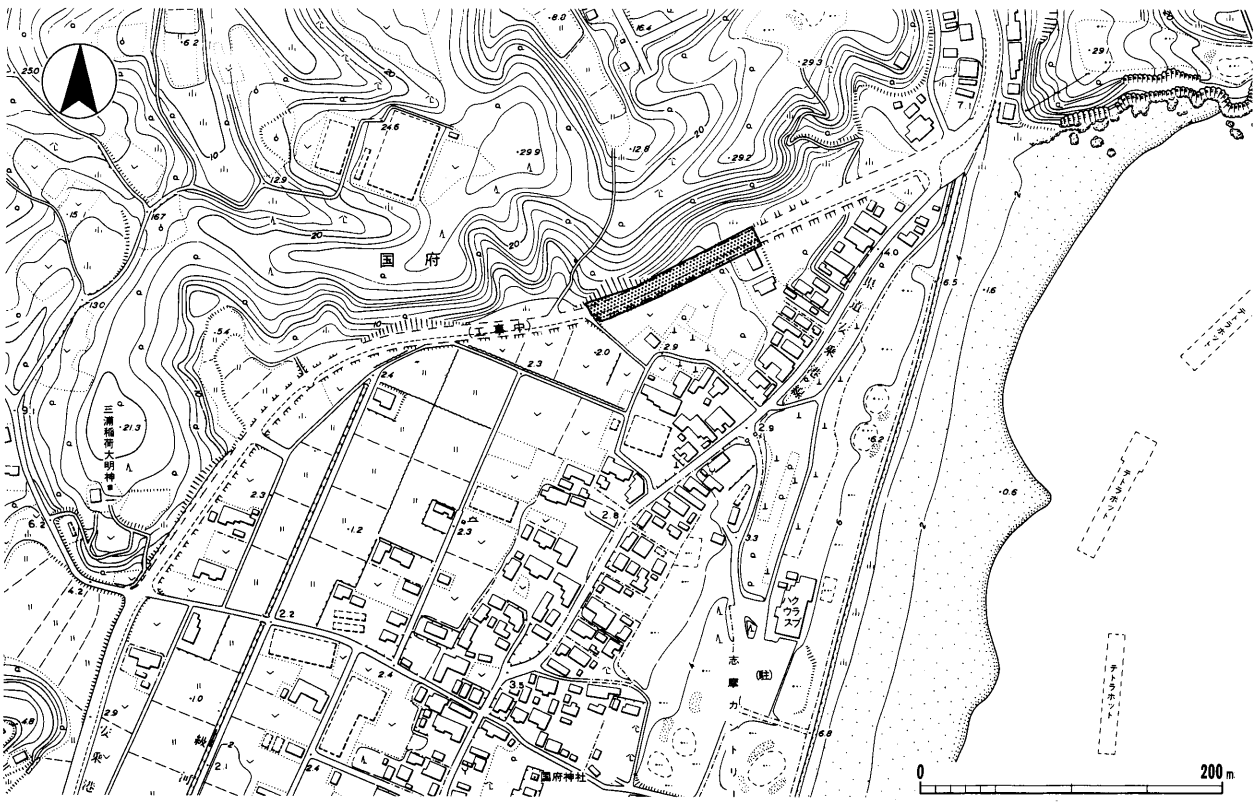


調査区水没状況（台風18号後）



第１図　遺跡位置図　［1：25,000］（国土地理院：浜島、磯部、波切、安乗［1：25,000］より）

1．西殿遺跡　2．寺川原古墳群　3．御茶子遺跡　4．マイセ遺跡　5．志摩国分寺址　6．大堂山古墳　7．大堂浜遺跡
8．兎ノ丘古墳　9．兎、十字岡土師器包含地　10．井尻包含地　11．上ノ浜古墳　12.大兎岬遺跡　13．丸山岬遺跡
14．国府城址　15．天神遺跡　16．殿畑遺跡　17．地蔵堂経塚　18．国府遺跡（遺跡）　19．字東海道墓址　20．東海道遺跡
21．和鏡出土地　　22．志島古墳群



第２図　遺跡周辺地形図（「阿児町都市計画図　No.８」より。スクリーントーンの部分が調査区）［1：5,000］

Ⅱ 位置と環境

西殿(にしどの)遺跡(1)は、志摩郡阿児(あご)町大字国府(こう)字西殿地内に所在する。①

当遺跡の立地する標高2m程の沖積低地は、巨視的には安乗岬と志島城ノ崎を頂点とした、太平洋に面する内湾部に形成されたもので、西側の標高20～30m前後の隆起海食台地と東側の国府白浜海岸に挟まれた、長さ約2.5km・幅約0.6km程の三日月のような形の小さな平野で、現在の国府・甲賀の二つの集落の中心は海岸沿いの砂堆上に営まれている。この砂堆と隆起海食台地までの間は、現在は標高1m前後のほ場整備された水田地帯であるが、かつては潟湖(ラグーン)であったと考えられている。②(第1図)

当遺跡は、この平野北部の先端で、安乗崎に至る隆起海食台地の付け根に位置し、調査区は標高30m前後の隆起海食台地の急峻な東側斜面の麓で、国府白浜海岸まで約200mの距離である(第3図)。

さて、当遺跡の存在するこの平野においては、既に殿畑遺跡(16)・天神遺跡(15)・東海道遺跡(20)③の一部分の発掘調査が近年実施され、遺跡周辺の歴史的環境について、徐々にわかりつつある。以下その概略を述べることとする。

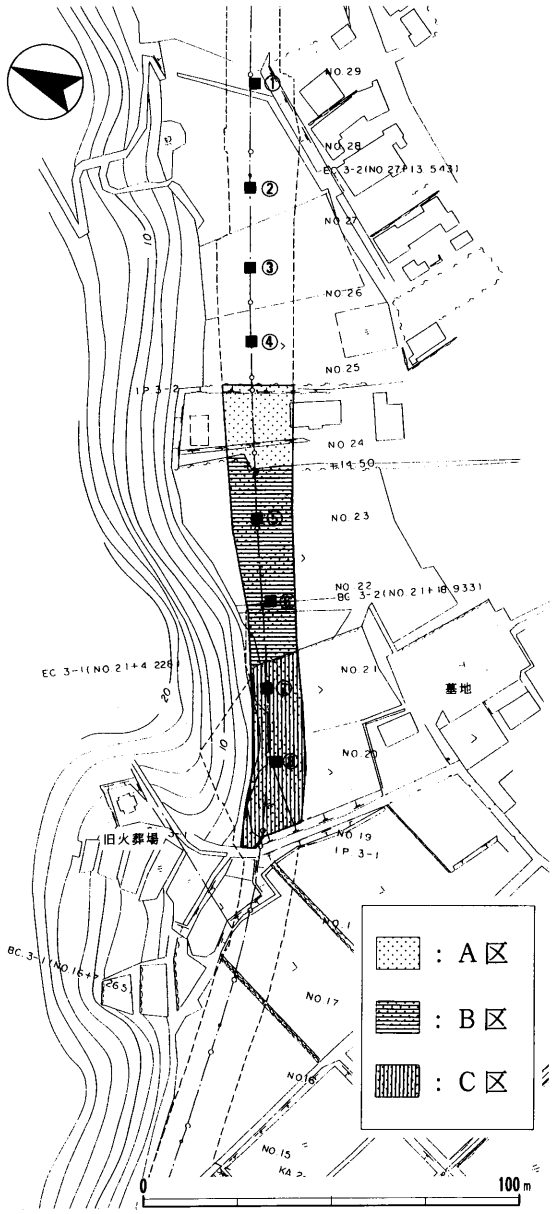
この平野は、地形的な制約から一つの地域として発展してきたと考えられる。その利用区分から考えると、山裾部と砂堆部の2地区に大きく分かれて遺跡が立地している傾向から、国府地区の平野部は居住域・耕作域・墓域が地理的な制約の中でかなり有機的に占地されていたものと分析されている。④

現在の知見による限り、この平野の本格的な遺跡の形成は古墳時代以降で、それ以前については、縄文時代中期の土器と弥生時代中期の土器等の遺物が断片的に知られていたが、今回の調査でも、わずかではあるが弥生土器(第9図)と土坑1基(SK42)が確認された。

古墳から奈良時代の様相としては、この平野の北と南の隆起海食台地上に数多くの古墳が点在することからその活発な活動が想定できる。(第1図)

南のグループは、5世紀後半の築造と考えられる志島古墳群(22)で、特にその中の第11号墳(おじょか古墳)⑤は北九州系の横穴式石室で、朝顔形埴輪や円筒埴輪を巡らし、方格規矩鏡や埴製枕が出土していることからも、当時の交流を物語るものと考えられている。

北のグループ(6～8、11～13)は詳細なことは不明ではあるが、志島古墳群と同様で直径10m前後の小円墳で、前者と同様に、太平洋が見渡せる台地上に位置するのは経済的背景を海に求めて存在した在地の首長層が築造したと考えられる。⑥



第3図　調査区位置図［1：2,000］
(①～⑧の黒ベタは試掘坑の位置)

律令制下の国府地区には志摩国の政庁が置かれとされ、現在の地名の由来となっている。西殿遺跡の南南西約400ｍから南に広がる国府貝塚［遺跡］(18)がその推定地で、現在の町並みは中世に敷かれた条里制に基づくが、そのときに律令制下の条里を再利用したのかもしれない。なお、国府の集落の西側の小字名の中には上ノ坪・中坪等の条里地名を残すものもある。[7] また、西殿遺跡の北約200ｍには、741年聖武天皇の勅命により建立された志摩国分寺址(５)がある。いずれも発掘調査は行われていないが、当遺跡との関係を考えるためにも早急な調査が望まれる。

中世以降の国府の歴史については、少し長くなるが、浦谷廣己氏の文章[8]を引用させていただく。

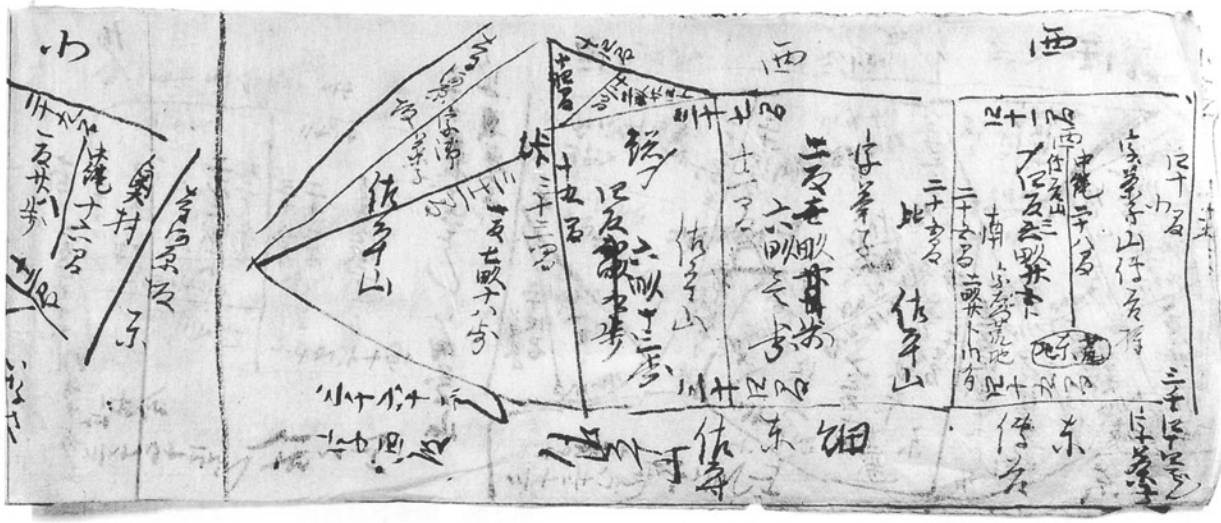
『鎌倉末期、北条氏に滅ぼされた三浦氏の末裔が「うつろ船」に乗せられ海に流されたのが、国府の海岸につき国分寺で育てられ後に地頭となり、三浦新助と名乗り、国府、安乗、三ケ所の３箇村を領有していたと伝えられる。奈良時代の志摩国は国府が政治の中心であったが、下って荘園時代になると伊勢神宮の神領としての御厨・御園となり、神宮へ税を納める土地となっていた。さらに下って鎌倉時代にいたり、幕府は志摩に地頭を置き、金沢氏が伊勢の南部とともに領有していたといわれている。さらに、南北朝時代は、伊勢の北畠氏の領地となり、応仁の乱以後は各地に地頭が輩出した。また各村も自衛のためその支配下になり、地頭は各村に砦や出城を築いた。このころ志摩には13の地頭が割拠していた。

前記三浦新助は、国府に本城(14)を、安乗に出城を築き、《中略》地頭としては、かなりの勢力を誇っていたものと思われる。それは、地名として残り、付近の字名は、御屋敷、堀、上の坪、中の坪、東殿、西殿、上屋敷、国府殿、四郎殿となっている。《中略》宝永４(1707)年10月14日、紀州沖地震により、大津波が押し寄せ、部落のほとんどが被害をこうむり田畑は砂で埋没したため、年貢米は５年間赦免されている。さらに、安政元年(1854)11月４日、遠州灘地震による津波は高さ10ｍにも及び、堤防は全壊し部落はほとんど水没した。しかし、道路が整備され、屋敷囲に槇を植えている国府では死人はなく、家屋の被害はすくなかった。国府の歴史は、津波との戦いの歴史ではなかったのではなかろうか。津波の後は、その恐れから、家屋を小高い丘に移し、また便利な平坦地にもどる。その繰り返しをして、部落の移動がたびたび行われていたものと思われる。』

今回の調査区の近くに江戸時代以降の墓地(火葬)[9]があることから、当遺跡はそれ以前の国府地区の墓地として利用されていた可能性が高いと考えられる。

文書(第４図)[10]及び地元の人の話によると、調査区は明治初期以降は畑として利用されており、それ以前は松林で、特に山裾部は山と砂堆の間の自然流路または沼のような状態であったと考えられる。

この遺跡の特徴は、中世以前と考えられる26体もの人骨が出土したことであるが、国府地区での人骨の出土あるいは中世墓に関しては、以下の３例が上



第４図　明治初期の西殿周辺絵図（上村家文書『明治11年　山林取調帳　上西組』）

げられる。『阿児町史』[10]によると、国府と甲賀の境を流れる龕流(がんな)川の、「龕流」の由来は、「浜州の上にある川が、津波、台風により幾度となく流れが変化し、その度に墓地が流され、棺が流れたので、龕流れ川の名がついたものと推考される」とある。和鏡出土地(21)は、国府と甲賀の境の新川を開掘したときに、同所から十数体出土している。また、字東海道墓址(19)からも人骨と鏡が出土している。

◎　調査区及び調査等に関する覚え書き

調査時に聞き取り調査を併せて行った。調査の対象は、主に地元国府地区を中心に60～70才代の人である。従って、明治末から戦前までの話と言い伝えが中心となった。

(1)　江戸時代の言い伝えに、津波は龕流橋付近とこの西殿付近の２つの地点から浸入し、現在の国府小学校あたりで合流した。このときの津波は、国府の町にも押し寄せ、家の中でも腰の高さまであったそうである。

(2)　安乗への道は、狭く低かったので、昔はよく切れて調査区近くまで海水が流入した。

(3)　戦前までの国府の町並みは、国府神社が最北端で、現在の西殿付近の家は戦後できた。

(4)　子供の頃(大正～昭和初期)、この付近は松林で、４月８日(旧暦)には市が開かれた。

(5)　この付近は大人がひと抱えする程の松林であったが、終戦前に海軍が塹壕の材料にかなり切った。また、現在海岸にあるゴルフ場の場所は、昔は全て松林で、前の浜では蛤がよくとれ、地引き網を引いたり、網を浜で干していた。従って調査区のところで網を干すことはない。

(6)　この付近の山裾は国府城まで畑であったが、ほかは海岸まで松林で、牛が繋いであった。

(7)　調査区付近の雨水は、国分寺の麓から海に流れていた。埋立てたので水が逃げ場を失い、水がよくつくようになった。

(8)　ゴルフ場建設のとき、人骨が出たらしい。

(9)　数年前国府地内の水道工事で、人骨が出た。

(10)　西殿は、水がつくので、戦後畑のかさ上げをした(B区)。そのとき人骨が出土した。

(11)　B区の10m程南で、畑の所有者が排水溝を掘っていたら人骨が出土したということである。

(12)　最近までこの地区の火葬場(第３図：旧火葬場)で焼いていたが、鵜方に新しい火葬場が出来てからはそちらを利用するようになった。

(13)　A区の盛土は昭和40年頃、近くで保養所を建設するさいにでた山土を貰って埋め立てた。盛土する以前は畑であり、表土から20～30cmの深さに畑の水やり用のエンビパイプが埋め込んであった。鉄パイプを打ち込めば地下水位が高く自噴した。

(14)　祖父から山際に家を建てるなといわれていた。昔の墓があるということを知っていたのだろうか。

第１次調査区に関係するのは、(４・５・７・10・11)で、第２次調査区に関係するのは、(５・13・14)である。

また、人骨に関係するものは、(８・９・10・12・14)である。そのほかは、重複するものもあるが、字西殿及びその周辺に関するものである。

なお、(１・３・４・５・12)については、『阿児町史』にも同様の内容が確認できた。(13)は図示しなかったが、盛土の中から、奈良時代と思われる須恵器杯身の高台片が出土したことから保養所(国分寺址付近)に何らかの遺跡が存在していたと考えられる。

［註］

① 現在「字西殿」は行政的には存在しない。小字の統廃合により、「字うさぎ」に統合された。
(1988年２月26日　官報告示)

② 伊藤裕偉『東海道遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1989

③・④ 前掲書②

⑤ 小玉道明・下村登良男・村上喜雄『志摩・おじょか古墳発掘調査概要』阿児町教育委員会 1968

⑥ 中村信裕・伊藤久嗣『天神遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1984

⑦ 新田　洋『殿畑遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1980

⑧ 前掲書⑦の「Ⅱ 位置と環境」より引用

⑨ 国府所在の源慶寺の住職落合氏のご教示と『阿児町史』(後掲)による

⑩ 上村家は国府・上西組の庄屋で、掲載については、所蔵者の上村惣太郎氏に御快諾を得た。なお、文書の解読は小林秀氏にお世話になった。

⑪ 『阿児町史』阿児町 1977

Ⅲ 遺　構

1．層序について

当調査区は、微高地である砂堆の周縁部で、基本的に砂で構成された層位が認められる。

調査区の層序は、土層断面図(第５図)の通りで、単純化すると第Ⅰ層耕作土(表土)・第Ⅱ層茶褐色砂質土・第Ⅲ層暗褐砂・第Ⅳ層淡褐砂である。

但しC区丘陵裾では、北部で一部岩盤が第Ⅲ層で露出し、西部で丘陵から崩落したガレキ層が２ｍ以上堆積していたため、その下層は調査出来なかった。

なお、A・B区の北側では、SZ30・SZ35の埋土として第Ⅲ層と第Ⅵ層の間に第Ⅳ層黒色砂質土層と第Ⅴ層黒色砂層が存在する。

第Ⅱ層は遺物も包含しているが、山土が混じっており、後世の畑のかさあげ時の置き土と考えられる。[1]

第Ⅲ層は遺物包含層であるが、人骨が存在しており、本来この層の上面が遺構検出面の一つであったと考えられる。しかし、排水溝兼トレンチでの、第Ⅱ層と第Ⅲ層の平面的な区分は出来なかった。

従って第Ⅵ層で検出を行うため、表土と包含層の掘削を重機で行った。しかし、人骨が確認されたため、第Ⅲ層の検出と掘削は人力で行ったが、結局第Ⅲ層での遺構検出は出来なかった。従ってほとんどの遺構は、第Ⅵ層上面で検出された。

基盤層である第Ⅵ層の上面から５～10cm下からも遺物が少量出土した。これは、砂層のために後世の撹乱や、津波の影響で混じったものと考えられる。[2]また、第Ⅵ層の厚さは約２ｍの無遺物層である。[3]

検出面の標高はほとんどが１ｍ前後だが、低い所は0.5m程で、地下水の湧出で水没していた。また、砂層のため降雨の度に遺構が壊れたり、調査区の壁が崩壊し、その崩壊土砂の処理に非常に手間取った。

2．主な遺構

主な遺構として、掘立柱建物３棟・土坑16基・溝４条のほか墓坑３基が確認された。時期については、遺物が出土せず、不明のものが多い。

なお、本報告での遺構番号は調査時と異なる。理由は検出ができなかったが、人骨に伴う墓坑が存在したと仮定し、番号を与えたためである。[4](第１表)

(ア)掘立柱建物

SB33　B区中央の最も北よりで検出した。桁行２間×梁行１間の建物である。柱間は、桁行1.2ｍ、梁行1.9ｍで、棟方向はE43°N、柱掘形は径20～30cmの円形で、20cmの平らな石を根石に持つものもある。

柱掘形埋土(黒色砂)には遺物がなく、時期及びSB34との前後関係も不明である。なお、SB33は更に北側へ続く可能性もある。

SB34　SB33の南側で検出した。桁行３間×梁行２間の建物で、身舎南面には東角から２間分、西角から１間分の柱間が異なる張り出し部分を有する。

柱間は、桁行1.4～1.6m、梁行２ｍで、棟方向はE43°N、柱掘形は径30～50cmで、第Ⅵ層に掘り込まれ、15～30cmの平らな石を根石としているものもある。

柱掘形については、第Ⅲ・Ⅳ層で検出できず、第Ⅵ層上面にかろうじて根石だけを検出したものもある。掘削中に根石を捨てた可能性もある。

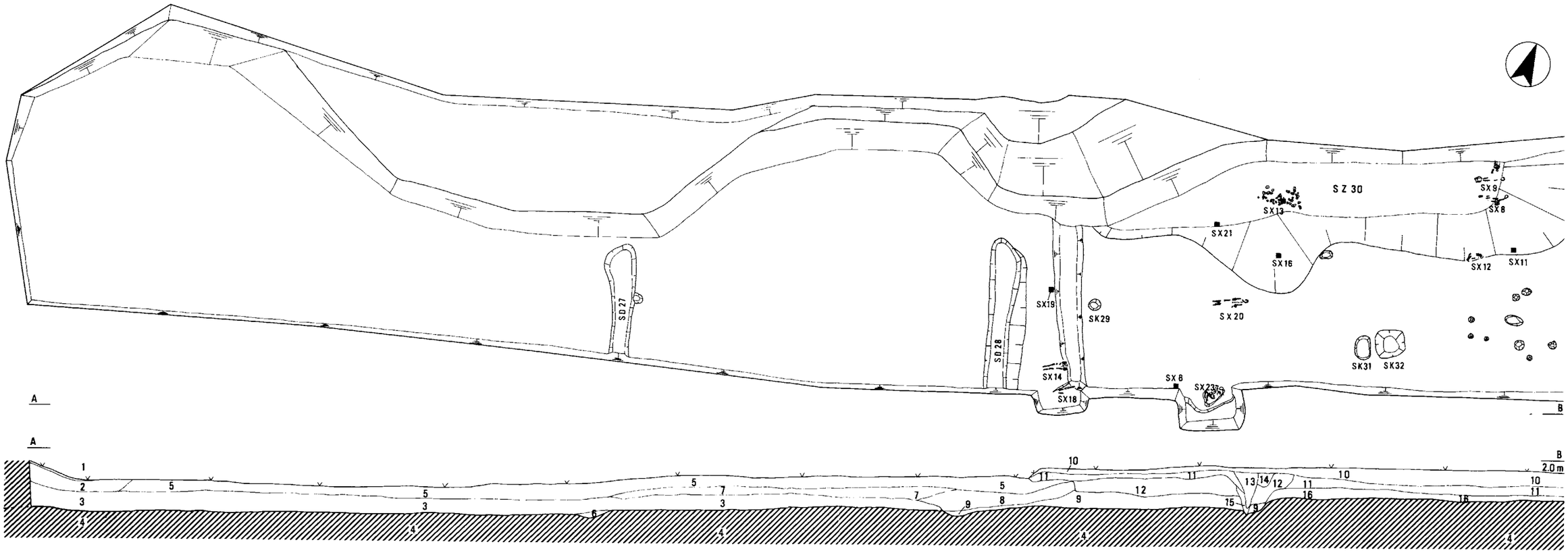
建物の時期については、柱掘形の一つがNo.15人骨の腰部をくり貫いており、その埋土から16世紀代の土師器鍋(42)[5]が出土したことと、柱掘形内に根石を持つこと[6]から、室町時代後半頃と推定される。

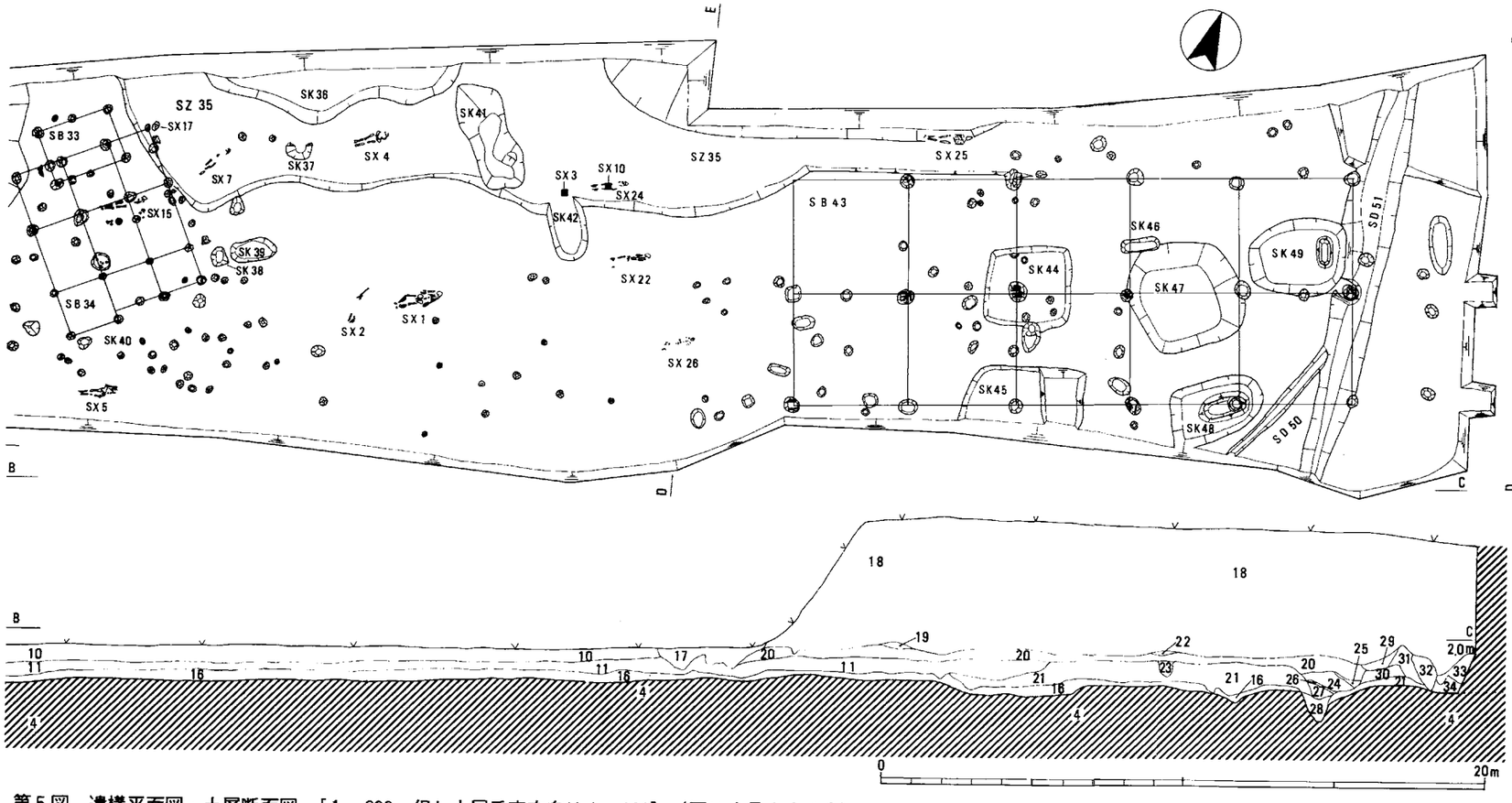
SB43　A区のほぼ全面で検出した。桁行５間×梁行２間である。柱間は桁行梁行とも約２ｍで、棟方向はE23°N、柱掘形は、径30cmの円形で埋土の中には、径３～10cm前後の粗朶が井桁状の組み方を意識して底部に敷いてあり、根石は確認できなかった。

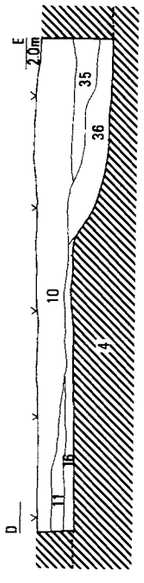
この遺構の性格は、不明である。

時期については、SK44・SD51等が埋まってから造られていることと、柱掘形埋土から15世紀前半の南伊勢系の土師器鍋(37)が出土していることから、中近世以降近代以前と考えられる。[7](第４図)

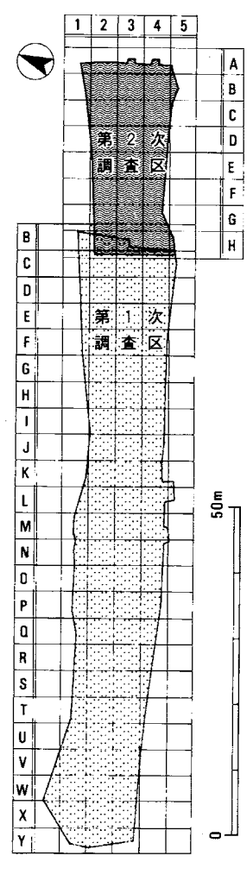
SB43の規模については、調査区の東部を拡張し、東には伸びないことを確認した。しかし、調査区の南北方向へは更に続く可能性もある。





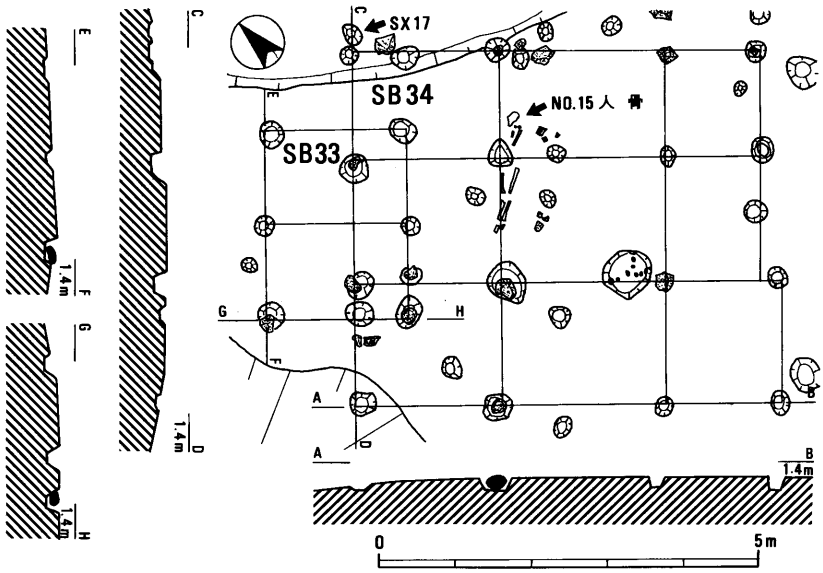


1．腐植土［表土］
2．赤褐色レキ混土（粘質）
3．暗褐色レキ混砂
4．淡褐砂［基盤層］
5．耕作土［表土］
6．黒色砂質土（やや粘質）
7．暗褐色砂
8．暗褐色レキ混砂（貝殻多含）
9．暗褐色砂利混砂
10．耕作土［表土］
11．茶褐色砂質土
12．暗褐色砂質土（貝殻少含）
13．茶褐色レキ混砂（砂利・貝殻多含）
14．茶褐色土
15．暗褐色砂
16．暗褐色砂
17．撹乱土（ビニール含）
18．赤・青色レキ混粘質土［盛土］
19．18.と20.の混ざり
20．青黒色砂（炭化物・貝殻少含）［旧表土］
21．暗褐色砂（16より黒っぽい）
22．18と暗褐砂の混ざり
23．茶褐色砂
24．暗褐色砂（21より黒っぽい）
25．24に淡褐砂が混ざる
26．24に少量淡褐砂が混ざる
27．暗褐色砂（貝殻少含）
28．暗褐色砂（16より少し黒っぽい）
29．貝層
30．茶褐色砂
31．暗褐色砂（21より黒い）
32．貝層
33．黒色砂質土［撹乱土］
34．茶褐色砂（30より黒っぽい）
35．黒色砂質土
36．黒色砂



第５図　遺構平面図・土層断面図　［１：200、但し土層垂直方向は１：100］（■は人骨出土地点）

第６図　地区割図［１：1,000］（4m×4m）▶



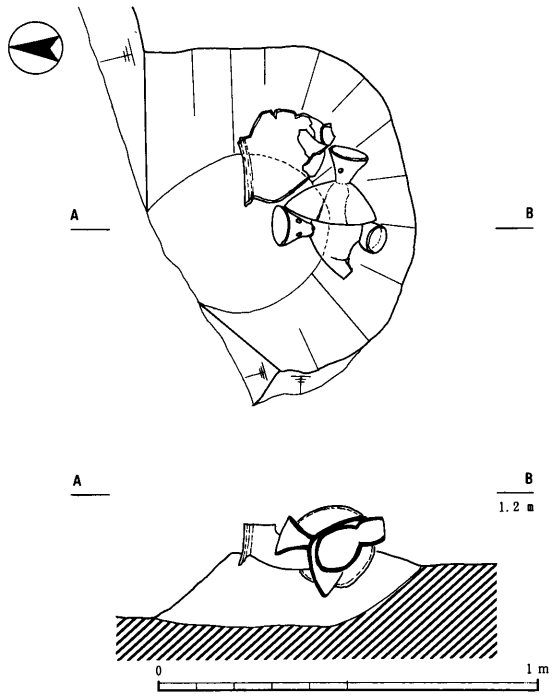
第７図　ＳＢ33・ＳＢ34遺構実測図［１：100］

（イ）　土坑

◎　弥生～古墳時代の土坑

SK42　第１次調査終了間際の清掃中に、B区東部で検出した。長軸1.2m、短軸0.6m、深さ0.2mの楕円形の掘形で、北側はSZ35に切られている。埋土は黒色砂質土で弥生後期の甕(３)が出土した。

SK37　SZ35の黒色砂を掘削中に検出した。遺構の北西部分は、既に掘削したために本来の規模は不明である。遺物は、古墳時代の土師器瓢壷(９)・壷(10)・S字甕(11)・高杯(12,13)・鳥の骨が出土した。



第８図　ＳＫ37遺物出土状況図［１：20］

◎　奈良～平安時代の土坑

SK29　B区西部、試掘坑６の北側で検出した。径0.6mで深さ0.3m。須恵器甕の胴部片が出土した。

SK36　B区北部で検出した。調査区の北側に続く。埋土は黒色砂で、土師器甕(19)が出土した。

◎　鎌倉～室町時代の土坑

SK32　SK31と並んで検出した。中世陶器片と、撹乱うけたと考えられる弥生土器壷片(５)が出土した。

SK38　SB34の東側で検出した。埋土は炭混じり暗褐砂・暗褐砂の順である。15世紀前半の土師器鍋®等が出土した。

SK39　埋土はSK38と同じで、土師器片が少量出土した。時期はSK38と同時期と考える。

SK40　SB34南側で検出、土師器皿が出土した。

SK44　A区のほぼ中央で検出した。埋土からは、土師器片、須恵器片、常滑甕片(50)が出土した。

SK46　SK47の北側で検出した。長軸1.2m、短軸0.4m、深さ0.14mで埋土から山茶椀片が出土した。

SK47　SK44の東側で検出した。径3.5m程で、深さは約0.9mである。埋土から土師器鍋・常滑甕・陶器等の破片が少量出土した。SK46に切られている。

SK48　SK47の南側で検出した。土師器皿(35)・鍋(40)、陶器こね鉢(48)・常滑甕などが出土した。

SK49　SK47とSD51の間で検出した。この土坑はSD51の肩を切っている。埋土から山茶椀(30)、常滑甕(51)等が出土した。

◎　時期不明の土坑

SK41　SK42の北西側で検出した。埋土はSZ35と同じで弥生土器から中世の土師器まで出土した。

SK31　SK32と並んで検出した。土師器片が少量出土した。

SK45　A区の南側で検出した。土層確認のトレンチをいれたため、遺構東側は破壊してしまった。埋土から土師器片が出土した。調査区南側に続く。

（ウ）　溝

SD27　C区中央部で検出した。SD28と並行で調査区の長軸にほぼ直交しており、その間隔は約17mで

ある。南側がわずかに低くなっている。埋土は暗褐砂で、土師器鍋、山茶椀(28)が出土した。

SD28　C区東部で検出した。埋土はレキと貝殻が混じった暗褐砂で、土師器鍋(43)・内耳鍋(45)、山茶椀(27)等が出土した。

SD50　A区東部で検出した。幅0.4m、深さ0.1m。SD51に切られ、高低差はほとんどない。土師器鍋、施釉陶器等が出土した。調査区南側に続いている。

SD51　A区東部で検出した。幅1m、深さ0.4～0.6mで、高低差はほとんどない。埋土から土師器鍋(41)、土製品土錘(56、57)等が出土した。調査区外の南北方向に続いている。

(エ)　墓坑

SX13　SZ30西部で石敷きを検出した。石の上に少量の人骨片だけが出土した。時期は不明である。

SX17　SB33の東側で検出した。径0.3mの円形で、深さは0.1mである。奈良時代の土師器甕(20)がつぶれた状態で出土し、その甕の埋土(黒色砂)から焼骨(№17人骨)が出土し、土坑の埋土からは輸入銭(71～73)が出土した。

SX23　B区の南側で、雨による壁の崩壊によって検出された。拡張して墓坑を確認した。墓坑内埋土から、少量の土師器片が出土した。

(オ)　性格不明遺構

SZ30・SZ35　SB33から西をSZ30、東をSZ35とした。いずれも調査区北側に続いている。山裾に位置することから、かつては沼のような自然地形であったと思われる。埋土は、上層が黒色砂質土(第Ⅳ層)、下層が黒色砂(第Ⅴ層)で、それ以上の分層は不可能であった。深い所は表土から1.2m程で、地下水が湧出していた。

遺物は、弥生土器(2)、古式土師器壷(15)、須恵器無頸壷(24)等が出土した。なお、黒色砂を掘り込み、墓坑も存在していたがほとんど検出できなかった。

［註］

① 旧地権者から、A・B区では戦後にも畑のかさあげを山土を入れて行ったという話を聞いた。
② 新田洋『殿畑遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1982
③ 第1次調査の最後に重機で断ち割って確認した。その下層は直径5～10㎜程の砂利層である。
④ 墓坑とそれ以外の遺構の順に改めて番号を与えた。墓坑は調査時の人骨番号にSXをつけ、墓坑以外の遺構は、原則として調査区の西から東の順で、南北に並ぶ場合は、北から南の順に与えた。
⑤ 伊藤裕偉氏及び上村安生氏のご教示による。
⑥ 前掲書②と同じ。
⑦ 明治初頭には調査区は畑として利用されていた。
⑧ 伊藤裕偉氏のご教示による。

報告書遺構名	調査時遺構名	調査次数	小地区	報告書遺構名	調査時遺構名	調査次数	小地区	報告書遺構名	調査時遺構名	調査次数	小地区
SX1	№1人骨	1次	D3・E3	SX19	№19人骨	1次	M3	SK36	SK5	1次	D1～F1, D2～F2
SX2	№2人骨	1次	E3	SX20	№20人骨	1次	K3・L3	SK37	SX15	1次	E2
SX3	№3人骨	1次	C2	SX21	№21人骨	1次	L2	SK38	SK4	1次	F3
SX4	№4人骨	1次	E2	SX22	№22人骨	1次	B3・C3	SK39	SK2	1次	E3・F3
SX5	№5人骨	1次	G4	SX23	№23人骨	1次	L4	SK40	SK10	1次	G3・4, H3・4
SX6	№6人骨	1次	M4	SX24	№24人骨	1次	B2・C2	SK41	SK1	1次	D2
SX7	№7人骨	1次	F2	SX25	№25人骨	2次	E2・F2	SK42	SK17	1次	C2・3
SX8	№8人骨	1次	H2・I2	SX26	№26人骨	2次	H3・4	SZ43	SB21	2次	B2～G2, B3～G3, B4～G4
SX9	№9人骨	1次	H2・I2	SD27	SD18	1次	R3・4	SK44	SK22	2次	E3
SX10	№10人骨	1次	C2	SD28	SD16	1次	N2～4	SK45	SK23	2次	E4
SX11	№11人骨	1次	H3	SK29	SK14	1次	M3	SK46	SK26	2次	D3
SX12	№12人骨	1次	I3	SZ30		1次	H2～M2, H3～M3	SK47	SK25	2次	C3・4, D3・4
SX13	№13人骨	1次	K2	SK31	SK13	1次	J4	SK48	SK24	2次	C4・D4
SX14	№14人骨	1次	L4・M4	SK32	SK12	1次	J4	SK49	SK27	2次	B2・3, C2・3
SX15	№15人骨	1次	G2・G3	SB33	SB20	1次	G2・H2	SD50	SD29	2次	B3, C4・5
SX16	№16人骨	1次	K3	SB34	SB19	1次	F2・3, G2～4, H2	SD51	SD30	2次	B2～B5
SX17	SX3	1次	F2	SZ35		1次	B1～G1, B2～G2				
SX18	№18人骨	1次	M4			2次	E2～H2				

第1表　遺構対照表

Ⅵ 遺　物

遺物は、人骨を除く土器等が整理箱に約20箱出土したが、多くは細片のため図示できなかった。

なお、動物遺体のうち貝類の一部だけをPL16に示した。

土器類は、原則として器種別・時代順に、そして土製品・石製品・骨製品・金属製品の順に述べる。

1．弥生時代の土器(1～6)

○ 壷形土器(1・2・5・6)

(1)は後期後半と考えられるもので、口縁部外面に3条の凹線あるいはヘラ描き沈線がめぐる。頸部の外面は表面剥離のため、調整技法は不明である。

(2)は後期のものであろう。SZ35から出土した。口縁部には、貝殻または櫛状工具による刺突がみられる。頸部は櫛目がめぐり、胴部では、波状文と直行する刺突文が交互に施されている。

(5)は胴部付近の破片で、水平にめぐるハケメの間に波状文があり、竹管の刺突が施されている。

(6)は胴部付近の破片で、(5)とほぼ同じパターンでハケメが施されているが、施文原体の幅が狭く波状文が不規則である。

○ 甕(3・4)

(3)はSK42からこれだけが出土した。頸部から胴部の上半分には縦方向のハケメが施されたのち、施文原体の羽状文が刺突されている。残存している胴部の下部には、ほぼ水平の波状文がめぐる。

(4)は中期と考えられるもので、いわゆる近江[1]系の甕で、包含層の出土である。口縁部には刺突があり、頸部・胴部ともハケメが斜めに施されている。

2．古墳～奈良時代の土器(7～24)

○ 土師器壷(7・8)

(7)は元屋敷期の広口壷と思われる。口縁の形態は不明であるが、頸部に突帯がめぐる。3段の羽状の刺突の下にハケメがめぐり、さらにその下に、3個1組で浮文が張り付けてある。

(8)はいわゆる「柳ケ坪型[2]」土器で、時期は古墳時代前期と考えられる。

(9～13)はSK37からの一括出土の土師器である。

(9)はいわゆる瓢壷で丁寧にミガキが施され、貝殻による刺突文が頸部と肩部にめぐる。完形である。

(10)は広口壷の口縁部のみで、胴部以下は出土しなかった。口縁部には刺突があり、頸部にめぐる突帯にも刺突が施されている。

(11)はS字状口縁甕で押引刺突文をもち、口縁部2段目がほぼ垂直に立ち上がることから、赤塚次郎氏の分類[3]によるA類古の廻間Ⅰ式2・3段階と考えられる。

(12・13)は有段高杯で、内外面とも丁寧にミガキが施されている。赤塚氏の編年によると(9)と時期的にもほぼ一致する。

○ 土師器壷(14～18)

(14)はいわゆる瓢壷で、外面に朱が付着している。

(15)は、広口壷で外面及び口縁部の内面はミガキが施されている。

(16)の底部には、製作時に敷いたと思われる葉の葉脈の圧痕がついている。

(17)は、小型丸底壷で外面と口縁部内面に一部縦方向ミガキ後、横方向ミガキが丁寧に施されている。

(18)は手ずくね土器で、調整は内外面ともナデで、底部は完存である。

○ 土師器甕(19～21)

いずれも、奈良時代のものと考えられる。

(19)は内面ヘラ状工具によるなでで、外面はハケメが施されている。

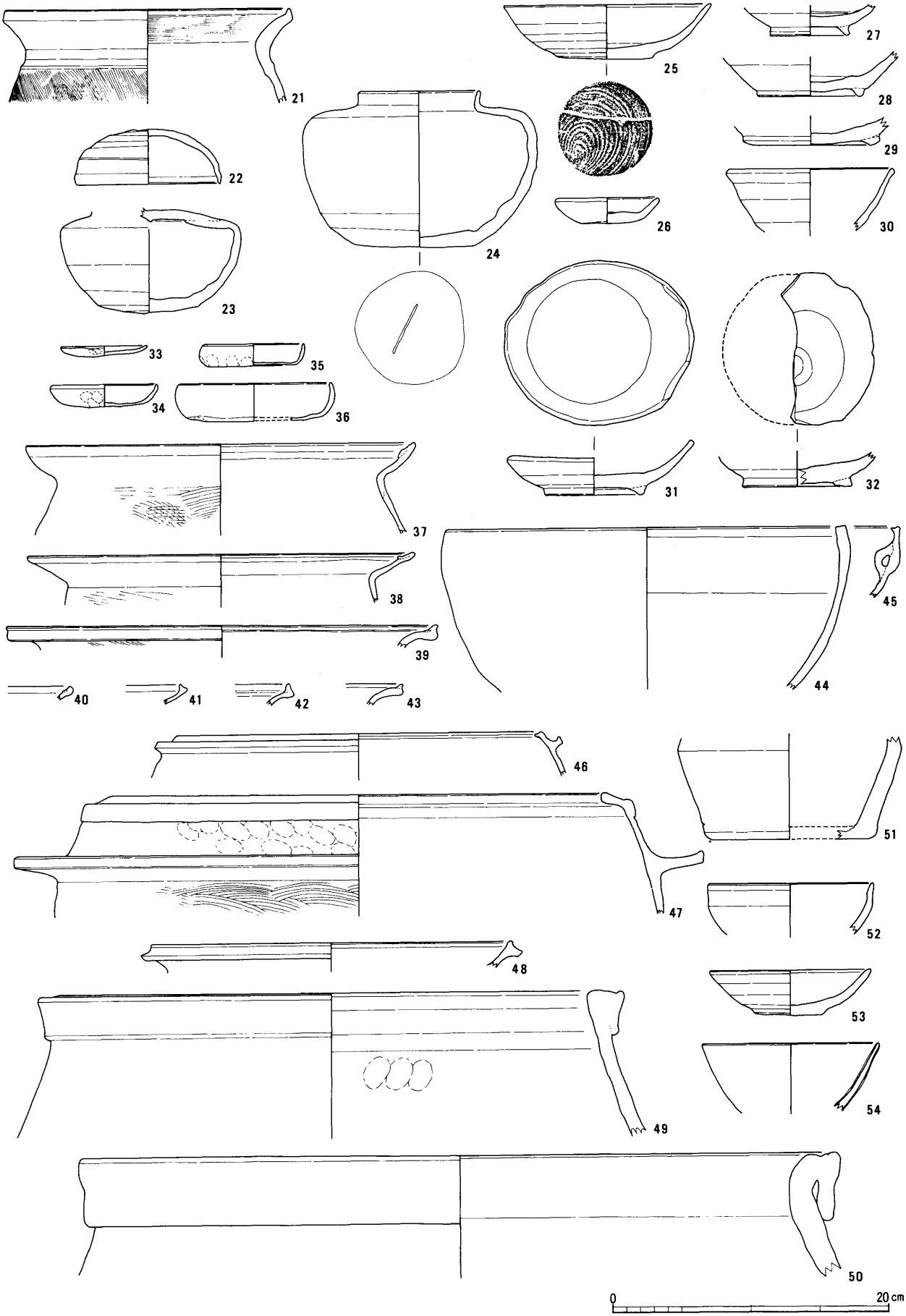
(20)は内外面ともハケメが施され、外面には煤が付着している。SX17出土で、縦につぶれた状況で出土。なお、甕の埋土内から、焼骨が1片出土し、No.17人骨とした。また、古銭(71・72・73)がSX17内の土坑埋土の上層から出土している。(21)は長胴甕で、口縁部内面は水平方向の、外面は斜め方向のハケメが施されている。

○ 須恵器(22～24)

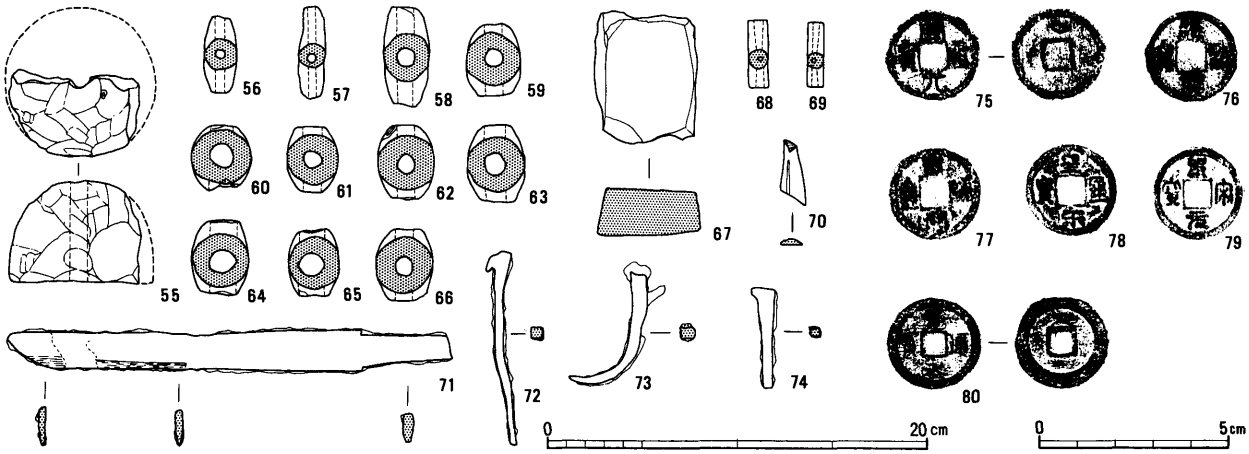
(22)は、杯蓋で包含層から出土した。TK217型式[4]並行で7世紀代のものと思われる。完形である。

(23)は7、8世紀代の平瓶と思われる。包含層か

第９図　出土遺物実測図(1)　［１：４］



第10図　出土遺物実測図(2)　［１：４］



第11図　出土遺物実測図(3)　［１：４，但し、75～80は１：２］

らの出土である。口縁部は出土しなかった。

(24)は、８世紀中葉の短頸壺と思われる。SZ35から出土で、底部にヘラ記号がある。

３．中世以降の土器(25～51)

○　**土師器皿**(25)は、いわゆるロクロ土師器で平安時代末のものと考えられ、底部には糸切り跡が残る。

○　**陶器小皿［山皿］**(26)は、排土で採取した。常滑産で13世紀前半のものと考えられる。

○　**陶器椀［山茶椀］**(27～32)

(27)は、SD28から出土した。小椀で、高台付きの山皿とも考えられる。

(28)はSD27からの出土で、高台にモミ殻痕がある。

(29)は、SZ30から出土した。高台はかなり摩耗しており、意図的に消費地で削られたものと思われる。

(30)は、SK49から口縁部のみが出土した。

特に注目されるのは、転用硯と考えられる(31・32)で、どちらも12世紀代後半のものである。

(31)は、SZ35の黒色砂層から出土した。渥美産のものと考えられる。何らかの理由で、焼成後に現状の形に成形されている。口縁部は研磨して滑らかで、内面底部も墨をすったため、非常に滑らかである。外面に一部墨痕がある。

(32)は包含層出土遺物で、SZ30周辺から出土した。瀬戸猿投産のものと考えられる。口縁部は割れており、その形態は不明であるが、底部では高台の内側が強くなでつけられ、高台接合部分の巾が広い。

○　**土師器皿**(33～36)

(35)は、SK48からの出土で、南北朝時代で14世紀後半のものと考えられる。

(36)は、SZ35からの出土で、16世紀代のものと考えられる。

○　**土師器鍋**(37～43)

いずれも中世の南伊勢系の土師器鍋[5]と考えられる。

(37)はSB43の時期決定にできる唯一の遺物で、15世紀前半のものである。

(38)は15世紀前半、(39)は16世紀のものである。

(40～43)は小片のため、断面のみを図示した。時期は、(40・41)が16世紀代、(42・43)が16世紀後半のものである。

(42)は、SB34の柱穴から出土した。その柱穴は、№15人骨の腰部を掘削している。従って、№15人骨の埋葬時期は16世紀後半以前とすることができる。

○　**土師器内耳鍋**[6](44・45)

いずれも、愛知か静岡から搬入されたと思われる。

(44)はSZ35からの出土で、外面に煤が付着しており、器面の調整は不明である。

(45)はSD28から内耳の部分のみ出土した。細片のため、断面だけを図示した。

○　**土師器羽釜**(46・47)

(46)は16世紀代、(47)は15世紀前半のものと考えられる。

○　**陶器**(48～53)

(48)は片口鉢で、瀬戸産と考えられる。

(49・50)は常滑甕で、その時期は、(49)が16世紀前半、(50)が14世紀最末～15世紀初頭と考えられる。

(51)は常滑産の壷で、内面に鉄分の付着があるため、お歯黒壷と考えられるが、時期は不明である。

(52)は瀬戸産の天目茶椀で、15世紀初頭と考えられる。

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	器高	底径	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	27-4	弥生土器 壺	*B5 包含層	16.2	—	—	外：ヨコナデ　口縁端部ヨコナデ	やや粗	軟	内外：灰白2.5Y7/1 断面：2.5Y2/1	口縁部2/5	口縁部凹線3条 雲母多含
2	19-2	弥生土器 壺	F2 SZ35	12.4	—	—	外：オサエとナデ、施文 口縁端部ナデ 内：オサエのち施文	やや密	良	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：にぶい橙7.5YR7/3	口縁部2/5	貝殻状工具使用
3	16-1	弥生土器 甕	C3 SK42	18.2?	—	—	外：オサエとナデ、施文 口縁端部ヨコナデ 内：工具ナデ	やや密	良	外：橙5YR6/6 内：にぶい橙5YR6/9	1/5	肩部縦方向波状文後刺突 雲母多含黒斑
4	18-4	弥生土器 甕	M4 包含層	16.8	—	—	外：ハケメ 口縁端部ヨコナデ後刺突 内：ハケメ	やや粗	良	外：灰白5YR7/3 内：にぶい橙7.5YR7/3	口縁部1/5	近江系・受口状口縁 内外面とも炭化物付着
5	20-2	弥生土器 壺	J4 SK32	—	—	—	外：ハケメ 内：ナデ	やや密	やや軟	外：明赤褐5YR5/8 内断面：明赤褐2.5YR5/8	胴部片	
6	20-3	弥生土器 壺	F4 包含層	—	—	—	外：ハケメ 内：ナデ	やや密	良	内外面：にぶい黄橙 10YR7/3	胴部片	外面に黒斑
7	24-2	土師器 壷	E3 包含層	10.4 頸部径	—	—	外：ハケメ・刺突・ミガキ、粘土張り付け 内：剥離のため不明	やや粗	良	外：明赤褐2.5YR5/8 内：淡橙色7.5YR8/4	頸部1/7	広口壺、朱 頸部1条の突帯
8	12-2	土師器 壷	F2 SZ35	18.2	—	—	外：ハケメ・ミガキ 口縁端部ヨコナデ・施文 内：ヨコナデ・ナデ	やや粗	良	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：にぶい橙7.5YR7/3	口縁部1/3	柳ケ坪型土器、雲母含 口縁部内面ヘラ状工具による施文
9	1-3	土師器 壷	E2 SK37	6.6	17.9	—	外：ハケメ・刺突・ミガキ 口縁端部ヨコナデ 内：ミガキ・ナデ	やや密	良	内外面：橙色5YR6/6	完形	瓢壺。貝殻による刺突 外面肩部以下は横方向後縦方向ミガキ
10	1-2	土師器 壷	E2 SK37	14.6	—	—	外：ハケメ　口縁端部ハケメ・刺突後ヨコナデ 内：ナデユビオサエ	やや密	良	内外面：橙色5YR7/6	口縁部完存 頸部1/8	広口壺 頸部に刺突の施された突帯1条
11	3-1	土師器 台付甕	E2 SK37	19.0	28.4	9.0	外：ハケメ・ナデ 口縁端部ヨコナデ 内：ナデ・ハケメ	密	良	外：にぶい橙7.5YR7/3 内：にぶい褐7.5YR6/3	1/2	S字状口縁甕 肩部沈線2条、ハケメ荒く深い
12	12-1	土師器 高杯	E2 SK37	24.0	16.3	11.0	外：タタキ後ミガキ 口縁端部ヨコナデ 内：ミガキ　脚部内面ハケメ	やや粗	良	外：橙7.5YR7/6 内：にぶい橙7.5YR7/4	ほぼ完形	内外面とも炭化物付着、脚部外面に黒斑、3方向透孔は外から穿孔
13	11-1	土師器 高杯	E2 SK37	23.0	16.8	10.6	外：タタキ後ミガキ 口縁端部ヨコナデ 内：ミガキ　脚部内面ナデ	やや密	良	外：橙5YR6/8 内：明赤褐5YR5/8	ほぼ完形	口縁部黒斑 3方向透孔は外から穿孔
14	2-1	土師器 壷	試掘 試掘坑6	13.0	—	—	外：ハケメ後ミガキ　口縁端部ナデ 内：ナデ・ミガキ	密	良	外：赤10R4/8 内：橙7.5YR7/6	口縁部1/3	瓢壺、外面朱、雲母含
15	22-1	土師器 壷	H2 SZ30	15.0	25.3	5.8	外：ミガキ・ヨコナデ 口縁端部ヨコナデ 内：板ナデ	やや密	良	内外面：橙2.5YR6/8	7/10	広口壺 底部はオサエ・ナデでかなり摩耗
16	10-1	土師器 壷	C4 包含層	—	—	7.2	外：ミガキ 内：ナデ・板ナデ	やや密	良	外：橙5YR6/6 内：にぶい橙5YR7/4	底部完存	広口壺？ 底部に葉の圧痕
17	9-1	土師器 壷	F2 SZ35	9.1	8.2	—	外：縦方向後横方向ミガキ 内：ミガキ・板ナデ	やや密	良	内外面：明赤褐5YR5/8	4/5	小型丸底壷 肩部炭化物付着
18	8-8	土師器 壷	I2 SZ3O	—	—	5.1	外：ナデ 内：ナデ	やや密	良	外：にぶい黄褐10YR7/2 内：灰黄褐10YR6/2	底部完存	手ずくね
19	6-1	土師器 甕	E2 SK36	28.0	—	—	外：ハケメ　口縁端部ナデ 内：ヘラ状工具によるナデ	やや密	良	外：にぶい赤褐2.5YR5/3 内：にぶい赤褐2.5YR5/4	口縁部1/8	
20	4-1	土師器 甕	F2 SX17	28.0	—	—	外：ハケメ　口縁端部ヨコナデ 内：ハケメ	やや密	良	外：にぶい橙5YR6/3 内：にぶい橙7.5YR7/3	1/3	埋土に火葬骨1片（No.17人骨） 外面炭化物付着
21	15-2	土師器 甕	C2 SZ35	20.4	—	—	外：ナデ・ハケメ 口縁端部ヨコナデ 内：ハケメ	やや密	良	外：にぶい橙2.5YR6/4 内：にぶい橙5YR7/4	口縁部1/8	長胴甕
22	28-3	須恵器 杯蓋	*F4 包含層	10.2	3.9	—	外：ロクロヘラケズリ・ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密	硬	外：青灰10BG5/1 内：灰白5Y7/2	完形	TK217並行 ヘラ切り未調整、浅い沈線が1条巡る
23	10-2	須恵器 平瓶	C5 包含層	—	—	7.0	外：ロクロヘラケズリ、ナデ 内：ロクロナデ、ナデ	やや密	硬	内外面：灰白N7/—	胴部完存	底部のヘラケズリはロクロ右回転
24	10-3	須恵器 短頸壺	B1 SZ35	8.5	11.2	7.8	外：ロクロナデ・ロクロヘラケズリ 内：ロクロナデ	やや密	硬	内外面：青灰5B6/1	完形	歪大きく、焼き膨れ。底部ヘラ記号 底部高台剥離跡
25	2-2	土師器 皿	T3 包含層	15.0	3.9	6.8	内外面：ロクロナデ　底部回転糸切り痕	やや密	良	内外面：黄橙7.5YR8/8	口縁部1/2 底部完存	ロクロ土師器
26	5-3	陶器 皿	南排土	7.6	1.9	4.4	外：ヨコナデ・ロクロナデ 回転糸切り痕 内：ナデ	密	良	内外面：明褐灰7.5YR7/2 断面灰白2.5Y8/2	4/5	山皿 常滑産
27	6-2	陶器 小椀	N3 SD28	—	—	5.8	外：ロクロナデ　高台部ヨコナデ 内：ロクロナデ	密	良	内外面：灰白10Y7/1	底部完存	小椀（山皿）　内面に自然釉と高台の一部張り付き 瀬戸猿投産
28	6-3	陶器 椀	R4 SD27	—	—	4.8	外：ロクロナデ　高台部ヨコナデ 内：ロクロナデ	密	良	内外面：灰黄色2.5Y7/2	底部完存	山茶椀　高台部モミガラ圧痕 常滑産
29	8-5	陶器 椀	K2 SZ30	—	—	10.1	外：ロクロナデ　高台部ヨコナデ 内：ロクロナデ	密	良	内外面：灰黄色2.5Y7/2	底部1/2	山茶椀　高台摩耗 常滑産
30	26-8	陶器 椀	*C3 SK49	12.0	—	—	内外面：ロクロナデ	密	良	外：灰白5Y7/1 内：灰白N8/—	口縁部1/8	山茶椀 渥美産？
31	17-1	陶器 椀	F2 SZ35	(12.2)	3.8	7.2	外：ロクロナデ 口縁端部焼成後研磨 内：ロクロナデ 高台部ヨコナデ回転糸切り	密	良	外：灰白5Y7/1 内：灰白N8/—	転用硯なら完形	山茶椀　転用硯 渥美産？外面に墨跡
32	8-4	陶器 椀	J3 SZ30	—	—	8.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 高台部ヨコナデ回転糸切り	やや粗	良	外：灰白5Y8/1 内：灰白7.5Y7/1	底部1/2	山茶椀　転用硯 瀬戸猿投産
33	7-6	土師器 小皿	E4 PIT1	6.2	0.8	—	外：ユビオサエ　口縁端部ナデ 内：ユビオサエ	密	良	内外面：淡橙5YR8/3	完形	外面に指圧痕

第2表　出土遺物観察表(1)　（出土位置において、*印がついているのは第2次調査。以下第5表まで同様）

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	器高	底径	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
34	8-1	土師器 小皿	F2 SZ35	7.6	1.6	—	外：ユビオサエ後ナデ 内：ナデ	やや密	やや良	内外面：淡橙5YR8/3	2/3	
35	15-4	土師器 皿	F2 SZ35	7.3	1.6	—	外：ユビオサエ　口縁端部ナデ 内：ユビオサエ	やや密	良	内外面：淡黄橙10YR8/3	完形	外面に指圧痕
36	26-6	土師器 皿	＊E4 SK48	11.3	2.8	—	外：ナデ　口縁端部ヨコナデ 内：ナデ	やや密	良	外：炭化物付着で不明 内：明褐灰5YR7/1	口縁部1/2	外面の全てと内面の一部に炭化物付着
37	28-2	土師器 鍋	＊C4 SB43	28.0	—	—	外：ハケメ　口縁端部ヨコナデ 内：ナデ	やや密	軟	外：褐灰5YR6/1 内：灰白7.5YR8/2	口縁部1/5	外面に炭化物付着 内面に接合痕
38	18-2	土師器 鍋	L3 包含層	28.0	—	—	外：ハケメ　口縁端部ヨコナデ 内：ナデ	やや粗	良	外：褐灰5YR5/1 内：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部1/11	外面に炭化物付着
39	18-1	土師器 鍋	N3 包含層	31.2	—	—	外：ハケメ　口縁端部ヨコナデ 内：ナデ	やや粗	良	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：にぶい橙5YR7/4	口縁部1/8	外面に炭化物付着
40	26-5	土師器 鍋	＊E4 SK48	—	—	—	外：—　口縁端部ヨコナデ 内：—	やや密	良	内外面：にぶい橙5YR7/3	口縁部片	外面の一部表面剥離
41	26-2	土師器 鍋	＊B3 SD50	—	—	—	外：—　口縁端部ヨコナデ 内：—	やや密	良	内外面：浅黄橙5YR8/4	口縁部片	
42	30-1	土師器 鍋	G2 SB34	—	—	—	外：—　口縁端部ヨコナデ 内：—	やや密	良	内外面：暗赤灰2.5YR3/1	口縁部片	No.15人骨を切るSB34の柱穴埋土
43	16-3	土師器 鍋	N4 SD28	—	—	—	外：—　口縁端部ヨコナデ 内：—	密	良	外：明褐灰7.5YR7／2 内：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部片	内外面に炭化物付着
44	14-1	土師器 鍋	G2 SZ35	29.0	—	—	外：調整不明　口縁端部ヨコナデ 内：ナデ	密	良	外：不明 内：にぶい橙5YR7/4	口縁部1/8	内耳鍋 外面に厚く炭化物付着
45	16-2	土師器 鍋	N4 SD28	—	—	—	外：ナデ，オサエ 口縁端部ヨコナデ，ナデ 内：ナデ	密	良	外：不明 内：明褐灰7.5YR7/2	口縁部片	内耳鍋 内外面に炭化物付着
46	13-3	土師器 羽釜	L3 包含層	26.4	—	—	外：ヨコナデ　口縁端部ナデ 内：ナデ	やや密	良	外：にぶい橙7.5YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部1/4	かなり歪んでいる
47	21-1	土師器 羽釜	L3 包含層	35.9	—	—	外：オサエ後ナデ，ハケメ 口縁端部ヨコナデ 内：工具によるナデ	粗	良	内外面：浅黄橙7.5YR8/3	口縁部1/4	
48	26-4	陶器 鉢	＊E4 SK48	26.0	—	—	外：ヨコナデ　口縁端部ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗	硬	内外面：オリーブ灰 2.5GY6/1	口縁部1/8	片口鉢、瀬戸産
49	19-1	陶器 甕	N3 表土	42.4	—	—	外：ナデ　口縁端部ヨコナデ 内：ユビオサエ	やや密	良	外：にぶい橙5YR6/4 内：橙5YR6/8	口縁部1/8	常滑産
50	27-1	陶器 甕	＊E3 SK44	54.8	—	—	外：ヨコナデ　口縁端部ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密	良	内外面：橙5YR6/6	口縁部1/7	常滑産 口縁部は特に強くロクロナデが残る
51	26-7	陶器 壺	＊D3 SK49	—	—	11.6	外：ロクロヘラケズリ 内：ロクロナデ	やや密	硬	外：鉄釉・褐灰5YR4/1 内：不明	底部1/5	常滑産 内面鉄分付着、お歯黒壺か?
52	8-2	陶器 椀	L3 包含層	12.0	—	—	外：ロクロナデ 口縁端部ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密	良	内外面：鉄釉・黒～赤褐色	口縁部1/6	天目茶椀、瀬戸産
53	14-2	陶器 皿	北排土	11.6	3.3	5.0	外：ロクロナデ　口縁端部ヨコナデ 内：ロクロナデ	密	良	外：灰白2.5YR8/2 内：灰黄2.5Y7/2	ほぼ完形	瀬戸美濃産　緑釉皿 口縁部に鉄釉：にぶい赤褐5YR4/3
54	13-4	磁器 椀	I2 SZ30	13.0?	—	—	外：ロクロナデ　口縁端部ヨコナデ 内：ロクロナデ	密	良	断面：灰色 釉：オリーブ灰	口縁部1/12	青磁椀、竜泉窯産 蓮花弁の削り出し

第3表　出土遺物観察表(2)

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 全長	径	孔径	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	残存重量	備考
55	20－1	紡錘車	I2・SZ30	5.6?	7.8?	1.2?	外：ケズリ？	やや密	軟	外：にぶい橙2.5YR6/4	1/2	157.9g	軸部使用痕　外面かなり摩耗
56	7－4	土錘	F2・PIT4	4.0	1.6	0.5	外：ナデ	密	良	外：浅黄橙7.5YR8/3	ほぼ完形	11.0g	
57	23－5	土錘	試掘坑5	4.9	1.3	0.4	外：ナデ	やや密	良	外：橙5YR6/6	ほぼ完形	6.8g	
58	7－2	土錘	G2・PIT9	5.2	2.4	0.9	外：ナデ	密	良	外：にぶい橙10YR7/2	ほぼ完形	28.1g	
59	8－6	土錘	G2・SZ35	3.8	3.0	0.9	外：ナデ	やや密	良	外：灰白10YR8/2	完形	23.7g	
60	26－3	土錘	＊B4・SD51	3.4	3.1	1.2	外：ナデ	やや密	良	外：灰白5YR8/2	ほぼ完形	24.3g	
61	26－1	土錘	＊B3・SD51	3.4	2.7	0.9	外：ナデ	密	良	外：灰白5YR8/1	ほぼ完形	18.0g	表面摩耗
62	7－5	土錘	F2・PIT4	3.8	3.0	1.0	外：ナデ	やや密	良	外：灰白10YR8/3	ほぼ完形	28.8g	
63	7－3	土錘	G2・PIT7	4.0	3.0	1.2	外：ナデ	密	良	外：にぶい橙10YR7/3	完形	28.3g	黒斑
64	6－4	土錘	G2・PIT12	4.2	2.8	1.2	外：ナデ	密	良	外：灰白10YR8/2	完形	25.4g	
65	7－1	土錘	G4・PIT1	3.5	2.6	1.2	外：ナデ	やや密	良	外：灰白10YR8/1	ほぼ完形	23.0g	
66	8－7	土錘	F2・SZ35	3.8	3.0	0.9	外：ナデ	やや蜜	良	外：灰白10YR8/1	ほぼ完形	25.1g	

第4表　出土遺物観察表(3)

(53)は瀬戸美濃産の縁釉皿で、15世紀後半で大窯以前のものと考えられる。

○ 磁器・青磁椀(54)

SZ30からの出土で、竜泉窯産[7]と考えられる。

4．土製品・石製品・骨製品(55～70)

(55)は、土製紡錘車で軸内面に使用痕があり、その形態から、古墳時代のもの[8]と考えられる。

(56～66)は土錘で完形が多いものの、その時期は不明である。

(67)は砥石で、2面が使用面である。

(68・69)は碧玉製の管玉で、No.9人骨(68)及びその周辺(69)から出土した。いずれもSX9の埋土からの遺物と考えられる。

(70)は骨製の簪の一部で、試掘調査時に試掘坑5から出土した。

5．金属製品(71～80)

(71)は鉄製の小刀で、包含層からの出土である。木質が一部付着している。

(72～74)は鉄製の釘で、特に(73・74)はNo.6人骨及びその周辺からの出土である。

○ 古銭(75～80)

(75～77)はSX17出土である。(75)は、開元通寶で初鋳は621年である。(76)は天聖元宝で初鋳は1023年である。(77)は判読不明であった。

(78)は皇宋通寶で初鋳は1039年。SZ35から出土。

(79)は聖宋元宝で初鋳は1101年。北排土から採取。

(80)は寛永通寶で、試掘坑8から出土した。

［註］

①・② 下村登良男・村上喜雄『おばたけ遺跡発掘調査報告 第4次』鳥羽市教育委員会 1972

③ 赤塚次郎『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 1990

④ 田辺昭三『陶邑古窯址群I』平安学園考古クラブ 1966

⑤ 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol.1』三重歴史文化研究会 1990

⑥ 後藤健一『長谷元屋敷遺跡』湖西市教育委員会 1987

⑦ 亀井明徳氏(専修大学教授)のご教示による。亀井氏の編年の第3期にあたる。

⑧ 河北秀実「三重県出土のいわゆる紡錘車の形態とその時期」『Mie history vol.3』三重歴史文化研究会1991及び河北氏のご教示による。

No.	登録No.	器　種	出土位置 遺　構	法　量　(cm)	残存度	残存重量	備　考
67	23－7	石製品　砥石	F2・SZ35	残存長：7.4　残存巾：5.4　残存高：2.6	部分	142.1g	2面の使用面
68	7－7	石製品　管玉	H2・SX9	長さ：3.5　径：1.0　孔径：0.2	完形	6.0g	碧玉製、外面磨き、No.9人骨の頸部から出土
69	7－8	石製品　管玉	I2・SZ30	長さ：3.4　径：0.8　孔径：0.2	完形	4.2g	碧玉製、外面磨き、SX9埋土か？
70	16－4	骨製品　笄	試掘坑5	残存長：3.5　残存幅：1.3	部分	0.9g	
71	29－1	金属製品　小刀	G3包含層	残存長：23.4　残存幅：1.9　残存厚さ：0.4	完形	79.6g	鉄製、木質部が一部付着
72	29－4	金属製品　釘	G2・PIT8	残存長：10.3　残存幅：0.6	先端欠	18.5g	鉄製
73	29－3	金属製品　釘	L4・SX6	残存長：7.4　残存幅：0.6	完形	17.2g	鉄製
74	29－2	金属製品　釘	L4包含層	残存長：5.5　残存幅：0.5	先端欠	9.3g	鉄製、No.6人骨付近の崩壊土から出土
75	29－5	金属製品　古銭	G2・SX17	直径2.4	完形	3.4g	「開元通寶」
76	29－6	金属製品　古銭	G2・SX17	直径2.3	完形	5.3g	「天聖元宝」
77	29－7	金属製品　古銭	G2・SX17	直径2.3	完形	3.3g	不明
78	20－4	金属製品　古銭	F2・SZ35	直径2.4	完形	3.0g	「皇宋通宝」
79	29－9	金属製品　古銭	北排土	直径2.3	完形	3.2g	「聖宋元宝」
80	29－10	金属製品　古銭	試掘坑8	直径2.4	完形	2.9g	「寛永通寶」

第5表　出土遺物観察表(4)

V　人骨の調査について

1．はじめに

前言でも述べたが、人骨の調査という面から考えると、試掘調査で人骨の存在が全く認識されなかったのは残念なことで、本調査後、試掘時の遺物を再確認すると、わずかに人骨片や粉末状となったものが確認できた。おそらく過去に撹乱を受けた人骨が包含層中に存在していたと考えられる。

今後、海岸地域の砂地の調査をする場合は、試掘時の遺物についても、また包含層中の砂の分析を十分にしなければならない。さもないと、今回のように人骨を見逃す可能性が高いといえる。

さて、人骨の鑑定・分析については、江原昭善教授にご協力をいただき、現地指導を２回、当センターでの事後指導を２回、計４回の指導を行っていただいた。

なお、江原先生には、出土人骨の詳細な報告である「３．出土人骨について」の玉稿を賜り、また人骨一覧表(第６表)及び人骨の報告用写真の撮影とレイアウトについてご指導を賜った。

2．人骨の出土状況について

遺構の層位でも述べたが、第Ⅲ層では遺構検出ができなかったので、人骨が確認できた第Ⅵ層での検出を行った。従って明確な墓坑は確認できなかった。

詳細は、第６表・人骨出土状況図(第14～16図)・人骨出土状況写真(PL.６～10)に譲ることとし、ここでは、特徴のあるものについて列記しておく。

No.３人骨とNo.10人骨はいずれも子供の頭蓋骨だけが出土した。興味深いのはどちらも、頭蓋底部を下にし、顔面を西に向けていたことである。

また、No.10人骨を取り上げたあと、下層から人骨が出土したため、No.24人骨とした。しかし、残念ながら、No.10人骨とNo.24人骨との関係は不明である。No.24人骨の墓坑は、No.10人骨の検出時には確認できていなかった。

No.５人骨は江原先生の第１回現地指導の際、現地観察の所見で大腿骨に鼠害があることを指摘された。浅く埋葬されたか、あるいは死体を地表面に放置したと考えられるが、当遺跡は砂地であることから埋葬されてから、地下にもぐった鼠がかじったと思われる。なお、鼠害は、No.14人骨でも確認された。

No.６人骨は南壁の土層を確認するため、壁を削っているときに確認された人骨である。しかし、雨で南壁が崩壊し、その土砂の中から取り上げただけである。

No.８，９人骨は、台風18号による雨により北壁が崩壊し、原位置から南に基盤層(淡褐砂)ごと移動した。その上に排土及び山の斜面の土砂が厚く上に堆積した状態となり、人骨を取り上げただけである。従って、出土時の写真のみで、実測は全く出来なかった。

No.９人骨は首の骨に管玉(68)が、ささった状態で出土した。(PL.８)また、墓坑と考えられる人骨周辺の埋土(黒色砂)からも管玉(69)が出土している。

No.16人骨を検出したとき、頭部だけであったので、慎重に周囲を検出していったが、結局頭蓋骨以外の骨はなにも出土しなかった。

No.23人骨は南壁の崩壊により確認された。最初位置的にもNo.６人骨と思っていたが、前述のようにNo.６人骨は崩壊土の中から出土した。No.23人骨は調査区を拡張し、墓坑の検出が出来たが、再度の雨によって頭蓋骨部分が基盤層ごと崩壊したため、その部分の実測は出来なかった。

No.11人骨・No.21人骨は遺構検出中、小片が出土したため、地点だけを記録して取り上げた。

No.22人骨は第１次調査区のもっとも東で出土した。黒色土の中から検出され、淡褐砂を少し掘り込んでいた。

No.26人骨は残存状態が非常に悪く、また槇の根による撹乱も受けていた。

人骨No.	埋葬施設	埋葬状況	年齢	性別	残存状況	特記事項	体軸	頭位	頭の向き
1	−	伸展葬	熟年	男性	ほぼ完全な人骨	中世以降の特徴を持つ	北東	北東部	左向き
2	−	伸展葬	熟年	男性	下肢の骨のみ	頑丈な人。	北北東	なし	---
3	−	−	子供	−	頭骸骨のみ		---		顔面西向き
4	−	伸展葬	老年	女性	骨盤と下肢骨	上部は撹乱により破壊消滅	北東	(北東部)	---
5	−	伸展葬	老年	女性	ほぼ完全な人骨	骨の病気の痕跡あり、鼠害あり	東北東	(東北東部)	---
6	−	−	熟年	男性	上肢骨と下肢骨の一部。	拡張掘削前に壁ごと崩落	---	---	---
7	墓坑	伸展葬	老年	男性	頭骸骨と足の一部	残存悪い	北北東	北北東部	左向き
8	−	伸展葬	−	−	残存悪い	古い骨の可能性あり	(北東)	北東	---
9	−	伸展葬	−	−	残存悪い	古い骨の可能性あり	(北東)	北東	左向き
10	−	−	−	−	頭骸骨のみ	NO.24と関連ありか	---	---	顔面西向き
11	−	−	−	−	骨片のみ	残存悪い	---	なし	---
12	−	屈葬	老年	男性	ほぼ完全な人骨	上肢が華奢で下肢が頑丈、縄文人の特徴	北東	北東部	右向き
13	石敷	−	−	−	骨片のみ	残存悪い	---	---	---
14	−	伸展葬	老年	女性	首から下が残存。		北東	(北東部)	---
15	−	伸展葬	老年	男性	ほぼ完全な人骨	脛骨が偏平で江戸時代以前の特徴、柱穴から中世の土師器	北東	北東部	上向き
16	−	−	−	−	後頭部と上顎部のみ	残存悪い	(北東)	頭部のみ	---
17	−	−	−	−	火葬骨片 (SX17)		---	---	---
18	−	伸展葬	熟年	男性	右上肢と下肢の一部	撹乱されている、鼠害あり	北東	---	---
19	−	−	−	−	下肢骨の一部		---	---	---
20	−	伸展葬	成年	男性	ほぼ完全な人骨	全体的には女性的な特徴	東北東	東北東部	右向き
21	−	−	−	−	一部のみ残存		---	---	---
22	−	伸展葬	熟年	男性	ほぼ完全な人骨	頑丈な骨、地中で撹乱	東北東	東北東部	右向き
23	墓坑	屈葬	熟年	女性	ほぼ完全な人骨		北北東	北北東部	右向き
24	−	伸展葬	未成年	女性	ほぼ完全な人骨	No.10と関連ありか	東北東	東北東部	右向き
25	−	伸展葬	熟年	男性	ほぼ完全な人骨	2次調査　巨大な男性	東北東	東北東部	右向き
26	−	伸展葬	成人	女性	ほぼ完全な人骨	2次調査残存悪い	北東	北東部	---

第6表　出土人骨一覧表

3．出土人骨について

椙山女学園大学教授　江原　昭善

調査にいたる経過

すでに前言にも述べられているので割愛するが、試掘調査結果で、人骨の存在が全く認識されなかったことと、重機による表土掘削のための人骨の破損等が少なからずあり、残念なことである。

さて、人骨は第１次調査の表土掘削中に確認され、調査の進展に伴い、少なくとも20数体の人骨が出土したため、三重県埋蔵文化財センターより調査協力の依頼があり、その同定を江原昭善が担当することになった。

現地での鑑定及び人骨の取り上げ方や事後処理の指導を２回、三重県埋蔵文化財センターでの鑑定及び写真撮影等の事後指導を２回行った。

最終的には、第１次調査で24体、第２次調査で２体の計26体の人骨が確認された。なお、表土掘削中及び排土等から出土した人骨片は出土位置が不明なことと小片のため、記述は省略した。

考古学的調査から推定される遺跡の時代

最古と推定される包含層(黒色砂)からは、古墳時代の須恵器に混じって、弥生時代中期の土器も伴出しており、さらに奈良から室町時代の土師器・須恵器・陶器・磁器なども出土している。しかし、遺物の大部分は古墳時代と鎌倉・室町時代のもので、この期間長期にわたって墓地として利用されていた可能性が強い。人骨は、考古学的遺物を伴出するもの少なくないが、墓坑内の副葬品と考えられるものは確認されなかった。また人骨は互いに密集しており、また砂層で撹乱を受けていたため、層序性が不明確で、個々の出土人骨の時代を考古学的に特定することはほとんどできなかった。

出土人骨について

すでに述べたように、遺物の時代が弥生時代中期から室町時代にまで広がっているため、個々の人骨の時代を特定することは、きわめて困難である。したがって、全個体をまとめて処理することは無意味なので、個々の人骨について観察・計測・記載的項目を通じて、各個体の考察をすることにした。

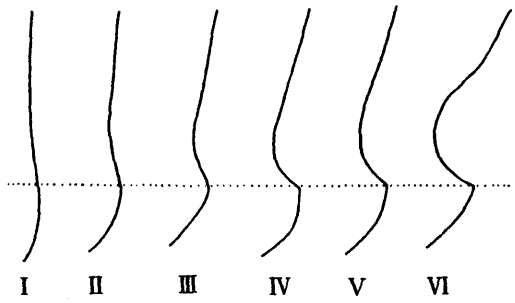
とくに非計測形質の分類については、第７表の項目について、第12図に示されているような分類基準に従った。

Arcus superciliaris	[眉上弓]	: ＋＋＋　＋＋　＋　±　－
Arcus supraorbitalis	[眼窩上弓]	: ＋＋＋　＋＋　＋　±　－
Grabella	[眉間]	: Broca　Ⅰ　Ⅱ　Ⅲ　Ⅳ　Ⅴ　Ⅵ
Squama frontalis	[前頭鱗]	: 膨隆して円味　±　偏平
Tuber frontale	[前頭結節]	: ＋＋　＋　±　－
Squama occipitalis	[後頭鱗]	: 膨隆して円味　±　偏平
Protuberantia occipitalis externa	[外後頭結節]	: Broca　Ⅰ　Ⅱ　Ⅲ　Ⅳ　Ⅴ　Ⅵ
Processus mastoideus	[乳様突起]	: ＋＋＋　＋＋　＋

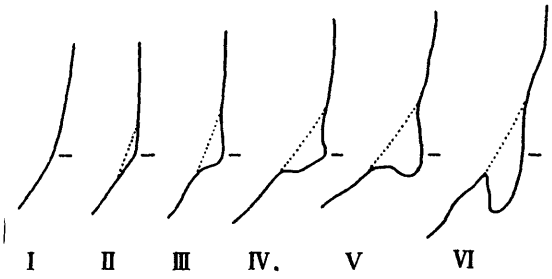
＋＋＋：極めて強く発達　　＋＋：中程度の発達　　＋：弱い発達
±：かすかな発達　　－：発達皆無

下顎下縁の形態	Keiter	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
下顎枝後縁部の形態	H.E.Schultz	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ		
下顎角後縁部の形態	H.E.Schultz	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
下顎内側面の形態	Ehara	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
オトガイ三角の形態	H.E.Schultz	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ

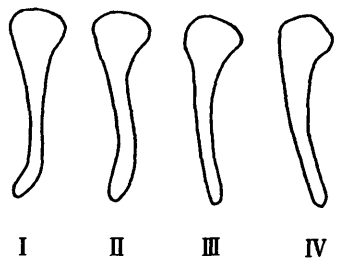
第７表　非計測形質分類の項目と基準一覧



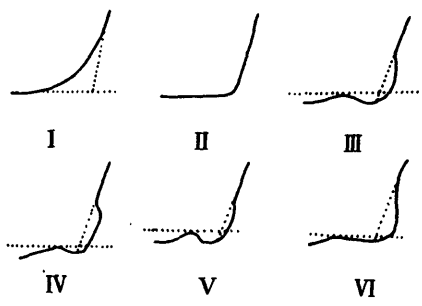
a. 眉上弓の発達度（Broca）



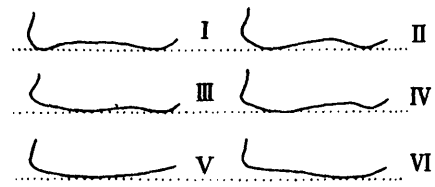
b. 外後頭結節の発達度（Broca）



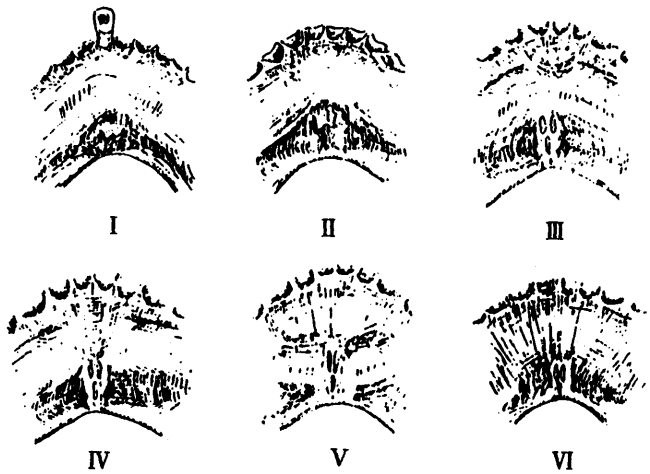
c. 下顎枝後縁部の形態（H. E. Schultz）



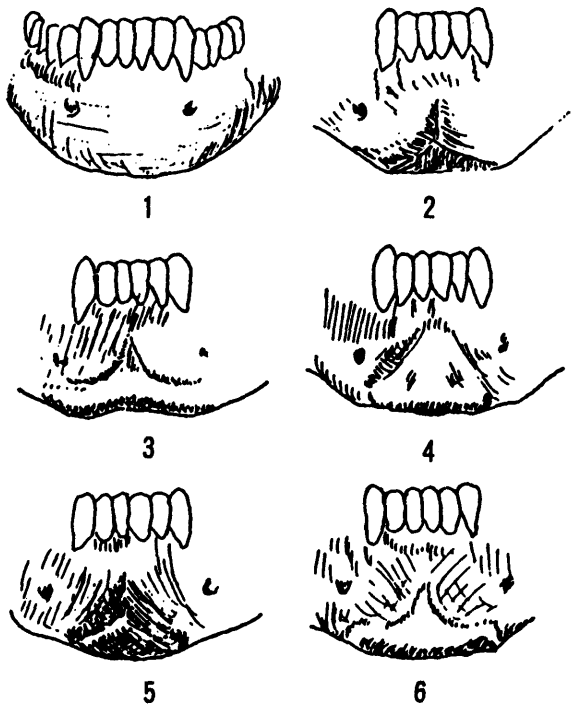
d. 下顎角部の形態（H. E. Schultz）



e. 下顎下縁部の形態（Keiter）



f. 下顎前内側面の形態（Ehara）



g. オトガイ三角の形態（H. E. Schultz）

第12図　非計測形質分類基準

No.1　人骨　(PL６－１・２、PL７－１、PL11－１～５：第14図)

体軸は北東方向、顔面は左向きで伸展葬。再埋葬や撹乱の痕跡は見られず、ほぼ全身が残存しており、破損も比較的少なく、骨質も良好である。

以下にも述べるような諸特徴から、熟年男性と推定される。

歯式図(第13図)でも見られるように、残存している歯では齲歯も見られず、歯牙の咬耗もさほど強くはない。

上顎の各歯牙は健全であるのに対して、下顎では左右の頬歯列の一部に歯槽膿漏が認められる。咬合形式は鋏状で、スピー曲線もある程度見られる。

頭骨では左右頬弓部及び右鼻根部がわずかに欠損するのみで、ほぼ完全に残存している。

眉上弓(Arcus superciliaris)及び眼窩上弓(Arcus supraorbitalis)は、比較的よく発達しており、Grabella(眉間)発達度はBrocaⅢ。前額部はやや後方に傾斜しているが、少し丸味があり、前頭結節(Tuber frontale)の発達は強くはないが、認められる。頭頂結節(Tuber parietale)の発達はかなり顕著である。冠状縫合および人字縫合は完全に開いているが、矢状縫合だけは完全に閉鎖消失している。乳様突起は比較的大きく頑丈な印象を与える。外後頭隆起の発達は顕著で、BrocaⅤに匹敵する。最上項線及び上項線の発達は強い。

第８表に見られるように、頭長幅示数は75.53で、長頭に近い中頭であることがわかる。頭長高示数(73.94)や頭幅高示数(97.89)にも見られるように、頭の高さは側面観や後面観では、中程度かもしくは高い方に属する。

以上の諸特徴は、No.１人骨が「熟年男性」であることを示している。

顔面部では、頬骨弓は左右とも破損しているが、Virchow による顔示数(132.65, leptoprosop)及びKollmann 上顔示数(71.43, hyperlepten)でもわかるように、狭顔の傾向を示す。

下顎骨について、側面観における下縁部の形態は、KeiterⅣに相当する。Eminentia lateralis の発達は弱く、下顎体は全体として薄い印象を与える。下顎角の形状はH.E.SchultzⅢ、下顎枝後縁部の後面観では、H.E.SchultzⅡ。下顎前内面部の形態はEharaⅥで、中世以降に見られる特徴が強い。

上肢骨では、上腕骨・橈骨・尺骨のいずれも、左右ともに完全なかたちで保存されており、その頑強さを暗示する形態や筋付着部の発達などから、上肢の頑丈な男性であったと思われる。

下肢骨では、大腿骨の粗線(Linea aspera)の発達はさほど強くはない。しかし、上骨体断面示数(左81.25 右83.87)に見られるように、偏平性が強い。

脛骨では栄養孔位断面示数(左73.53 右75.76)が示すように、脛骨偏平性が認められる。

腓骨では内側稜(Crista medialis)の遠位部に骨性沈着があり、稜が肥厚している。しかし、生前には生理的に特に支障はなかったはずである。

下肢骨のうち、大腿骨最大長及び脛骨最大長から身長を推定すると、Pearson(1898)によれば157.39cm、Anderson(1975)のモンゴロイドにおける推定式では、161.02cmなる値が得られる。

以上の考察を総合すると、中世的印象の強い熟年男性と推測することができよう。

No.2　人骨　(PL７－１・２：第14図)

右側の上腕骨・橈骨・尺骨が解剖学的に配列して出土。南西方向に少し離れて左右の脛骨と腓骨が出土しているが、いずれも骨端部は破損している。この上肢と下肢は同一個体に属するものと思われる。

脛骨ではとくに偏平性は認められず、栄養孔位断面示数は、右77.14 左81.82で、いずれも euryknem に属する。

この人骨は、後で新たな埋葬のために撹乱されて、右上肢の一部と左右下腿の一部が残存したと推測される。

熟年男性のものと思われる。

No.3　人骨　(PL７－３、PL11－６：第14図)

頭蓋骨のみ出土。頭蓋底部を下にし、顔面は西を向く。顔面頭蓋部は大きく破損喪失している。軀幹・四肢骨は消失したことも考えられるが、他個体の埋葬時に除去された可能性もある。骨質の保存はあまりよくない。

下顎骨が残っており、左右のM1は萌出完了してい

る。6才くらいのこどもで、性や時代的特徴は不明である。

No.4　人骨　(PL７－４：第14図)

体軸は北東方向、顔面の向きは不明で伸展葬。骨盤や下肢骨が解剖学的配列を乱すことなく残存していたが、軀幹および上肢骨の大部分は撹乱により喪失していた。なお、頭頂骨片が1片混入していた。おそらく他個体の埋葬か、その他の理由により、出土したときに除去されたものと思われる。骨質保存はあまり良くなく、かなり脆い。

大腿骨では柱状性は認められないが、近位部で偏平性が目だち、上骨体断面示数(左64.52 右72.41)でも示されるように、hyperplatymerに属する。

脛骨の栄養孔位における断面示数(左58.62 右64.29)では、左が偏平脛骨platymerで、右はmeso-knemであることを示す。

解剖学的諸特徴から、老年女性と推定される。

No.5　人骨　(PL７－５：第16図)

体軸は東北東方向、顔面の向きは不明で伸展葬。ほぼ全身にわたって出土しているが、個々の骨の破損と喪失が著しい。

この人骨の出土地点の表土を重機で除去していた際に、頭骨片が出土し、人骨の存在が確認されたため、発掘調査では、この頭骨をNo.5人骨に属するものとした。この頭骨はその解剖学的特徴から老年女性であり、No.5人骨の軀幹・四肢骨は良く発達していて男性的である。しかし、大座骨切痕はかなり大きく開き、男女いずれとも解釈できる。ただ、Sulcus preauricularisがかなり明確に存在しており、この点は女性的である。したがって、頭骨と軀幹・四肢骨は同一個体と見なせなくもない。本報告では同一個体として、No.5にまとめた。

この頭部は、前述の出土状況からもわかるように、細片化が著しく、顔面の向きも不明である。下顎骨の右半分が残っており、歯式図からも推定できるように、M1はかなり早い時期に脱落し、歯槽部は吸収されてしまった結果、直接P2がM2と接している。残存しているP2とM2のいずれも咬耗が激しい。

下顎骨は右半分しかないが、全体として老化に伴う変形と歯槽膿漏および著しい咬耗が認められる。まず側面観では、下顎下縁の形態はKeiter Vで、Torus marginalisおよびTuberculum posterius、Eminentia lateralisの発達は、比較的目だつ。下顎角の形態はH.E.SchultzⅥ。頤孔(Foramen mentale)は3個存在する。後面観では下顎枝後縁の形態はH.E.SchultzⅢ。下顎前内面およびオトガイ三角の形状は破損しているため不明。

脳頭蓋骨は比較的薄く、前頭結節(Tuber frontale)の発達は、その付近が破損しているため、明確ではないが、頭頂結節(Tuber parietale)は中程度に発達している。後頭部では、後頭鱗は円みを帯びて膨隆しており、上面観では後頭部が後方に突出した観がある。冠状縫合・矢状縫合・人字縫合は、完全に閉鎖している。乳様突起は小さく華奢で、以上の諸特徴とあわせて老年女性と推定してさしつかえない。

全体として四肢骨における筋付着部の発達は強い方である。すでに性判定の箇所でも触れたように、どちらかというと、男性に近い形質を示す。

上肢では、筋付着部はかなり良く発達しており、右のEpikondylus medialisの発達も良く、特に外側縁の遠位部には、病的な骨沈着が認められる。しかし、生前に支障があったとは思われない。

大腿骨は上骨体断面示数(左75.00 右79.31)も示すように、Platymerに属し、偏平である。

同様に脛骨でも、栄養孔位断面示数(左70.97 右70.97)で、Platyknem(偏平脛骨)に属する。

No.6　人骨　(PL７－６：図なし)

調査区域の境界である南壁面に位置しており、壁面崩壊により出土したため、詳細な埋葬形式は不明である。

骨質の保存状態はきわめて良好であるが、軀幹・四肢骨片のみで、頭骨はない。収集した人骨の筋付着部の発達その他の特徴から、かなり頑丈な体格の熟年男性と推定される。

残存している右大腿骨近位部の骨体上横径34㎜、骨体上矢状径27㎜で、上骨体断面示数は79.41になり、hyperplatymerに属する。

No.7　人骨　(PL７－７、PL11－７：第16図)

体軸は北北東方向、顔面は左向きで伸展葬。骨質脆く、残存しているのは頭部と下肢骨片が大部分で、それも破損喪失がいちじるしい。

頭蓋骨では、頭蓋冠のみ残存し、それも喪失部分が多い。顔面頭蓋部(下顎骨も含む)は残存しない。前頭結節の存在は不明だが、頭頂結節はかなり良く発達している。後頭部では外後頭結節そのものはあまり顕著ではなく、BrocaIIだが、最上項線及び上項線(Linea nuchae suprema et superior)の発達は目だち、全体として後頭部が後方へ紡錘状に突出している(ピラミッド型)。破損が著しいので、計測は不可能だが、外観的には中頭と長頭の間にあるものと思われる。特筆すべきは、前頭骨の厚さが並外れて著しいことである。

頭蓋冠上の縫合は全て、ほぼ完全に閉鎖している。

以上の特徴は全て、当人骨が老年男性であることを示す。

四肢骨では、大腿骨の一部について計測することができた。中央矢状径(左26 右26)・中央横径(左26 右25)・中央囲(左82 右79)・骨体上横径(左欠 右30)・骨体上矢状径(左欠 右22)・上骨体断面示数(左欠 右73.33)で、hyperplatymer に属する。

No.8　人骨　(PL７－８、PL８－１：図なし)

次のNo.９人骨と頭位を揃え、並んで出土した。遺跡から出土した人骨の中では最も深い位置で、常に地下水が滲んでくる場所であり、少しでも降雨があると、水没した。北壁崩壊により、出土位置もずれ、崩壊土の中から取り上げたため実測図はない。

体軸はほぼ北東方向、顔面の向きは不明で伸展葬。骨質の保存は悪く脆い。自然消失の部分が多い。現地での観察では成人であるが、それ以上のことは同定できず、不明である。

No.9　人骨　(PL７－８、PL８－２・３：図なし)

No.８人骨と同様で、体軸はほぼ北東方向、顔面の向きは不明で伸展葬。骨質の保存は悪く脆い。自然消失の部分が多い。現地での観察では成人であるが、それ以上のことは同定できず、不明である。なお、頸骨の部分から１個、同個体の周辺から１個の計２個の管玉(第11図－68,69)が出土した。

No.10　人骨　(PL８－４：第14図)

No.３人骨と同様で、頭骨のみ出土。頭蓋底部を下にし、顔面は西を向く。顔面頭蓋部は大きく破損している。軀幹・四肢骨は消失したことも考えられるが、他個体の埋葬時に除去された可能性もある。骨質の保存はあまりよくない。

性や時代的特徴は不明である。

No.11　人骨　(写真なし：図なし)

小片のため、性や時代的特徴は不明。

No.12　人骨　(PL８－５、PL12－１・２：第14図)

体軸は北東方向、頭部は北東にて右側を下にして屈葬状態で出土した。破損が著しく、喪失した部分も多い。

上顎部は破損喪失しているが、下顎骨では右下顎枝のみが破損喪失しており、他の部分は完全に保存されていた。歯式についてみると、左頬歯列は歯槽膿漏による歯の脱落があり、歯槽部はほとんど閉鎖吸収されてしまっている。歯牙の咬耗もかなり進行している。咬合形式は不明である。

下顎骨側面観では、Torus marginalis およびTuberculum posterius や Eminentia lateralis が比較的良く発達しており、角張った印象を与える。

下顎下縁の形態はKeiterⅢに属し、下顎角の形態はIncisura preangularis がかなり深くH.E.SchultzⅤに相当する。

下顎前内側面の形態はEharaⅣで、オトガイ三角はH.E.SchultzⅤ。スピー曲線は破損しているので明確ではないが、さほど顕著ではなかったと思われる。

頭骨では右側の脳頭蓋部のみ復元可能で、左は出土時にすでに喪失していた。

上面観では、No.７人骨と形態的に類似しており、ただNo.７人骨ほど前頭骨は分厚くない。前頭骨は後方に傾斜しており、Tuber frontale の発達はみられない。頭頂部では、Tuber parietale は良く発達している。外後頭隆起はあまり発達しておらず、BrocaⅡ程度だが、後頭鱗は膨隆して丸みがあり、後方に突出している(ピラミッド型)。全体の印象では長頭に近い。冠状縫合や人字縫合は完全には閉鎖していな

いが、矢状縫合では閉鎖が進行していたようである。

以上総合すると、老年男性と推定される。

当人骨は、喪失部分が多いので、明確に断言はできないが、上肢に比し下肢の方が頑丈であったと思われる。たとえば上腕骨では、さほど頑丈な印象は受けないが、大腿骨では中央断面示数(左120.00 右124.00)で、Pilaster(粗線)はよく発達している。上骨体断面示数(左83.33 右86.67)は、左ではPlatymer、右ではEurymerに属する。

右脛骨の栄養孔付近が復元できたが、それによると栄養孔位断面示数(右61.76)で、Platyknemである。

No.13　人骨　(PL 9 － 1 ：第16図)

石敷状の石の一つに脆くなった人骨片が張り付いた状態で検出。小片のため、性や時代的特徴は不明。

No.14　人骨　(PL 9 － 2 ・ 3 ：第16図)

体軸は北東方向にあり、頭部は表土掘削中に破壊したため、顔面の向きは不明。頭骨は後頭骨片、左右の側頭骨片、下顎骨があるだけである。骨質の保存はよい。

頭骨では、後頭骨の一部、左右側頭骨片、右頬骨が残存しているだけである。後頭骨の最上項線や上項線、外後頭結節などがよく発達しており、骨自体も分厚い。外後頭結節はBrocaⅣに相当する。左右の乳様突起(Proc. mastoideus)は、中程度に発達している。

これらの形質からみるかぎり、男性的印象が強いが、軀幹・四肢骨とくに寛骨の大座骨切痕の形状は、この人骨が女性であることを示している。もし頭骨とそれ以外の骨格が同一個体に属するとすれば、きわめて頑丈な体質の女性であったと推定される。

上顎骨は欠落しているが、下顎骨の歯式でみると、左右ともに頬歯列に歯槽膿漏の痕がみられ、歯槽部は著しく吸収されている。

総合して、老年女性と推定される。

下顎骨の形態について、右下顎枝は破損欠如しているが、その他は完全に保存されている。生前生え残っていた歯はすべて脱落喪失しており、歯槽孔だけが開いている。側面観では、Torus marginalisは比較的よく発達しており、Tuberculum posteriusの発達もよい。下顎下縁の形態はKeiterⅢ、下顎角の形状はH.E.SchultzⅤに相当する。下顎枝後縁部の形態はH.E.SchultzⅠ、オトガイ三角ではTuberculum lateraleがよく発達していて、H.E.SchultzⅥ、下顎前内面の形態はEharaⅤに相当する。

軀幹・四肢骨はほぼ全身にわたって残存しているが、骨質はかなり脆く、破損・喪失もかなり著しい。

上腕骨では、左は骨体部のみ、右は近位骨端が破損喪失している。骨体部は比較的頑丈だが、Margo medialisの走行は女性的で、Epicondylus medialisの発達もさほど強くはない。

橈骨では、左は遠位端が、右は両端が破損喪失している。

尺骨は左では遠位端が、右では両端が破損喪失。筋付着部はよく発達し、湾曲の度も強く、生前かなり上肢が発達していたことをうかがわせる。

骨盤では左右腸骨の一部が残存しており、すでに述べたように、大座骨切痕は大きく開き、当個体が女性であることを示す。

大腿骨では、左は遠位端が、右では両端が破損喪失している。Pilasterの発達はあまりよくなく、柱状性は認められないが、上骨体部はかなり偏平で、上骨体断面示数(左66.67 右72.73)に見られるように、hyperplatymerに属する。

脛骨では、左右の骨体部が残存しており、偏平性はあまり認められず、栄養孔位断面示数(左78.13 右80.00)でもeuryknemに属する。

以上総合して、かなり頑丈な女性で、中世的であることに矛盾がない。

No.15　人骨　(PL 9 － 4 、PL12－ 3 ～ 7 ：第16図)

体軸は北東方向を向き、頭部は顔面を上にして伸展葬である。胸・腹部の位置で径30㎝程のSB34の柱穴で貫通されており、その柱穴からは16世紀後半の土師器鍋(42)が出土している。つまり、当人骨はこの柱穴が掘られたときよりも古いということになる。

右上肢骨はほとんど喪失し、左上肢骨では前腕の一部が喪失しているが、上腕骨と橈骨骨体部が並んで出土しており、前腕部が強く曲げられていたと思われる。

頭骨はちょうど前頭骨のところで、顔面ともども

に削り取られたように破損喪失しており、顔面部では上顎骨の一部と比較的完全な下顎骨が残存するだけである。

歯式についてみるに、右M1 M2は破損喪失しており、左は歯槽部が残存している。右側では犬歯は生前に脱落し、P1 P2の部分は歯槽だけが残っている。大臼歯部の歯槽の残っている部分には歯槽膿漏の痕跡が認められるが、破損しているため、最後部までそうであったかどうか、正確にはわからない。左側ではやはり犬歯の脱落が認められ、P1が前方へ捻れを生じている。

下顎骨では左右ともに歯牙は残存しているが、切歯はすべて脱落している。右I1 I2の歯槽部がわずかに残っているのが認められ、上顎と合わせて考察しても抜歯とは認めにくい。

左右の上顎犬歯の自然脱落は、一般には考えにくいが、上下とも歯牙の不自然な摩耗が認められ、とくに左右ともM2において顕著である。生前食事以外にも歯牙がなんらかの作業に使用されていた可能性がある。

下顎骨は全体として頑丈であり、側面観ではTuberculum posteriusの発達がきわめて著しく、Eminentia lateralisの発達も強い。下顎下縁の形態はKeiterⅣに相当し、下顎角は H.E.SchultzⅢ。後面観では下顎枝後縁の形態はH.E.SchultzⅡ、下顎前内面部の形態はEharaⅢ、オトガイ三角はH.E.SchultzⅥ。

脳頭蓋部では、矢状縫合はほとんど閉鎖しており、人字縫合は閉鎖が進行中である。Tuber parietaleの発達は著しく、後頭部は比較的円みがある。最上項線及び上項線の発達が目立つ。外後頭結節はBrocaⅢに相当する。

上肢骨では両端が破損した左上腕骨が残っており、筋付着部の発達が目立つ。橈骨も両端破損。

下肢骨では両端が破損した左右の大腿骨が出土している。粗線は中程度に発達しているが、柱状とまではいえない。上骨体断面示数(左115.38 右129.17)でもわかるように、偏平性が著しく、Platymerに属する。

下腿部では、左右の脛骨の骨体部が残っており、栄養孔位断面示数(左64.71 右67.65)に見られるように、偏平脛骨に近いmesoknemである。

以上総合すると、比較的頑丈な老年男性で、中世以前のものであることはまちがいない。

No.16　**人骨**　(PL９－５：第14図)

小片のため、性や時代的特徴は不明。

No.17　**人骨**　(PL９－６：図なし)

SX17内の奈良時代の土師器甕(20)の埋土内から、火葬骨が出土。小片のため、性や時代的特徴は不明。

No.18　**人骨**　(PL９－３・７：第15図)

調査区の南壁から出土。拡張して確認したが、すでに攪乱された痕跡があり、主なものとして、左上腕骨(近位部１／３は破損喪失)、左橈骨(骨頭部破損)、左右大腿骨の骨体部が残存しているだけである。骨質は脆い。埋葬形式は伸展葬と推定される。

上腕骨でみる限り、比較的頑丈なタイプの熟年男性であると推測される。

大腿骨では、比較的粗線はよく発達しており、中央断面示数(左121.74 右112.50)でも100以上の数値を示す(柱状大腿骨)。上骨体断面示数(左64.71 右67.65)ではいずれも偏平性が強く、hyperplatymerに属する。

総合すると、比較的頑丈な熟年男性で、時代的には中世であることに矛盾はないものと思われる。

No.19　**人骨**　(PL９－８：第16図)

小片のため、性や時代的特徴は不明。

No.20　**人骨**　(PL10－１、PL12－８：第15図)

体軸は東北東方向で、顔面右向きで伸展葬。骨質は脆く、自然喪失した部分が多い。

上顎歯槽部は比較的よく保存されているが、左右のM3部は破損喪失している。歯式についてみるに、下顎では右I1 I2、左I1は埋葬後に喪失。左M2 M3は歯槽膿漏による生前脱落。歯石の沈着が著しい。咬合形式は屋根状に近い鋏状咬合であるが、スピー曲線は中程度に認められる。咬耗はさほど進行していない。以上から、当人骨は成年男性であると推定してもよい。

下顎骨の側面観では、Eminentia lateralis はよく発達しており、下顎骨が角ばった印象を与えている。下顎下縁の形態はKeiter IVに相当する。下顎枝後縁の形態は H.E.Schultz Ⅱ、オトガイ三角は Tuberculum lateraleがよく発達しており、H.E.Schultz Ⅵに相当する。

脳頭蓋部では、破損部が著しいが、前頭鱗部はやや円みがあり、眉上弓は比較的よく発達。Tuber frontaleはあまり目立たないが、Tuber parietale はよく発達している。乳様突起は中程度。縫合の閉鎖はあまり進行していなかったものと思われる。

四肢骨の保存はきわめて不良だが、左大腿骨の骨体部が残存しており、それによると、柱状性がやや認められる。上骨体断面示数(100.00)では、辛うじてStenomer である。　左右の脛骨骨体部が残存しており、左栄養孔位断面示数では euryknem に属する。

以上総合すると、成年男性であり、時代的には中世であることに矛盾しない。

No.21　**人骨**　(写真なし：図なし)

小片のため、性や時代的特徴は不明。

No.22　**人骨**　(PL10－2、PL13－1～3：第15図)

体軸は東北東方向で、頭は右向き、伸展葬。保存はきわめて悪く、骨質も脆い。

顔面部では破損が著しいが、左右の頬骨、上顎と下顎のそれぞれ一部が残っている。歯式図でも見られるように上顎ではP2 P1 C I2 I1 ○ I2 C P1 P2が残存しており、下顎では左歯列は残っているが、右は歯槽部が破損喪失している。咬合形式は鉗子状と鋏状の中間で、歯牙の咬耗は中程度に進行しており、スピー曲線はわずかに認められる。

下顎骨側面観では、Eminentia lateralis は比較的よく発達しており、下顎下縁の形態は KeiterⅡに相当する。下顎角の形態は H.E.SchultzⅢ型。下顎枝後縁部は、H.E.Schultz Ⅰ型。前内面部の形状はEhara Ⅴ型。歯列弓の形状は乱れがなく、中世的というよりも、古墳時代的な印象を与えるが、確定はできない。

脳頭蓋骨では、縫合は部分的に閉鎖が進行している。Arcus supraoribitalis(眼窩上弓)の発達はさほどではないが、Arcus superciliaris(眉上弓)の発達は、やや目立つ。Glabella(眉間)の形態はBrocaⅢに相当する。前頭鱗部は比較的円みがあり、Tuber frontale もかすかに認められる。Tuber parietale も僅かに認められる。後頭部は偏平で、歪みがみられる。最上項線及び上項線の発達はさほど強くはなく、外後頭結節はBrocaⅢ程度である。乳様突起は中程度の発達。

頭型は頭長幅示数(77.53)にも見られるように、中頭に属する。

四肢骨の破損はとくに著しく、喪失部分も多い。

左右の上腕骨、左右の尺骨、左右の橈骨が残存しているが、いずれも両端が破損している。筋付着部はよく発達し、著しく頑丈である。上肢がよく発達した個体だといえよう。　下肢では、とくに細片化が著しく、辛うじて右脛骨片が観察できたが、栄養孔位断面示数(71.88)に見られるように euryknem である。

全体として、熟年男性であることは間違いないが、古墳時代的特徴を多く有している。しかし残念ながら、時代を確定することはできない。

No.23　**人骨**　(PL10－3～5、PL13－4～7：第16図)

調査区の南壁の崩壊箇所に頭蓋骨の一部が露出したため、調査区を拡張して検出を行った。体軸は北北東方向に向き、屈葬で、頭部は東北に位置し、顔面は右を下にしていたが、再度の雨により頭蓋骨部分は崩壊した。強く曲げられた下肢は右側に倒れた位置にある。保存はかなり良好である。

歯列についてみるに、右上顎歯槽部は大きく破損しており、従ってM3 M2 M1 P2は喪失している。左上顎ではM2 M3はカリエスによる脱落の痕跡が認められる。右下顎ではM1 M2 M3が、左ではP2 M1 M2が脱落しており、いずれも歯槽膿漏によるものと思われる。残存している歯牙の咬耗は中程度である。咬合形式は鉗子状と鋏状の中間である。スピー曲線は認められない。

上顎における残存歯のうち、切歯と小臼歯の摩耗が著しく、下顎では切歯および左の犬歯と第1小臼歯の摩耗が著しく、他の歯はそれほどでもない。こ

れはおそらく咬合相手の歯が、早い時期に脱落していたためであろう。

下顎骨では、その側面観においてEminentia lateralisはよく発達しており、Torus marginalisもかなり肥厚している。下縁部の形態はKeiterV型で、下顎角はH.E.SchultzⅢ型に属する。下顎枝後縁の形状はH.E.SchultzⅡ型。

オトガイ三角の形態はH.E.SchultzV型である。前内面部の形態はEharaⅣ。

頭蓋骨のうち、歯列や下顎骨についてすでに記載したが、頭蓋骨はほぼ完全に復元することができた。縫合は閉鎖があまり進行していない。乳様突起は大きくない。Arcus supraorbitalisおよびArcus superciliarisの発達は強くない。Glabellaの発達はBrocaⅡ程度である。前頭鱗部は比較的円みを帯びて膨隆した観があり、Tuber frontaleおよびTuber parietaleは僅かに認められる。後頭鱗部も円みを帯びて膨隆している。最上項線及び上項線はさほど強くなく、外後頭結節はBrocaⅡ。

頭型は頭長幅示数(76.97)にも見られるように中頭に属し、Kollmann顔示数(86.72)によれば中顔mesoprosop、Virchow上顔示数(72.16)でも、やはり中顔的である。

四肢骨はいずれも華奢な印象を与え、大腿骨では粗線がある程度発達しており、中央断面示数(左95.83 右95.83)はいずれも100以下であることからもわかるように、柱状性が認められ、とくに上骨体断面示数(左64.52 右70.00)ではhyperplatymerに属することなどが注目に値しよう。脛骨ではとくに偏平性は認められず、euryknemである。

四肢骨が比較的完全に保存されているので、Pearsonの推定式により身長を推定すると、約146.29cmで、かなり低身長である。

以上総合すると、熟年女性で、中世もしくはそれ以前にさかのぼるものと思われるが、確定できない。

No.24　人骨　(PL10－6、PL14－1～4：第15図)

体軸は東北東方向で、顔面は左向き、伸展葬である。ほぼ全身の部位が残存しているが、保存は良くなく骨質も脆い。

上顎では右歯槽部のみ残存しており、下顎は比較的完全である。歯式にも見られるように、第3大臼歯は未萌出で、下顎右のP2 M1 M2は生前に脱落している。歯牙の咬耗は中程度。

下顎骨の側面観では、eminentia lateralisの発達は弱く、全体として華奢な印象を与える。下顎下縁の形態はKeiterVに相当し、いわゆるSchaukelformである。下顎角の形態はH.E.SchultzⅡ。後面観では下顎枝の形態はH.E.SchultzⅠ。下顎前内面の形態はTorus Transversus superiorが左右連続しており、EharaⅢに相当する。オトガイ三角はH.E.SchultzV。スピー曲線は認められない。

脳頭蓋骨は頭蓋底部を除き、ほぼ復元することができた。Arcus superciliarisはやや発達しているが、Arcus supraorbitalisの発達は弱い。Grabellaもやや発達がみられ、BrocaⅢに相当する。前頭鱗は円みを帯びて膨隆しており、Tuber frontaleがかすかに認められる。Tuber parietaleはよく発達している。

後頭鱗は膨隆していて丸みがある。Torus occipitalisの発達は弱く、外後頭結節はBrocaⅢ。乳様突起は小さく、縫合はすべて未閉鎖。

頭骨上面観では、頭長幅示数(83.03)が示すように、brachykran(短頭)に属する。

左右の外聴道に骨種が認められ、ほとんど耳孔を塞いでいる。

四肢骨ではとくに細片化が著しいが、大腿骨上骨体断面示数(左65.63 右64.52)で、いずれもhyperplatymerに属する。

脛骨では、栄養孔位断面示数(左64.29 右66.62)に見られるように、左ではplatyknem、右ではmesoknemに属する。

以上総合すると、まだ成人には達していないが、女性と推定され、頭型に関する限り、現代的印象もうけるが、他の多くの特徴、たとえば大腿骨や脛骨の偏平性から、中世的と推定しても差し支えない。

No.25　人骨　(PL10－7、PL14－5～7：第16図)

体軸は東北東方向で、顔面は右向き、右上肢はほぼ伸ばし、左上肢は前腕部を腹部に載せたかたちで伸展葬。保存は比較的良好だが、出土時に破損喪失した部分が多い。上顎は左歯槽部のみが残存している。I1 I2 C P1は死後脱落し、P2 M1 M2は残存し

ているが、M3は破損喪失している。

下顎では、左右のI1 I2は生前脱落しており、左右の犬歯は死後脱落喪失。右M1 M2 M3及び左M1 M2 M3は歯槽膿漏による歯槽部の骨吸収が認められ、残存している歯牙の摩耗は異常なほど著しい。

下顎骨では左下顎枝が破損している以外は比較的完全で、全体としてかなり大きく、特に右下顎枝から推測するに、その高さが著しく大である。しかし、関節突起が破損しているために計測値で示すことはできない。下顎の側面観では、Eminentia lateralisは中程度の発達を示すが、Torus marginalisはよく発達しており、Tuberculum posteriusは目立つ。下顎下縁部の形態は、KeiterⅢだが、むしろSchaukelformに近い。下顎角部の形態は一部破損しているために断定はできないが、H.E.SchultzⅢに近いと思われる。後面観ではH.E.SchultzⅡと推定される。前内面の形態はEharaⅣに近い。スピー曲線は多分存在しなかったようである。

頭骨上面観では、縫合は完全に閉鎖しておらず、頭長幅示数(70.65)でも示されるように過長頭に近い長頭である。Arcusu superciliarisは著しくよく発達しており、GrabellaはBrocaⅣに匹敵する。前頭鱗は比較的偏平で、Tuber frontaleはかすかに認められる。しかし、Tuber parietaleはかなり目立つ。

後頭部は紡錘状にかなり鋭く後突しており、Torus occipitalisそのものはあまり強くはなく、BrocaⅢ程度である。かなり大きなインカ骨が存在する。乳様突起は大きく、頑丈である。

以上総合すると、かなり並外れた大きな頭骨と過長頭に近い長頭であることが印象的で、熟年男性と見なして差し支えない。

四肢骨も破損喪失部分が大きい。

上腕骨は左右遠位部の約1／3及び右近位部(骨頭は欠如)が残存している。後者では大結節稜及び小結節稜(Crista tuberculi majoris et minoris)の発達がきわめて強く、大結節及び小結節がよく発達していたことをうかがわせるが、破損しているため確定はできない。全体として異常なほど大きく頑丈である。

左右の橈骨は、それぞれ両端部が破損喪失している以外は、比較的よく残っている。いずれも筋付着部がよく発達しており、湾曲も強い。

右尺骨では遠位端が、左尺骨では両端が破損している。骨間縁(Margo interosseus)よく発達しており、全体として湾曲も強い。

左大腿骨の骨体部と比較的完全な右大腿骨が出土している。著しく頑丈で大きい。中央断面示数(左110.34 右118.52)で見るかぎり、値は100以上の値を示すが、粗線の発達は比較的強い。上骨体断面示数(左69.23 右63.16)も示すように、hyperplatymerに属する。

幸い右大腿骨最大長(423㎜)が復元計測できたので、それを基にしてPearsonの推定式で身長を計算すると、160.83㎝になり、中世としてはとくに高身長というわけではないことがわかる。

以上、総合すると、当人骨は頭部や四肢骨が並外れて巨大で頑丈な熟年男性で、頭型からみて中世的特徴を濃厚に示すものである。

No.26　人骨　(PL10－8：第15図)

体軸は北東方向、顔面の向きは不明で伸展葬。保存状態は悪く、骨質も脆い。頭骨片若干と左上腕骨骨体部などが確認できた。その特徴から、かなり華奢な成人女性のものである。

人骨計測値一覧

1：原則として、左右のあるもので、特にことわりのない限り、左の計測値を示す

2：略号は、L：左　R：右を用いる

No.1　人骨　計測値一覧

頭蓋計測値

1	頭蓋最大長	188	46	zm-zm	98
8	頭蓋最大幅	142	47	n-gn	130
17	ba-b	139	48	n-pr	70
8/1	頭長幅示数	75.53	47/45	K顔示数	−
17/1	頭長高示数	73.94	47/46	V顔示数	132.65
17/8	頭幅高示数	97.89	48/45	K上顔示数	−
5	n-ba	101	48/46	V顔示数	71.43
9	ft-ft	92	51	眼窩幅	42
23	頭周	525	52	眼窩高	35
24	横弧長	313	52/51	眼窩示数	83.33
25	正中矢状弧長	334	54	鼻幅	24
40	ba-pr	101	55	鼻高 n-ns	56
43	fmt-fmt	104	54/55	鼻示数	42.86
45	zy-zy	−	50	前眼窩幅 mf-mf	23

下顎骨

65	kdl-kdl	123	70	下顎枝高	L− R 62
66	go-go	102	71	下顎枝幅	L− R 37
68	下顎骨長	84	71/70	下顎枝示数	L− R 59.68
69	id-gn	41	79	下顎枝角	L− R135°

上腕骨

1	最大長	L274 R281	7	骨体最小囲	L79 R79
2	全長	L272 R277	6/5	骨体断面示数	L80.77 R90.91
5	中央最大径	L 26 R 22	7/1	長厚示数	L29.15 R28.11
6	中央最小径	L 21 R 20			

橈骨

1	最大長	227	4	骨体横径	20
2	機能長	212	5	骨体矢状径	13
3	最小周	48	3/2	長厚示数	22.64
			5/4	断面示数	65.00

尺骨

1	最大長	L− R243	11	矢状径	L− R 20
2	機能長	L− R206	12	横径	L− R 14
3	最小周	L− R 39	3/2	長厚示数	L− R 18.93
			11/12	断面示数	L− R142.86

大腿骨

1	最大長	L405 R404	9	骨体上横径	L32 R31
2	自然位長	L402 R401	10	体上矢状径	L26 R26
6	中央矢状径	L 27 R 27	8/2	長厚示数	L20.90 R20.29
7	中央横径	L 27 R 25	6/7	中央断面示数	L100.00 R108.00
8	中央囲	L 84 R 82	10/9	上骨体断面示数	L81.25 R83.87

脛骨

1	全長	L− R331	10	骨体周	L84 R86
1a	最大長	L− R339	10a	栄養孔位周	L94 R92
8	中央最大径	L32 R 31	10b	最小周	L79 R79
8a	栄養孔位最大径	L34 R 33	9/8	中央断面示数	L75.00 R74.19
9	中央横径	L24 R 23	9a/8a	栄養孔位断面示数	L73.53 R75.76
9a	栄養孔位横径	L25 R 25	10b/1	長厚示数	L− R23.87

腓骨

1	最大長	332	4	中央周	53
2	中央最大径	19	4a	最小周	39
3	中央最小径	11	3/2	中央断面示数	57.89
			4a/1	長厚示数	117.47

No.2　人骨計測値一覧

上腕骨

1	最大長	L− R−	7	骨体最小囲	R71
2	全長	L− R−	6/5	骨体断面示数	R76.00
5	中央最大径	R25	7/1	長厚示数	L− R−
6	中央最小径	R19			

橈骨

1	最大長	L− R−	4	骨体横径	L− R17
2	機能長	L− R−	5	骨体矢状径	L− R12
3	最小周	L− R46	3/2	長厚示数	L− R−
			5/4	断面示数	L− R70.59

尺骨

1	最大長	L− R−	11	矢状径	L− R15
2	機能長	L− R−	12	横径	L− R16
3	最小周	L− R45	3/2	長厚示数	L− R−
			11/12	断面示数	L− R93.75

脛骨

1	全長	L− R−	10	骨体周	L84 R83
1a	最大長	L− R−	10a	栄養孔位周	L99 R96
8	中央最大径	L28 R30	10b	最小周	L79 R80
8a	栄養孔位最大径	L35 R33	9/8	中央断面示数	L82.24 R83.33
9	中央横径	L23 R25	9a/8a	栄養孔位断面示数	L77.14 R81.82
9a	栄養孔位横径	L27 R27	10b/1	長厚示数	L− R−

腓骨

1	最大長	L− R−	4	中央周	L45 R48
2	中央最大径	L16 R15	4a	最小周	L− R−
3	中央最小径	L11 R12	3/2	中央断面示数	L68.75 R80.00
			4a/1	長厚示数	L− R−

No.4　人骨計測値一覧

上腕骨

1	最大長	L− R−	7	骨体最小囲	L− R−
2	全長	L− R−	6/5	骨体断面示数	L− R88.89
5	中央最大径	L− R18	7/1	長厚示数	L− R−
6	中央最小径	L− R16			

第8表　出土人骨計測値表(1)　No.1、2、4人骨

No.4　橈骨

1	最大長	L− R−	4	骨体横径	L16 R−
2	機能長	L− R−	5	骨体矢状径	L 9 R−
3	最小周	L48 R−	3/2	長厚示数	L− R−
			5/4	断面示数	L56.25 R−

尺骨

1	最大長	L− R−	11	矢状径	L− R16
2	機能長	L− R−	12	横径	L− R11
3	最小周	L− R35	3/2	長厚示数	L− R−
			11/12	断面示数	L− R145.45

大腿骨

1	最大長	L− R−	9	骨体上横径	L31 R29
2	自然位長	L− R−	10	骨体上矢状径	L20 R21
6	中央矢状径	L22 R22	8/2	長厚示数	L− R−
7	中央横径	L25 R23	6/7	中央断面示数	L88.00 R95.65
8	中央囲	L74 R72	10/9	上骨体断面示数	L64.52 R72.41

脛骨

1	全長	L− R−	10	骨体周	L66 R64
1a	最大長	L− R−	10a	栄養孔位周	L74 R68
8	中央最大径	L23 R23	10b	最小周	L60 R61
8a	栄養孔位最大径	L29 R28	9/8	中央断面示数	L73.91 R73.91
9	中央横径	L17 R17	9a/8a	栄養孔位断面示数	L58.62 R64.29
9a	栄養孔位横径	L17 R18	10b/1	長厚示数	L− R−

腓骨

1	最大長	L− R−	4	中央周	L− R38
2	中央最大径	L− R14	4a	最小周	L− R31
3	中央最小径	L− R13	3/2	中央断面示数	L− R92.86
			4a/1	長厚示数	L− R−

No.5　人骨計測値一覧

上腕骨

1	最大長	L− R−	7	骨体最小囲	L57 R58
2	全長	L− R−	6/5	骨体断面示数	L69.56 R76.19
5	中央最大径	L23 R21	7/1	長厚示数	L− R−
6	中央最小径	L16 R16			

橈骨

1	最大長	L− R214	4	骨体横径	L18 R18
2	機能長	L− R201	5	骨体矢状径	L10 R11
3	最小周	L42 R 41	3/2	長厚示数	L− R20.40
			5/4	断面示数	L55.56 R61.11

尺骨

1	最大長	L− R−	11	矢状径	L 18 R−
2	機能長	L− R−	12	横径	L 12 R−
3	最小周	L37 R−	3/2	長厚示数	L− R−
			11/12	断面示数	L150.00 R−

大腿骨

1	最大長	L− R−	9	骨体上横径	L32 R29
2	自然位長	L− R−	10	骨体上矢状径	L24 R23
6	中央矢状径	L− R27	8/2	長厚示数	L− R−
7	中央横径	L− R27	6/7	中央断面示数	L− R100.00
8	中央囲	L− R80	10/9	上骨体断面示数	L75.00 R79.31

脛骨

1	全長	L− R−	10	骨体周	L78 R73
1a	最大長	L− R−	10a	栄養孔位周	L80 R86
8	中央最大径	L30 R26	10b	最小周	L68R69
8a	栄養孔位最大径	L31 R31	9/8	中央断面示数	L66.67 R73.08
9	中央横径	L20 R19	9a/8a	栄養孔位断面示数	L70.97 R70.97
9a	栄養孔位横径	L22 R22	10b/1	長厚示数	L− R−

No.6　人骨計測値一覧

大腿骨

1	最大長	L− R−	9	骨体上横径	L− R34
2	自然位長	L− R−	10	骨体上矢状径	L− R27
6	中央矢状径	L− R−	8/2	長厚示数	L− R−
7	中央横径	L− R−	6/7	中央断面示数	L− R−
8	中央囲	L− R−	10/9	上骨体断面示数	L− R79.41

No.7　人骨計測値一覧

大腿骨

1	最大長	L− R−	9	骨体上横径	L− R30
2	自然位長	L− R−	10	骨体上矢状径	L− R22
6	中央矢状径	L26 R26	8/2	長厚示数	L− R−
7	中央横径	L26 R25	6/7	中央断面示数	L100.00 R104.00
8	中央囲	L82 R79	10/9	上骨体断面示数	L− R73.33

No.12　人骨計測値一覧

下顎骨

65	kdl-kdl	−	70	下顎枝高	L62 R−
66	go-go	99	71	下顎枝幅	L31 R−
68	下顎骨長	74	71/70	下顎枝示数	L50.00 R−
69	id-gn	−	79	下顎枝角	L12° R−

上腕骨

1	最大長	L− R−	7	骨体最小囲	L57 R58
2	全長	L− R−	6/5	骨体断面示数	L76.19 R72.73
5	中央最大径	L21 R22	7/1	長厚示数	L− R−
6	中央最小径	L16 R16			

橈骨

1	最大長	L− R−	4	骨体横径	L18 R18
2	機能長	L− R−	5	骨体矢状径	L11 R12
3	最小周	L42 R42	3/2	長厚示数	L− R−
			5/4	断面示数	L61.11 R66.67

尺骨

1	最大長	L− R−	11	矢状径	L14 R−
2	機能長	L− R−	12	横径	L13 R−
3	最小周	L34 R−	3/2	長厚示数	L− R−
			11/12	断面示数	L107.69 R−

第9表　出土人骨計測値表(2)　No.4～7、12人骨

No.12　大腿骨

1	最大長	L－ R－	9	骨体上横径	L30 R30
2	自然位長	L－ R－	10	骨体上矢状径	L25 R26
6	中央矢状径	L30 R31	8/2	長厚示数	L－ R－
7	中央横径	L25 R25	6/7	中央断面示数	L120.00 R124.00
8	中央囲	L87 R88	10/9	上骨体断面示数	L83.33 R86.67

脛骨

1	全長	L－ R－	10	骨体周	L－ R78
1a	最大長	L－ R－	10a	栄養孔位周	L－ R90
8	中央最大径	L－ R29	10b	最小周	L－ R－
8a	栄養孔位最大径	L－ R34	9/8	中央断面示数	L－ R58.62
9	中央横径	L－ R17	9a/8a	栄養孔位断面示数	L－ R61.76
9a	栄養孔位横径	L－ R21	10b/1	長厚示数	L－ R－

No.14　人骨計測値一覧

下顎骨

65	kdl-kdl	L－ R－	70	下顎枝高	L－ R－
66	go-go	L－ R－	71	下顎枝幅	L37 R－
68	下顎骨長	L－ R－	71/70	下顎枝示数	L－ R－
69	id-gn	L－ R－	79	下顎枝角	L－ R－

上腕骨

1	最大長	L－ R－	7	骨体最小囲	L63 R65
2	全長	L－ R－	6/5	骨体断面示数	L90.91 R91.30
5	中央最大径	L22 R23	7/1	長厚示数	L－ R－
6	中央最小径	L20 R21			

橈骨

1	最大長	L－ R－	4	骨体横径	L18 R17
2	機能長	L－ R－	5	骨体矢状径	L11 R12
3	最小周	L42 R42	3/2	長厚示数	L－ R－
			5/4	断面示数	L61.11 R70.59

尺骨

1	最大長	L－ R－	11	矢状径	L13 R－
2	機能長	L－ R－	12	横径	L17 R－
3	最小周	L39 R－	3/2	長厚示数	L－ R－
			11/12	断面示数	L76.47 R－

大腿骨

1	最大長	L－ R－	9	骨体上横径	L33 R33
2	自然位長	L－ R－	10	骨体上矢状径	L22 R24
6	中央矢状径	L25 R25	8/2	長厚示数	L－ R－
7	中央横径	L25 R24	6/7	中央断面示数	L100.00 R104.17
8	中央囲	L80 R78	10/9	上骨体断面示数	L66.67 R72.73

脛骨

1	全長	L－ R－	10	骨体周	L73 R72
1a	最大長	L－ R－	10a	栄養孔位周	L87 R89
8	中央最大径	L25 R25	10b	最小周	L68 R69
8a	栄養孔位最大径	L32 R30	9/8	中央断面示数	L80.00 R80.00
9	中央横径	L20 R20	9a/8a	栄養孔位断面示数	L78.13 R80.00
9a	栄養孔位横径	L25 R24	10b/1	長厚示数	L－ R－

腓骨

1	最大長	L－ R－	4	中央周	L－ R44
2	中央最大径	L16 R15	4a	最小周	L－ R47
3	中央最小径	L14 R13	3/2	中央断面示数	L87.50 R86.67
			4a/1	長厚示数	L－ R－

No.15　人骨計測値一覧

頭蓋計測値

1	頭蓋最大長	－	46z	m-zm	－
8	頭蓋最大幅	147	47	n-gn	－
17	ba-b	－	48	n-pr	－
8/1	頭長幅示数	－	47/45	K顔示数	－
17/1	頭長高示数	－	47/46	V顔示数	－
17/8	頭幅高示数	－	48/45	K上顔示数	－
5	n-ba	－	48/46	V顔示数	－
9	ft-ft	－	51	眼窩幅	－
23	頭周	－	52	眼窩高	－
24	横弧長	300	52/51	眼窩示数	－
25	正中矢状弧長	－	54	鼻幅	－
40	ba-pr	－	55	鼻高 n-ns	－
43	fmt-fmt	－	54/55	鼻示数	－
45	zy-zy	－	50	前眼窩幅 mf-mf	－

下顎骨

65	kdl-kdl	122	70	下顎枝高	L－ R58
66	go-go	105	71	下顎枝幅	L－ R－
68	下顎骨長	81	71/70	下顎枝示数	L－ R38
69	id-gn	－	79	下顎枝角	L－ R133°

上腕骨

1	最大長	L－ R－	7	骨体最小囲	L74 R－
2	全長	L－ R－	6/5	骨体断面示数	L－ R－
5	中央最大径	L23 R－	7/1	長厚示数	L－ R－
6	中央最小径	L23 R－			

橈骨

1	最大長	L－ R－	4	骨体横径	L－ R16
2	機能長	L－ R－	5	骨体矢状径	L－ R12
3	最小周	L－ R42	3/2	長厚示数	L－ R－
			5/4	断面示数	L－ R75.00

大腿骨

1	最大長	L－ R－	9	骨体上横径	L33 R32
2	自然位長	L－ R－	10	骨体上矢状径	L25 R24
6	中央矢状径	L30 R31	8/2	長厚示数	L－ R－
7	中央横径	L26 R24	6/7	中央断面示数	L115.38 R129.17
8	中央囲	L90 R90	10/9	上骨体断面示数	L75.76 R75.00

脛骨

1	全長	L－ R－	10	骨体周	L79 R79
1a	最大長	L－ R－	10a	栄養孔位周	L92 R94
8	中央最大径	L32 R31	10b	最小周	L83 R77
8a	栄養孔位最大径	L34 R34	9/8	中央断面示数	L65.63 R67.74
9	中央横径	L21 R21	9a/8a	栄養孔位断面示数	L64.71 R67.65
9a	栄養孔位横径	L22 R23	10b/1	長厚示数	L－ R－

第10表　出土人骨計測値表(3)　No.12、14、15人骨

No.15　腓骨

1	最大長	L－ R－	4	中央周	L48 R48
2	中央最大径	L16 R16	4a	最小周	L42 R43
3	中央最小径	L12 R14	3/2	中央断面示数	L75.00 R87.50
			4a/1	長厚示数	L－ R－

No.18　人骨計測値一覧

上腕骨

1	最大長	L－ R－	7	骨体最小囲	L70 R－
2	全長	L－ R－	6/5	骨体断面示数	L79.17 R－
5	中央最大径	L24 R－	7/1	長厚示数	L－ R－
6	中央最小径	L19 R－			

橈骨

1	最大長	L－ R－	4	骨体横径	L18 R－
2	機能長	L－ R－	5	骨体矢状径	L12 R－
3	最小周	L47 R－	3/2	長厚示数	L－ R－
			5/4	断面示数	L66.67 R－

大腿骨

1	最大長	L－ R－	9	骨体上横径	L34 R34
2	自然位長	L－ R－	10	骨体上矢状径	L22 R23
6	中央矢状径	L28 R27	8/2	長厚示数	L－ R－
7	中央横径	L23 R24	6/7	中央断面示数	L121.74 R112.50
8	中央囲	L82 R84	10/9	上骨体断面示数	L64.71 R67.65

No.20　人骨計測値一覧

下顎骨

65	kdl-kdl	－	70	下顎枝高	L－ R57
66	go-go	110	71	下顎枝幅	L35 R33
68	下顎骨長	75	71/70	下顎枝示数	L－ R57.89
69	id-gn	－	79	下顎枝角	L－ R138

上腕骨

1	最大長	L－ R－	7	骨体最小囲	L－ R63
2	全長	L－ R－	6/5	骨体断面示数	L－ R80.95
5	中央最大径	L－ R21	7/1	長厚示数	L－ R－
6	中央最小径	L－ R17			

橈骨

1	最大長	L－ R－	4	骨体横径	L－ R15
2	機能長	L－ R－	5	骨体矢状径	L－ R13
3	最小周	L－ R43	3/2	長厚示数	L－ R－
			5/4	断面示数	L－ R－

大腿骨

1	最大長	L－ R－	9	骨体上横径	L27 R－
2	自然位長	L－ R－	10	骨体上矢状径	L27 R－
6	中央矢状径	L25 R－	8/2	長厚示数	L－ R－
7	中央横径	L25 R－	6/7	中央断面示数	L100.00 R－
8	中央囲	L81 R－	10/9	上骨体断面示数	L100.00 R－

脛骨

1	全長	L－ R－	10	骨体周	L78 R80
1a	最大長	L－ R－	10a	栄養孔位周	L98 R－
8	中央最大径	L29 R29	10b	最小周	L75 R75
8a	栄養孔位最大径	L36 R－	9/8	中央断面示数	L68.97 R72.41
9	中央横径	L20 R21	9a/8a	栄養孔位断面示数	L72.22 R－
9a	栄養孔位横径	L26 R－	10b/1	長厚示数	L－ R－

腓骨

1	最大長	L－ R－	4	中央周	L－ R49
2	中央最大径	L－ R15	4a	最小周	L－ R38
3	中央最小径	L－ R12	3/2	中央断面示数	L－ R80.00
			4a/1	長厚示数	L－ R－

No.22　人骨計測値一覧

頭蓋計測値

1	頭蓋最大長	178	46	zm-zm	－
8	頭蓋最大幅	138	47	n-gn	－
17	ba-b	－	48	n-pr	－
8/1	頭長幅示数	77.53	47/45	K顔示数	－
17/1	頭長高示数	－	47/46	V顔示数	－
17/8	頭幅高示数	－	48/45	K上顔示数	－
5	n-ba	－	48/46	V顔示数	－
9	ft-ft	105	51	眼窩幅	－
23	頭周	515	52	眼窩高	－
24	横弧長	304	52/51	眼窩示数	－
25	正中矢状弧長	368	54	鼻幅	－
40	ba-pr	－	55	鼻高 n-ns	－
43	fmt-fmt	－	54/55	鼻示数	－
45	zy-zy	－	50	前眼窩幅 mf-mf	－

下顎骨

65	kdl-kdl	－	70	下顎枝高	L－ R－
66	go-go	114	71	下顎枝幅	L39 R－
68	下顎骨長	82	71/70	下顎枝示数	L－ R－
69	id-gn	34	79	下顎枝角	L134 R－

上腕骨

1	最大長	L－ R－	7	骨体最小囲	L76 R73
2	全長	L－ R－	6/5	骨体断面示数	L70.37 R73.08
5	中央最大径	L27 R26	7/1	長厚示数	L－ R－
6	中央最小径	L19 R19			

橈骨

1	最大長	L－ R－	4	骨体横径	L18 R18
2	機能長	L－ R－	5	骨体矢状径	L13 R12
3	最小周	L－ R－	3/2	長厚示数	L－ R－
			5/4	断面示数	L72.22 R66.67

尺骨

1	最大長	L－ R－	11	矢状径	L13 R13
2	機能長	L－ R－	12	横径	L20 R20
3	最小周	L43 R41	3/2	長厚示数	L－ R－
			11/12	断面示数	L65.00 R65.00

第11表　出土人骨計測値表(4)　No.15、18、20、22人骨

No.22　脛骨

1	全長	L－ R－	10	骨体周	L－ R－
1a	最大長	L－ R－	10a	栄養孔位周	L－ R90
8	中央最大径	L－ R－	10b	最小周	L－ R－
8a	栄養孔位最大径	L－ R32	9/8	中央断面示数	L－ R－
9	中央横径	L－ R－	9a/8a	栄養孔位断面示数	L－ R71.88
9a	栄養孔位横径	L－ R23	10b/1	長厚示数	L－ R－

No.23　人骨計測値一覧

頭蓋計測値

1	頭蓋最大長	178	46	zm-zm	97
8	頭蓋最大幅	137	47	n-gn	111
17	ba-b	－	48	n-pr	70
8/1	頭長幅示数	76.97	47/45	K顔示数	86.72
17/1	頭長高示数	－	47/46	V顔示数	114.43
17/8	頭幅高示数	－	48/45	K上顔示数	54.69
5	n-ba	－	48/46	V顔示数	72.16
9	ft-ft	87	51	眼窩幅	L39 R－
23	頭周	509	52	眼窩高	L37 R－
24	横弧長	309	52/51	眼窩示数	L94 R87
25	正中矢状弧長	－	54	鼻幅	－
40	ba-pr	－	55	鼻高 n-ns	54
43	fmt-fmt	98	54/55	鼻示数	－
45	zy-zy	128	50	前眼窩幅 mf-mf	－

下顎骨

65	kdl-kdl	116	70	下顎枝高	L58 R58
66	go-go	86	71	下顎枝幅	L32 R31
68	下顎骨長	74	71/70	下顎枝示数	L55.17 R53.45
69	id-gn	－	79	下顎枝角	L128° R－

上腕骨

1	最大長	L283 R284	7	骨体最小囲	L61 R61
2	全長	L283 R284	6/5	骨体断面示数	L84.21 R80.00
5	中央最大径	L 19 R 20	7/1	長厚示数	L21.55 R21.48
6	中央最小径	L 16 R 16			

橈骨

1	最大長	L205 R－	4	骨体横径	L15 R15
2	機能長	L196 R197	5	骨体矢状径	L10 R10
3	最小周	L 36 R 36	3/2	長厚示数	L95.61 R－
			5/4	断面示数	L66.67 R66.67

尺骨

1	最大長	L229 R－	11	矢状径	L16 R15
2	機能長	L192 R－	12	横径	L11 R11
3	最小周	L 35 R34	3/2	長厚示数	L18.23 R－
			11/12	断面示数	L145.45 R136.36

大腿骨

1	最大長	L386 R388	9	骨体上横径	L31 R30
2	自然位長	L384 R383	10	骨体上矢状径	L20 R21
6	中央矢状径	L 23 R 23	8/2	長厚示数	L19.53 R19.58
7	中央横径	L 24 R 24	6/7	中央断面示数	L95.83 R95.83
8	中央囲	L 75 R 75	10/9	上骨体断面示数	L64.52 R70.00

脛骨

1	全長	L299 R－	10	骨体周	L73 R－
1a	最大長	L304 R－	10a	栄養孔位周	L80 R－
8	中央最大径	L 25 R26	10b	最小周	L53 R－
8a	栄養孔位最大径	L 30 R29	9/8	中央断面示数	L72.00 R73.08
9	中央横径	L 18 R19	9a/8a	栄養孔位断面示数	L70.00 R65.52
9a	栄養孔位横径	L 21 R19	10b/1	長厚示数	L17.73 R－

腓骨

1	最大長	L299 R298	4	中央周	L48 R42
2	中央最大径	L 13 R 14	4a	最小周	L33 R34
3	中央最小径	L 10 R 10	3/2	中央断面示数	L76.92 R71.43
			4a/1	長厚示数	L11.04 R11.41

No.24　人骨計測値一覧

頭蓋計測値

1	頭蓋最大長	165	46	zm-zm	－
8	頭蓋最大幅	137	47	n-gn	－
17	ba-b	－	48	n-pr	－
8/1	頭長幅示数	83.03	47/45	K顔示数	－
17/1	頭長高示数	－	47/46	V顔示数	－
17/8	頭幅高示数	－	48/45	K上顔示数	－
5	n-ba	－	48/46	V顔示数	－
9	ft-ft	－	51	眼窩幅	L－ R－
23	頭周	467	52	眼窩高	L－ R－
24	横弧長	298	52/51	眼窩示数	L－ R－
25	正中矢状弧長	120	54	鼻幅	－
40	ba-pr	－	55	鼻高 n-ns	－
43	fmt-fmt	－	54/55	鼻示数	－
45	zy-zy	－	50	前眼窩幅 mf-mf	20

下顎骨

65	kdl-kdl	114	70	下顎枝高	L56 R56
66	go-go	91	71	下顎枝幅	L35 R35
68	下顎骨長	78	71/70	下顎枝示数	L62.50 R62.50
69	id-gn	－	79	下顎枝角	129°

尺骨

1	最大長	L－ R－	11	矢状径	L15 R－
2	機能長	L－ R－	12	横径	L11 R－
3	最小周	L37 R－	3/2	長厚示数	L125.00 R－
			11/12	断面示数	L－ R－

大腿骨

1	最大長	L－ R－	9	骨体上横径	L32 R31
2	自然位長	L－ R－	10	骨体上矢状径	L21 R20
6	中央矢状径	L22 R22	8/2	長厚示数	L－ R－
7	中央横径	L24 R23	6/7	中央断面示数	L91.67 R95.65
8	中央囲	L75 R71	10/9	上骨体断面示数	L65.63 R64.52

第12表　出土人骨計測値表(5)　No.22～24人骨

No.24　脛骨

1	全長	L－ R－	10	骨体周	L68 R67
1a	最大長	L－ R－	10a	栄養孔位周	L76 R74
8	中央最大径	L25 R25	10b	最小周	L65 R63
8a	栄養孔位最大径	L28 R27	9/8	中央断面示数	L64.00 R68.00
9	中央横径	L16 R17	9a/8a	栄養孔位断面示数	L64.29 R66.62
9a	栄養孔位横径	L18 R18	10b/1	長厚示数	L－R－

腓骨

1	最大長	L－ R－	4	中央周	L41 R－
2	中央最大径	L13 R－	4a	最小周	L33 R－
3	中央最小径	L 8 R－	3/2	中央断面示数	L61.54 R－
			4a/1	長厚示数	L－ R－

No.25　人骨計測値一覧

頭蓋計測値

1	頭蓋最大長	201	46	zm-zm	
8	頭蓋最大幅	142	47	n-gn	－
17	ba-b	－	48	n-pr	－
8/1	頭長幅示数	70.65	47/45	K顔示数	－
17/1	頭長高示数	－	47/46	V顔示数	－
17/8	頭幅高示数	－	48/45	K上顔示数	－
5	n-ba	－	48/46	V顔示数	－
9	ft-ft	93	51	眼窩幅	L－ R－
23	頭周	552	52	眼窩高	L－ R－
24	横弧長	－	52/51	眼窩示数	L－ R－
25	正中矢状弧長	392	54	鼻幅	－
40	ba-pr	－	55	鼻高 n-ns	－
43	fmt-fmt	－	54/55	鼻示数	－
45	zy-zy	－	50	前眼窩幅 mf-mf	－

下顎骨

65	kdl-kdl	－	70	下顎枝高	L－ R－
66	go-go	105	71	下顎枝幅	L－ R36
68	下顎骨長	91	71/70	下顎枝示数	L－ R－
69	id-gn	－	79	下顎枝角	L－ R－

上腕骨

1	最大長	L－ R－	7	骨体最小囲	L－ R－
2	全長	L－ R－	6/5	骨体断面示数	L95.83 R96.00
5	中央最大径	L24 R25	7/1	長厚示数	L－ R－
6	中央最小径	L23 R24			

橈骨

1	最大長	L－ R－	4	骨体横径	L19 R19
2	機能長	L－ R－	5	骨体矢状径	L14 R14
3	最小周	L48 R49	3/2	長厚示数	L－ R－
			5/4	断面示数	L68.42 R68.42

尺骨

1	最大長	L－ R－	11	矢状径	L24 R23
2	機能長	L－ R－	12	横径	L13 R14
3	最小周	L45 R47	3/2	長厚示数	L－ R－
			11/12	断面示数	L－ R－

大腿骨

1	最大長	L－ R423	9	骨体上横径	L39 R38
2	自然位長	L－ R419	10	骨体上矢状径	L27 R24
6	中央矢状径	L32 R 32	8/2	長厚示数	L－ R22.67
7	中央横径	L29 R 27	6/7	中央断面示数	L110.34 R118.52
8	中央囲	L98 R 95	10/9	上骨体断面示数	L69.23 R63.16

脛骨

1	全長	L－ R－	10	骨体周	L87 R84
1a	最大長	L－ R－	10a	栄養孔位周	L94 R97
8	中央最大径	L33 R31	10b	最小周	L83 R80
8a	栄養孔位最大径	L35 R36	9/8	中央断面示数	L63.64 R67.74
9	中央横径	L21 R21	9a/8a	栄養孔位断面示数	L65.71R63.89
9a	栄養孔位横径	L23 R23	10b/1	長厚示数	L－R－

腓骨

1	最大長	L－ R－	4	中央周	L－ R－
2	中央最大径	L 3 R－	4a	最小周	L－ R－
3	中央最小径	L－ R－	3/2	中央断面示数	L－ R－
			4a/1	長厚示数	L－ R－

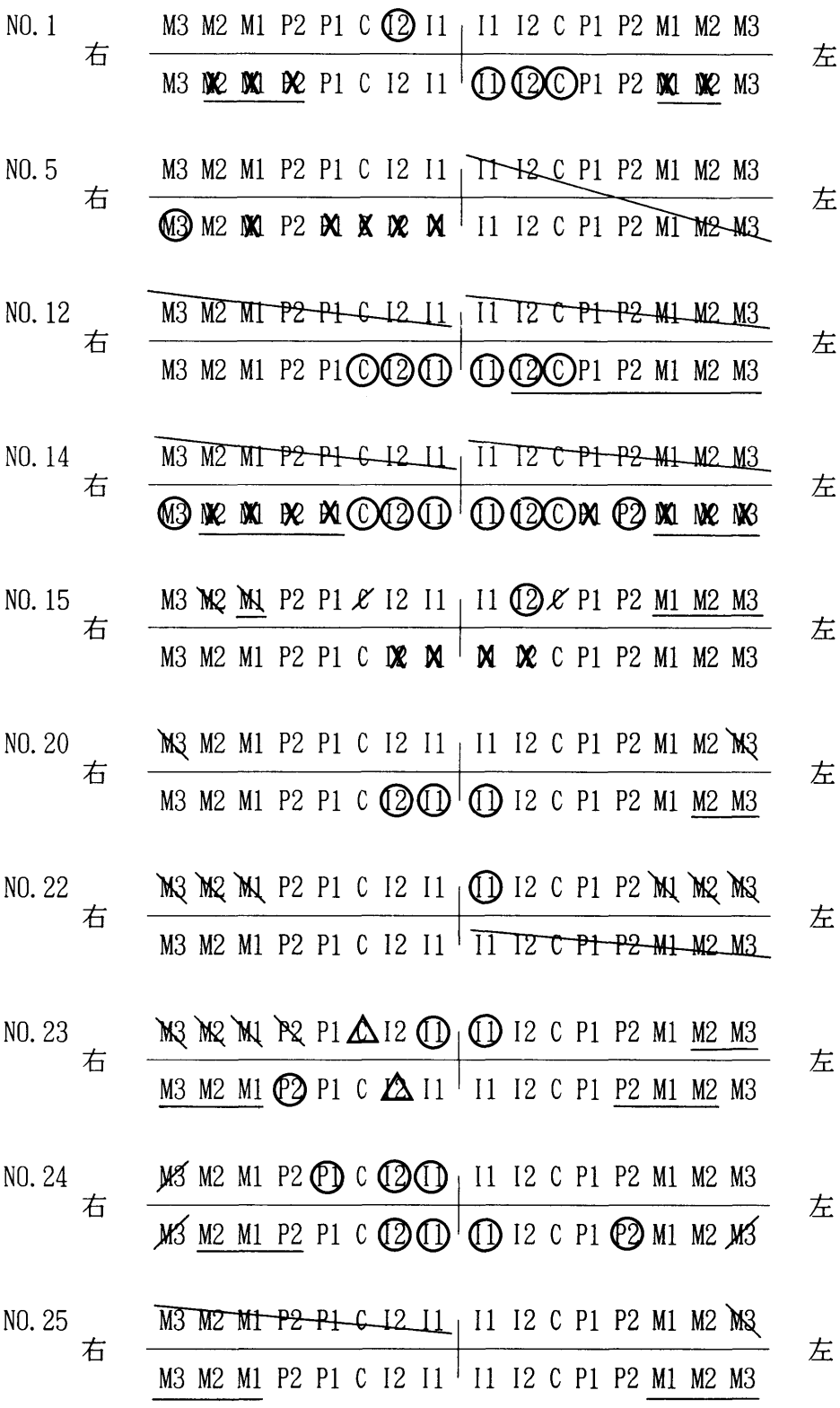
第13表　出土人骨計測値表(6)　No.24、25人骨

出土人骨の歯式 [No.1 ・ 5 ・12・14・15・20・22・23・24・25　人骨]

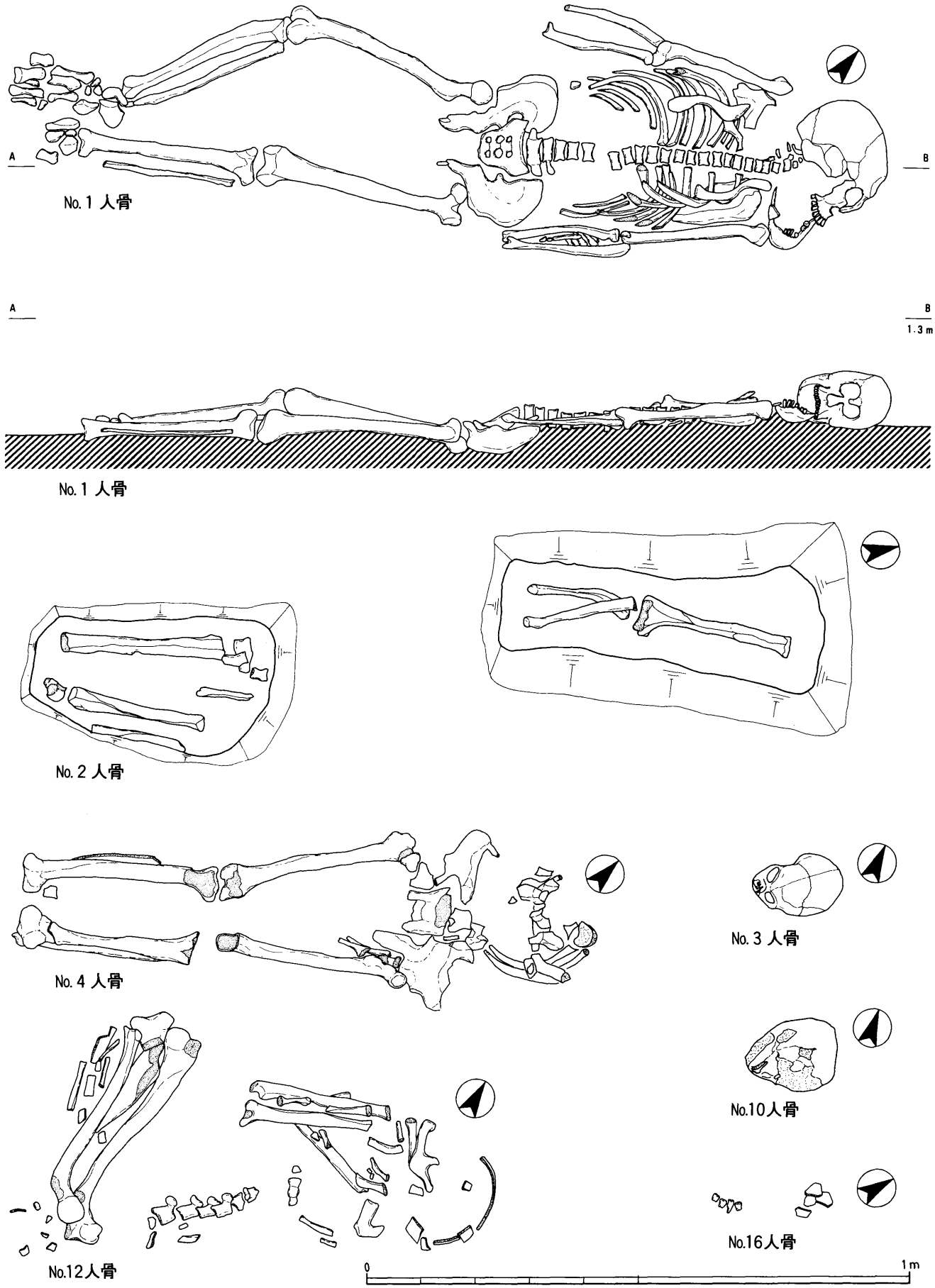
歯式の凡例は以下の略号を用いる

X：歯槽閉鎖　○：歯芽脱落・歯槽開放　△：歯根のみ残存　＊：カリエス

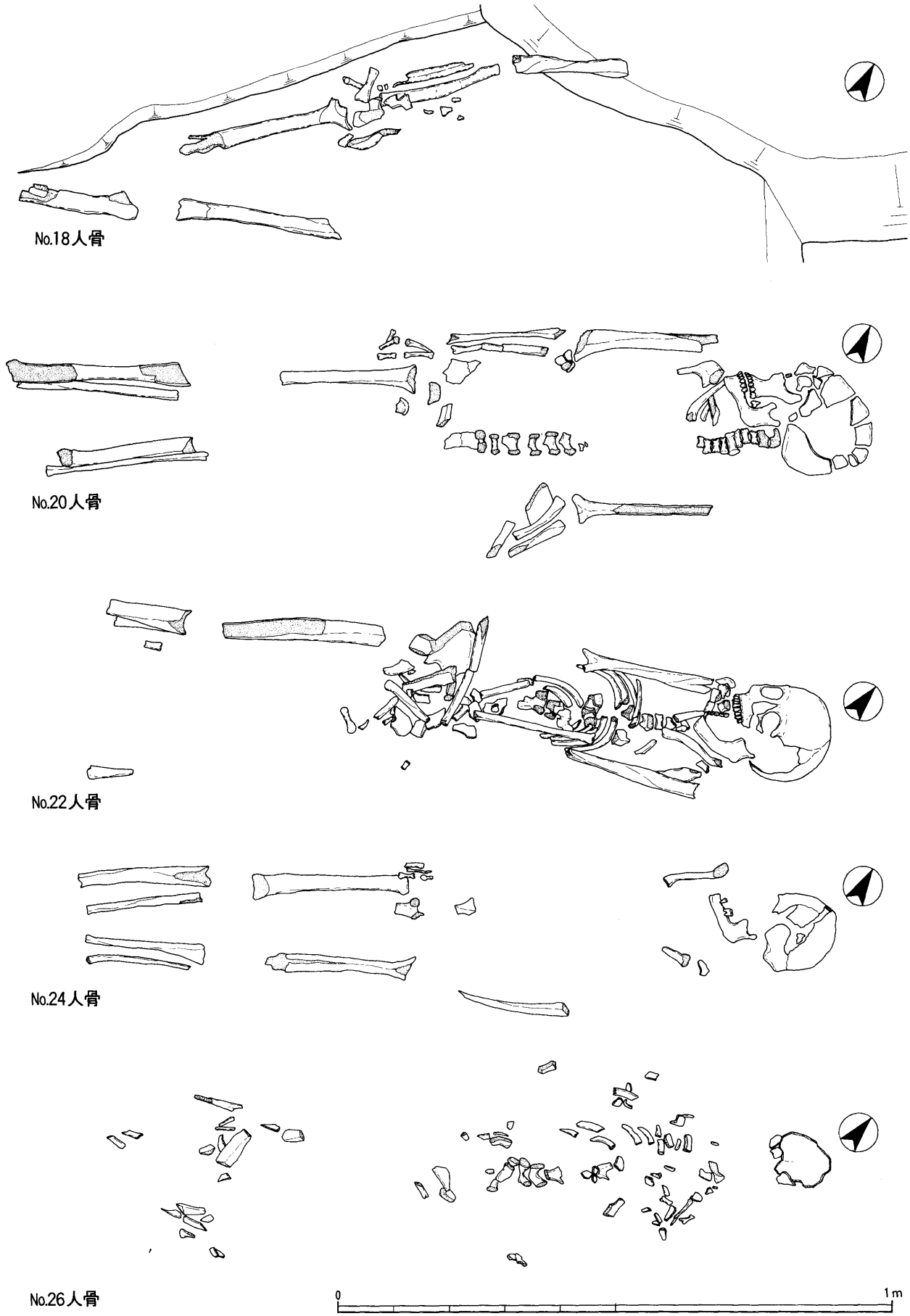
＿：歯槽膿漏　／：先天的欠損もしくは未萌出　□：抜歯　＼：破損



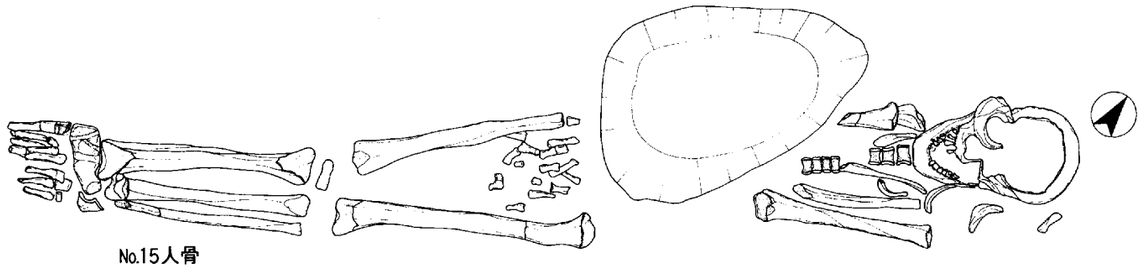
第13図　出土人骨の歯式図

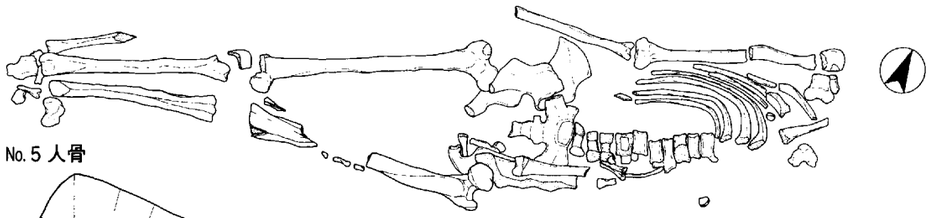


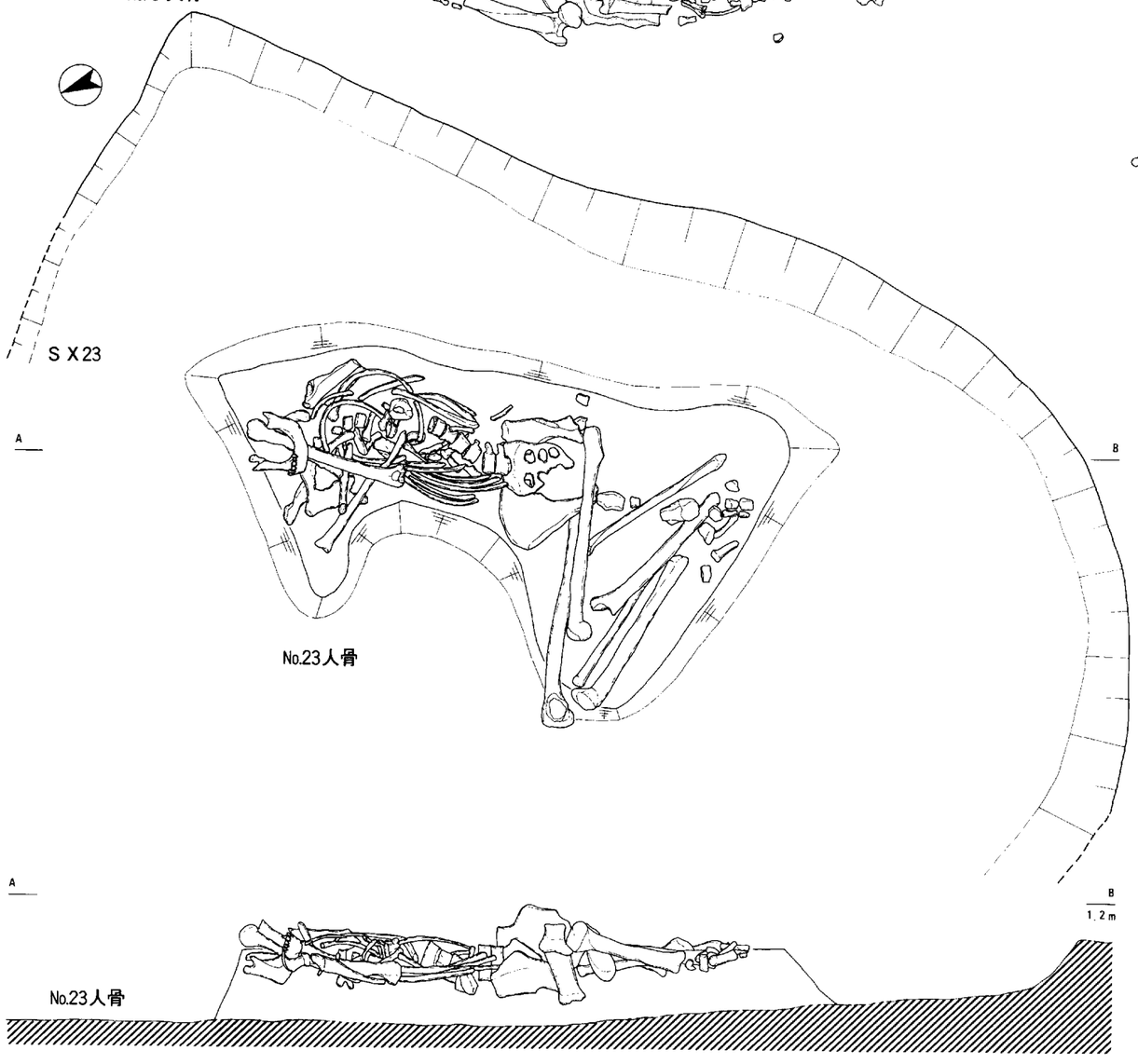
第14図　人骨出土状況図(1)　No. 1 ～ 4 、10、12、16人骨　［1 ：10］

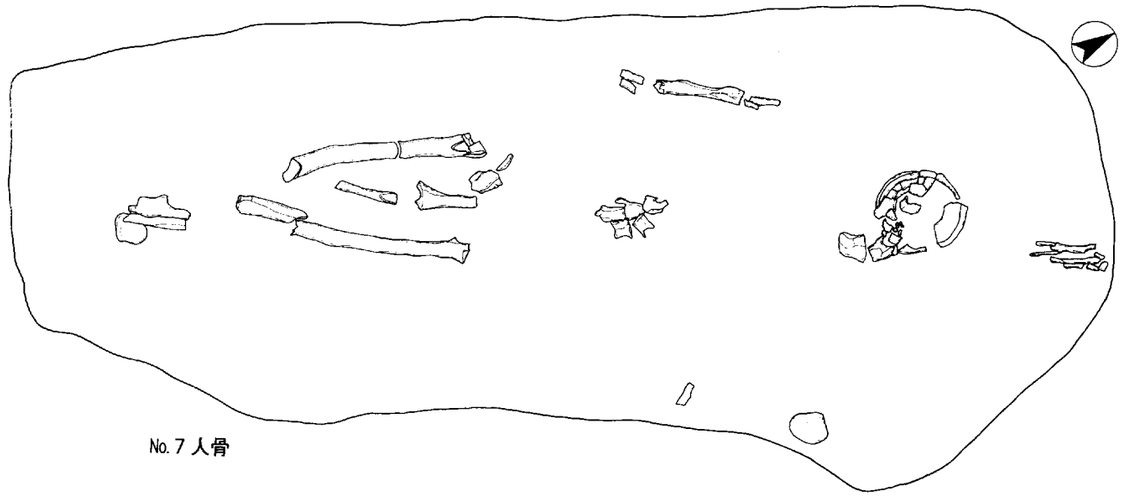


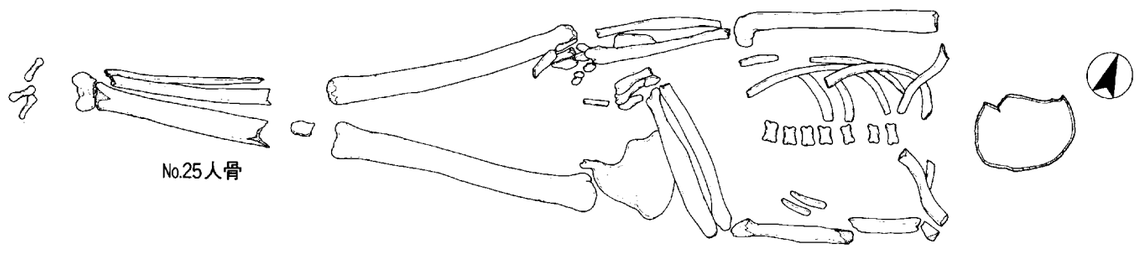
第15図　人骨出土状況図(2)　No.18、20、22、24、26人骨　[1 : 10]

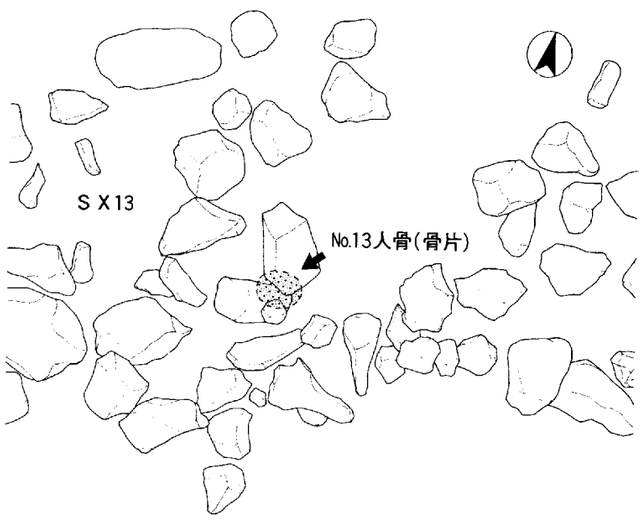


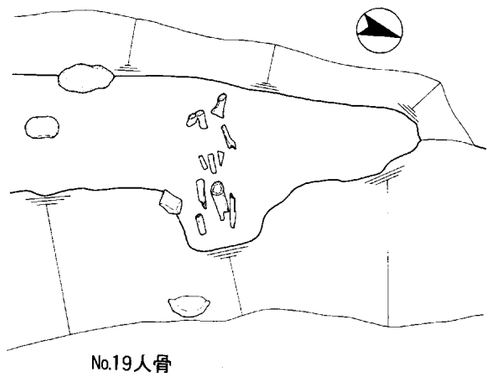


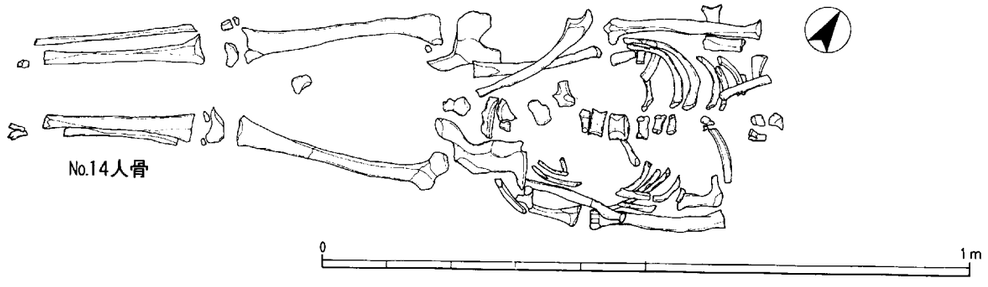












第16図　人骨出土状況図(3)　No.5 、 7 、13～15、19、23、25人骨　[1 ：10]

Ⅵ 結　語

1．墓域の利用開始と終了について

当遺跡の性格については、人骨の出土により、試掘調査及び殿畑・天神・東海道遺跡の発掘調査結果から、中世の集落跡の縁辺部であろうという予想に反して、墓域という性格が重要となった。

調査区周辺には、少なくとも近世以降は確実に国府地区の墓地として、現在も利用されている場所が存在する。但し、近世以降は火葬墓として利用されているが、隣の安乗地区では現在も土葬[1]であることから、かつての国府地区も土葬墓であったことは十分考えられるし、またその墓地の範囲が、当調査区を含む、現在よりも広い範囲であったと想定される。

現在でこそ墓地周辺には家が立ち並んでいるが、戦前までの国府の集落は国府神社まで[2]で、国府神社以北の安乗に通じる平野北部は、松林と墓地しかなく、国府地区の墓域として利用されていたと考えられる。

当調査区が墓域として利用された期間は、墓坑及び人骨の検討から、中世から近世と思われる。

しかし、開始の時期については、遡る可能性を否定できない。

開始時期を明確に出来ない最大の原因は、検出面の判断ミスで、墓坑が層位で捉えられなかったことにある。

そのことで、墓坑内の埋土から出土した遺物は問題はないが、人骨の周辺から出土した遺物を、包含層出土とするか、墓坑出土とするかの判断が難しかったためである。

本報告では、原則として包含層出土とし、遺物観察表の備考にその旨を記した。しかし、どちらの出土遺物も土師器の細片が多く、遺物の時期決定が明確にできなかった。古くは、古墳時代の土師器片や管玉が含まれ、新しいところでは中世の土師器鍋片等も含まれるからである。

終了の時期については、近世初頭と考えられる。遺物等に近世以降のものがほとんどみられないこと、「Ⅱ 位置と環境」でも述べたように国府地域に入った宗教上の埋葬の方法が近世以降現在まで火葬であることからである。

2．掘立柱建物について

急峻な隆起海食台地が迫るという地形的制約から、海岸の砂堆に集落が形成されていたとすると、集落の縁辺部であるという位置づけができる。鎌倉時代の一時期、この地域の支配者であった三浦氏に由来して「西殿」という小字名がついているが、3棟の掘立柱建物は時期的には一致しない。柱穴から出土した遺物は細片で数えるほどで、図示できるのは遺物実測図に掲載したものが全てである。時期は墓坑から出土した遺物と比べると、同じか新しい。

したがって、墓域の利用が終わってから建てられたと考えられる。鎌倉時代の土坑もないわけではないが、明らかに三浦氏と関係するとはいえない。

ただ、ＳＺ35出土の山茶椀(31)が転用硯であり、字を書く階層の人が調査区周辺に存在していたと推定できる。このことからこの付近に「西殿」の建物があったとするのは無理があるだろうか。少なくとも、調査区の南にも遺物の散布がみられることから、「西殿」の建物等の遺構が、調査区外に存在する可能性は高いと考えられる。

3．ものの流通について

特に中世以降の遺物については、内耳鍋・山茶椀等の搬入品が出土したことから、当時の流通システムの一端をこの地域でも垣間みることができた。

当調査区の周辺には、近世の江戸～大阪間の廻船の風待港・避難港として志州四箇津と称され、重きをなしていた、鳥羽・安乗・浜島・越賀の港があった。これらの港は中世においても志摩地域の主要な港として機能していたと考えられる。

国府の海岸は、太平洋に面した砂浜であり、大型の船が港としては利用できないが、鰯漁のための小型の船は利用されていた。したがって、最も近い安

乗港に一度陸揚げされ、陸送または、小型の船に積み替えて搬入されていたとも考えられる。

中世以前においても、この海上交流とでもいうべきものは存在している。今回の調査でも、弥生時代の土器で、伊勢湾口に浮かぶ答志島のおばたけ遺跡[3]と同様の近江系甕や、古墳時代の土器で、白浜遺跡[4]と同様にS字甕が出土している。

海岸に立地する地域には、陸だけでなく、海をつかった人とものの交流があったと考えられる。

遺跡資料だけでなく、平城宮等で出土する木簡や中世以降の文献資料を駆使した研究は、今後の課題である。

また、伊藤裕偉氏が東海道遺跡[5]の報告のなかで、1900年前後の地形図では、国府と甲賀境付近に沼地状ものがあることから、海岸砂丘(砂堆)と隆起海食台地との間、つまりこの平野の中央部に潟湖の存在を指摘している。想像にしかすぎないが、弥生・古墳時代そして奈良時代において、この潟湖がある程度の港としての機能をもっていたならば、志摩国府の立地(選地)条件の一つになるものと思われる。

4．まとめ

今後当地域での、墓制や土器等のものの移動・流通を考える上で、今回の調査は資料を一つ増やすことが出来た。

また人骨は人類学的にもデータの少なかった近世以前の人骨として、貴重な資料を得ることができた。

なお、当地域が人骨の保存においては、海岸の砂地という絶好の条件を備えているので、人骨の時代を確実に決めるためにも、将来調査の機会があれば十分注意して調査を進める必要がある。

そのためにも、このような海岸部の砂地の遺跡の発掘調査をする場合、調査時期は雨の少ない冬期に行うべきであろう。

今回の調査では、夏の第1次調査は実質調査期間72日のうち、台風等の雨で約1／4にあたる20日は現場での調査は全くできなかった。(排水作業は除く)。

それに対して、冬の第2次調査では、実質調査期間15日のうち、雨で現場での調査ができなかったのは1日だけである。また、地下水位も低く、夏の調査で悩まされた地下水の滲みだしもなかった。

砂地であるため、遺構の保護ということが第一の目的であるが、調査の効率ということからも冬期の調査がよいと考えられる。

なお、遺跡の範囲は調査区外にも広がることが確認され、周辺地域には未調査の古墳がたくさん存在すること、当遺跡がやはり志摩国府及び志摩国分寺の縁辺部と考えられることから、その関係を知るためにも、志摩国府と志摩国分寺の調査が必要であることなどからも、この地域での開発には慎重な対応が必要といえる。

［註］

① 『阿児町史』阿児町 1977

② 前掲書①及び「Ⅱ 位置と環境」

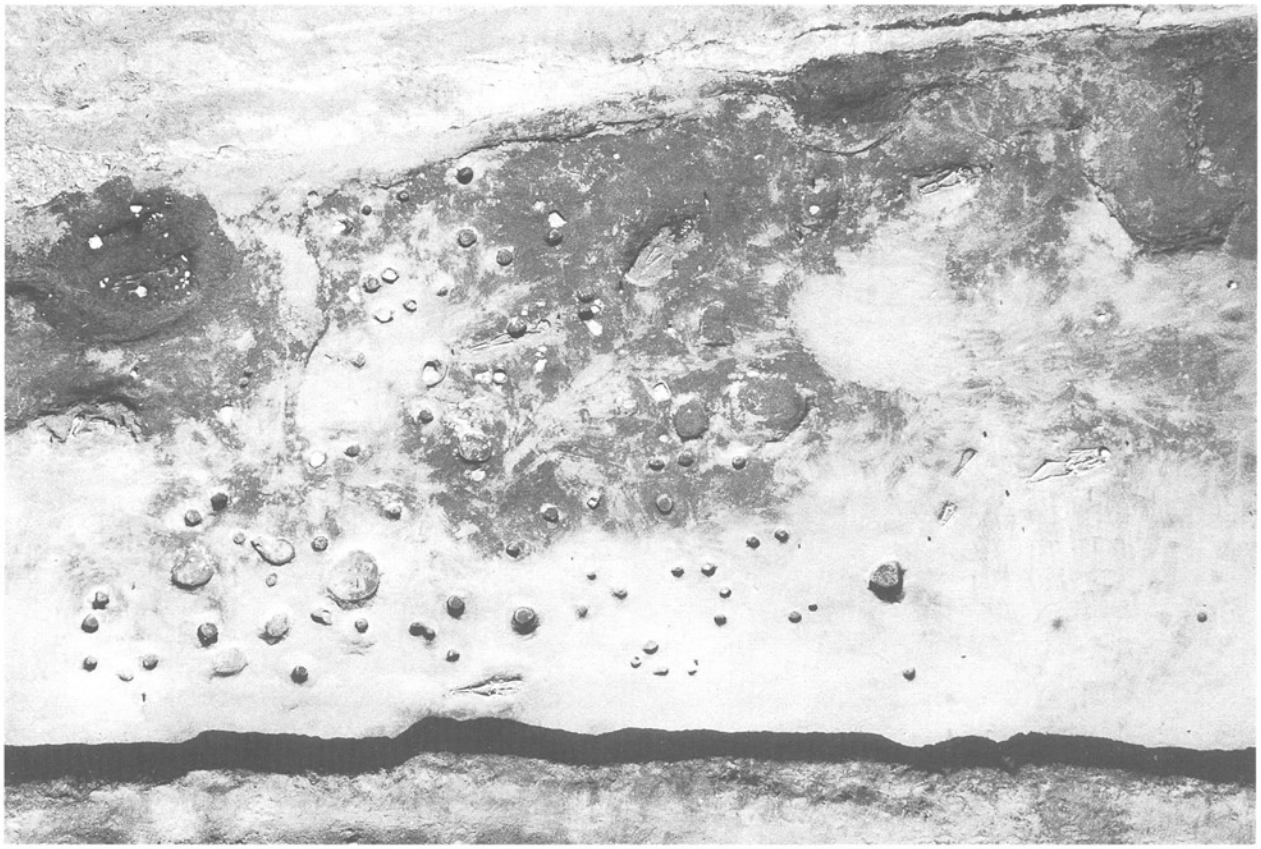
③ 下村登良男・村上喜雄『おばたけ遺跡発掘調査報告第4次』鳥羽市教育委員会 1972

④ 本浦遺跡群調査委員会『白浜遺跡発掘調査報告』1990

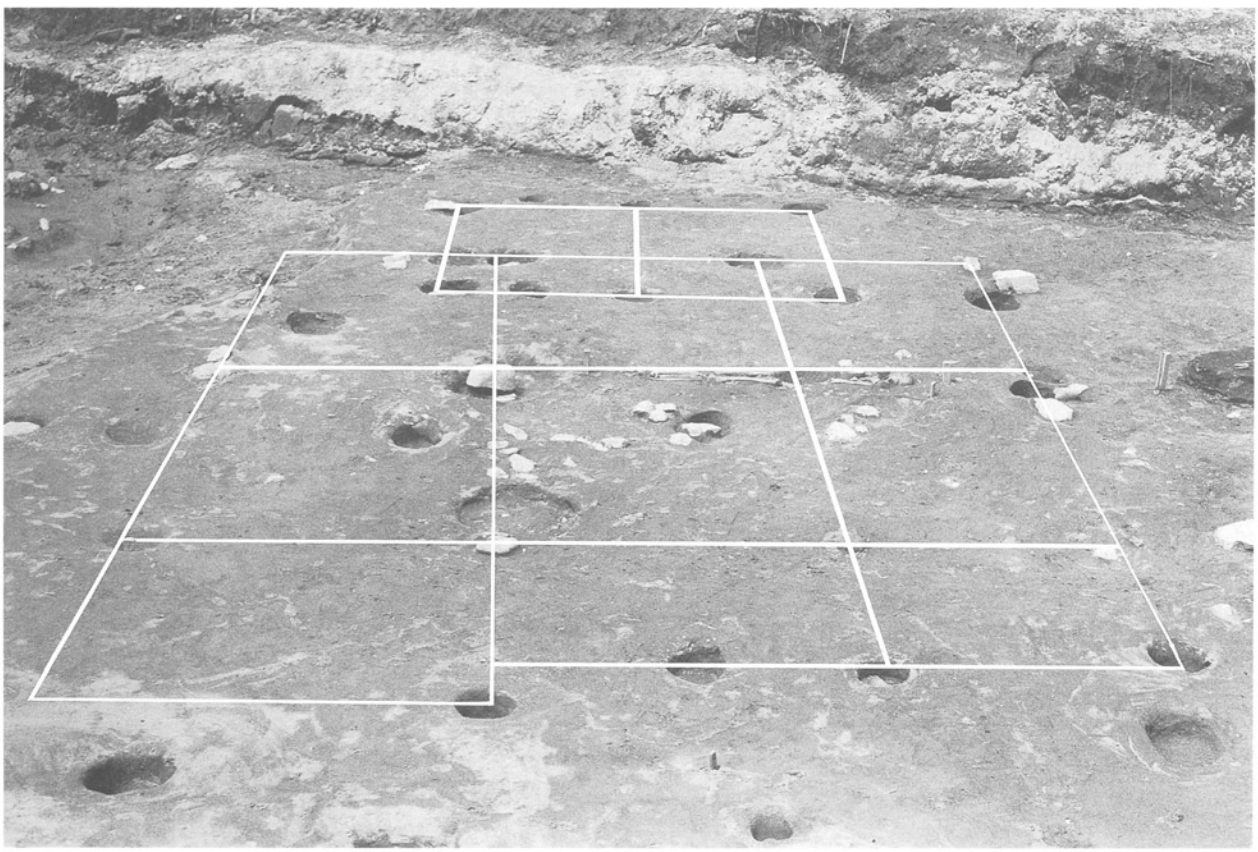
⑤ 伊藤裕偉『東海道遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1989

1－1　B・C区　調査前近景　［西から］

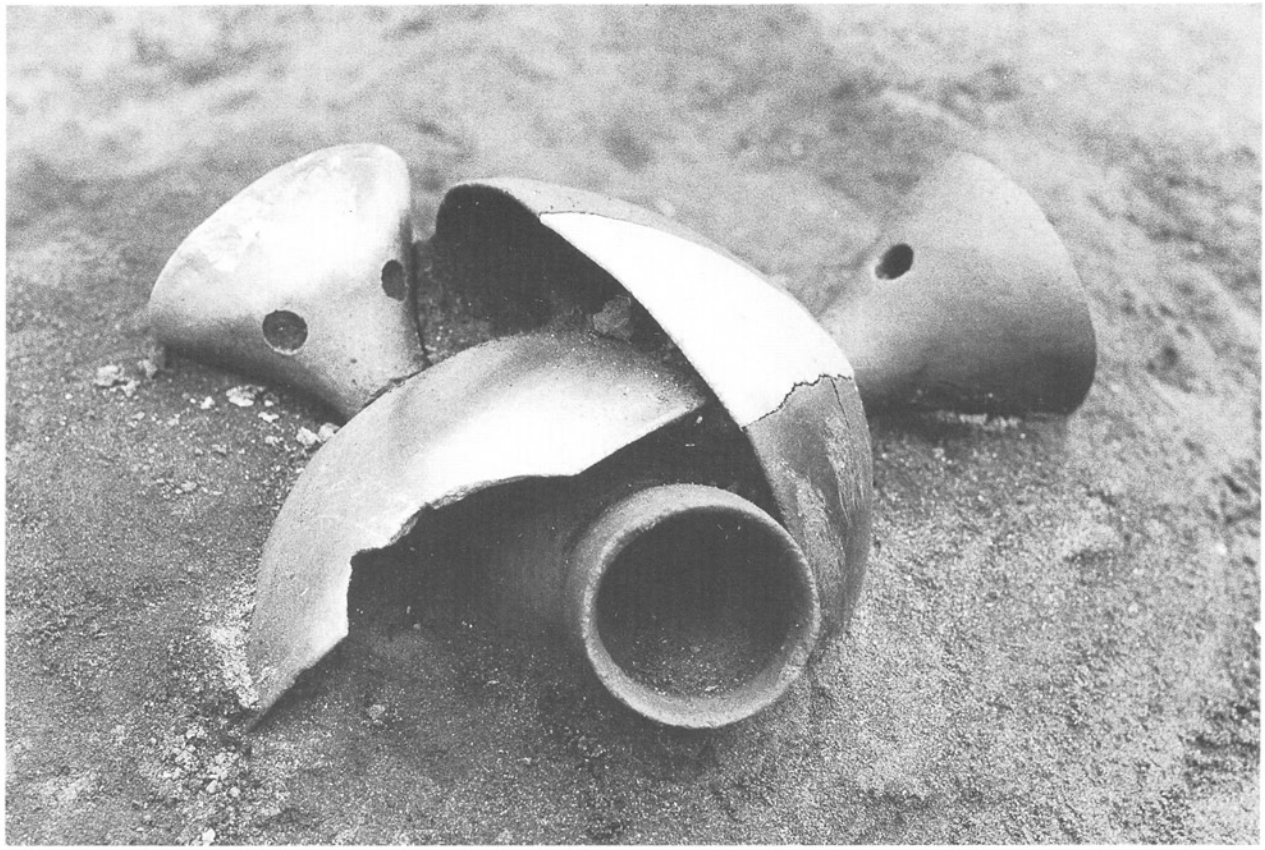
1－2　B・C区　調査区遠景　［西上空から］



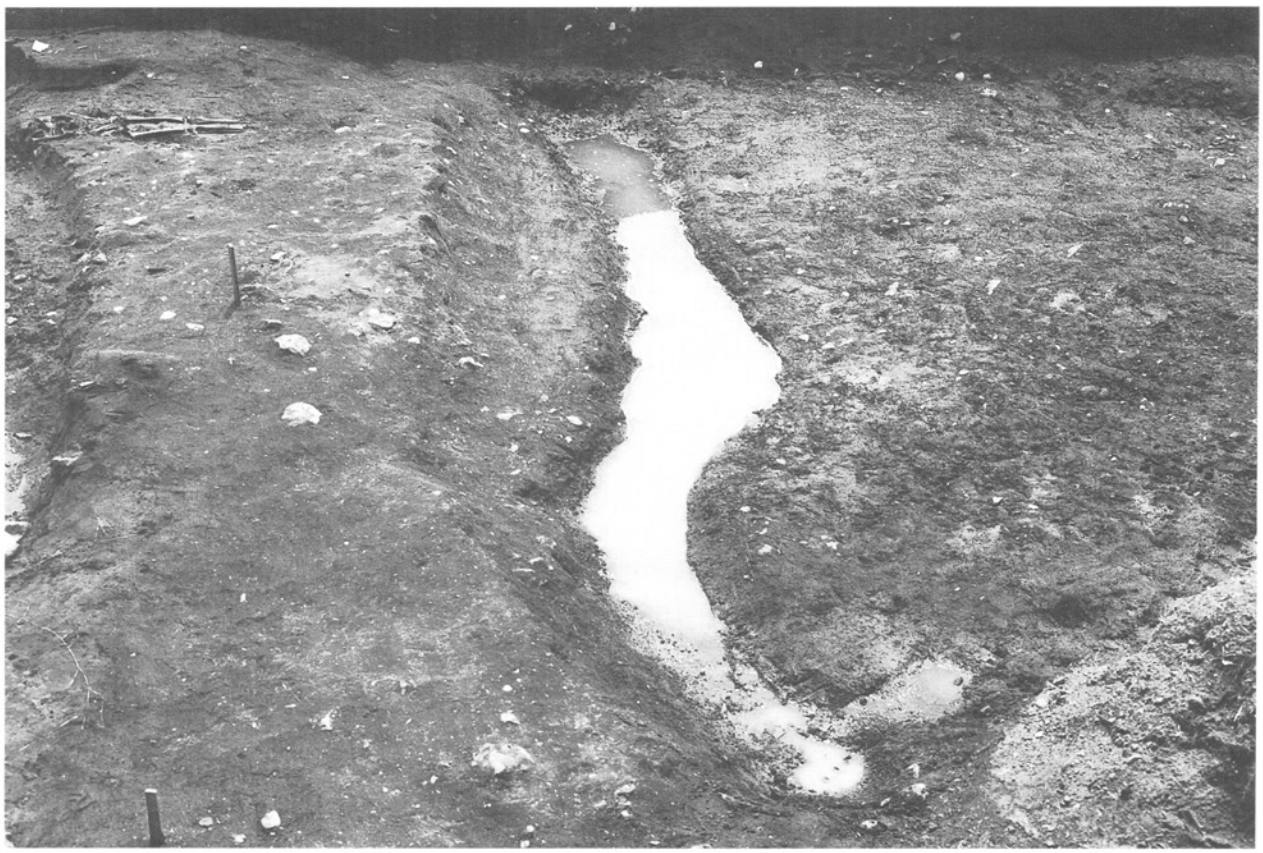
２－１　Ｂ区　調査区中央部　［上空から］



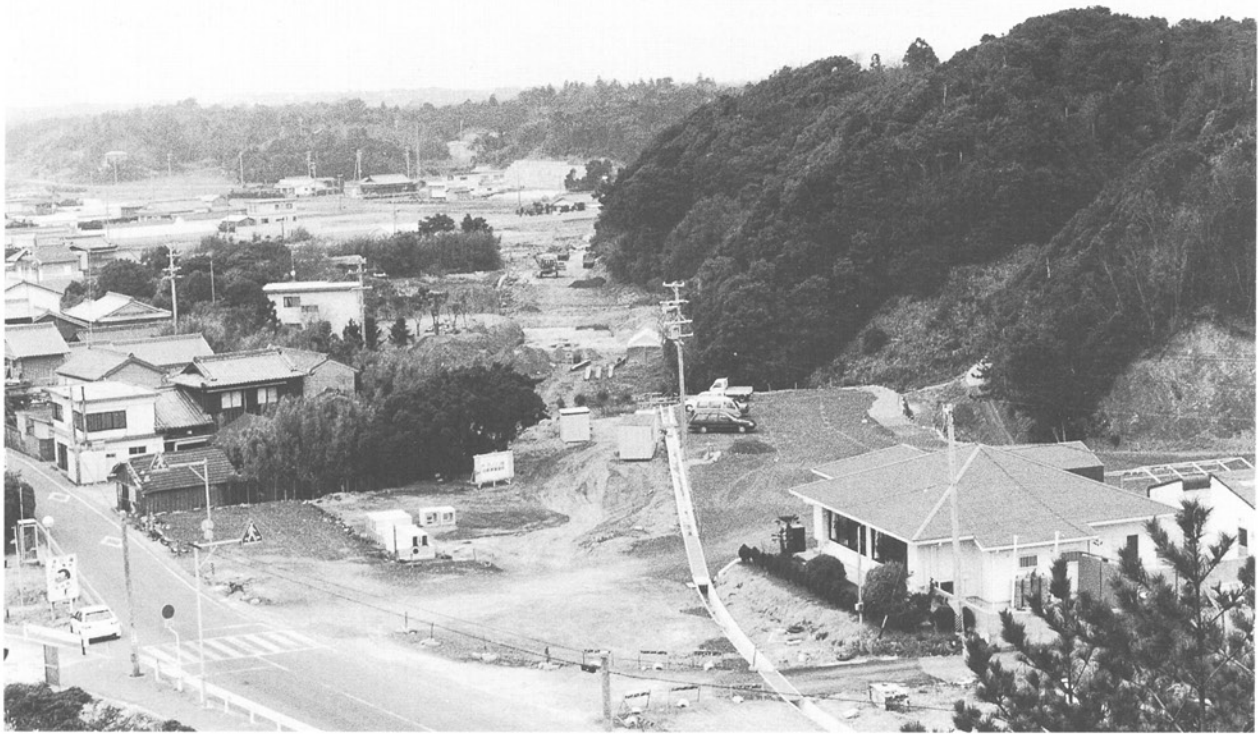
２－２　Ｂ区　掘立柱建物ＳＢ33・ＳＢ34　［南南東から］（手前がＳＢ34）



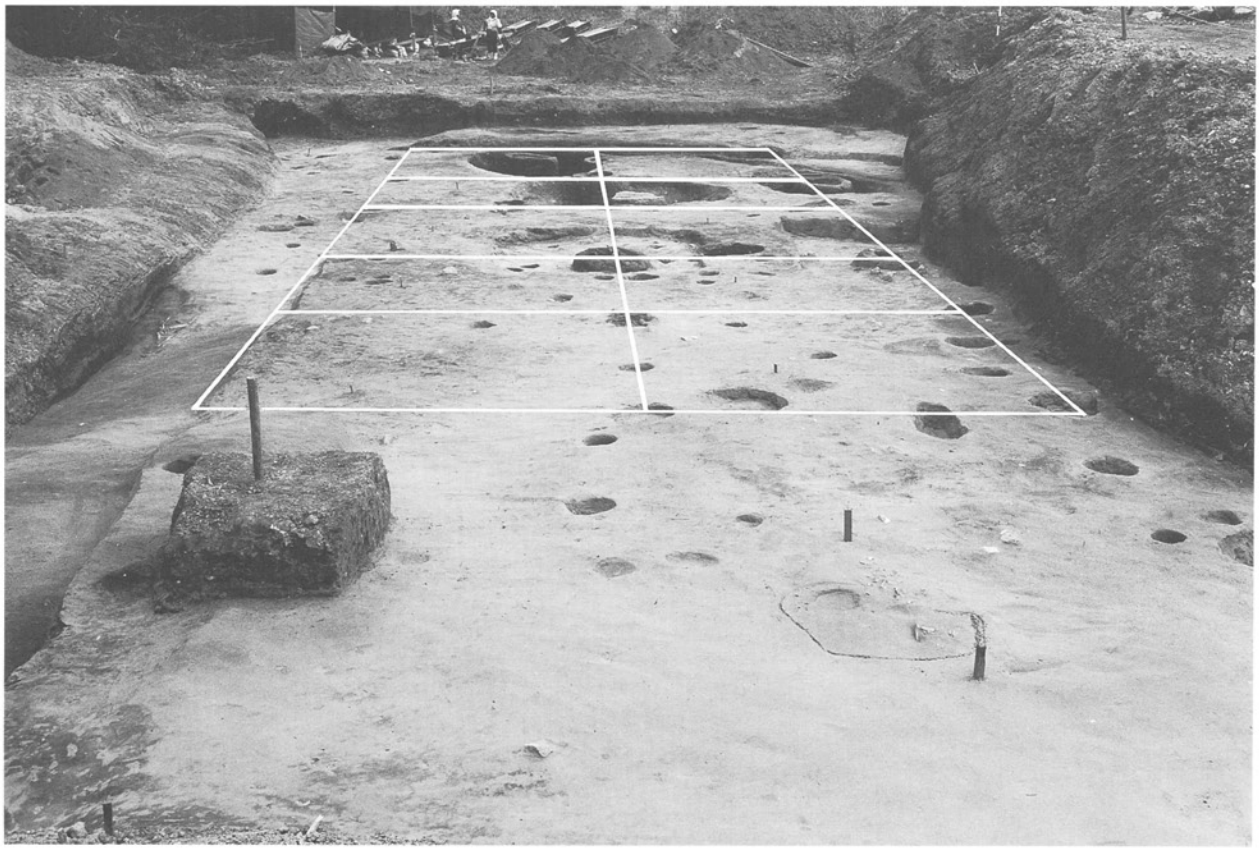
３－１　Ｂ区　土坑ＳＫ37遺物出土状況　［南から］



３－２　Ｃ区　溝ＳＤ28　［北北西から］

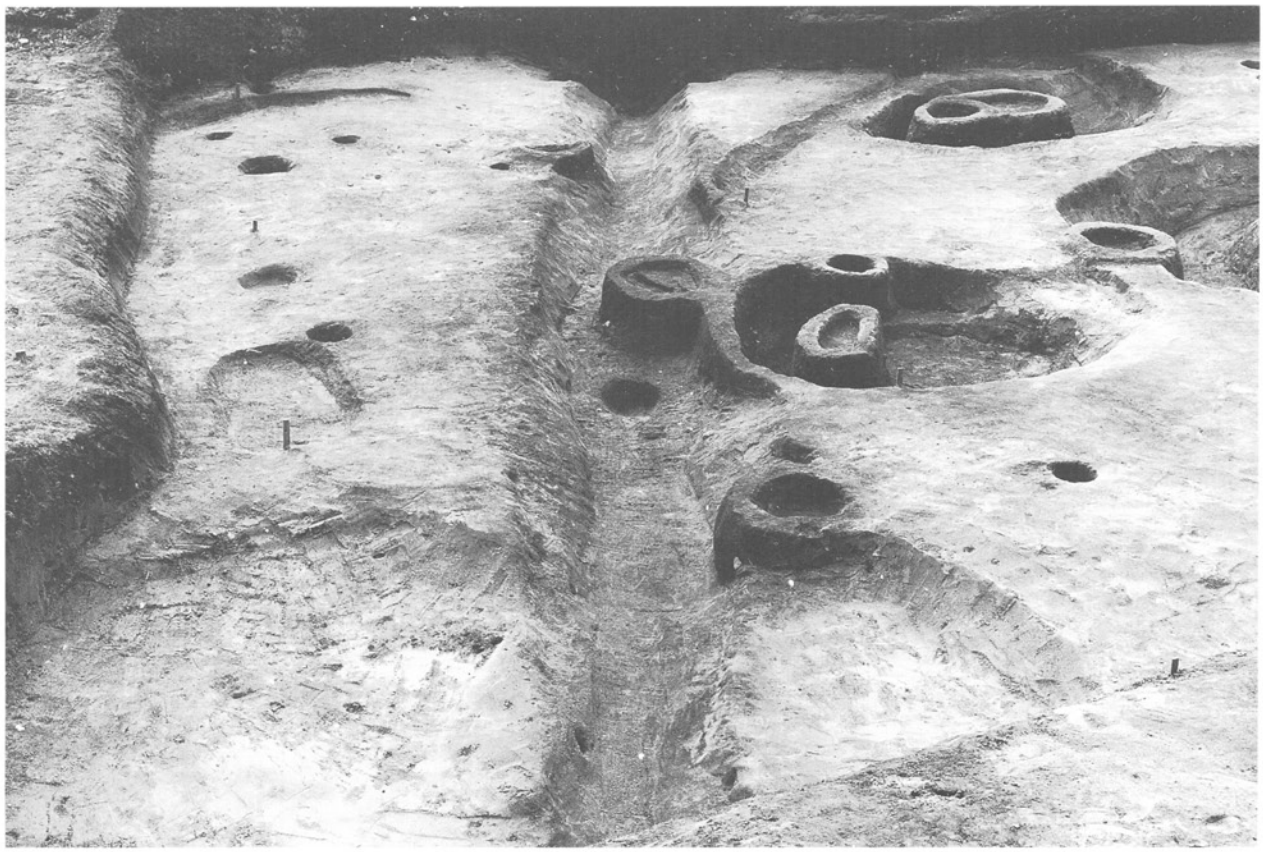


４－１　Ａ区　調査区遠景　［東から］

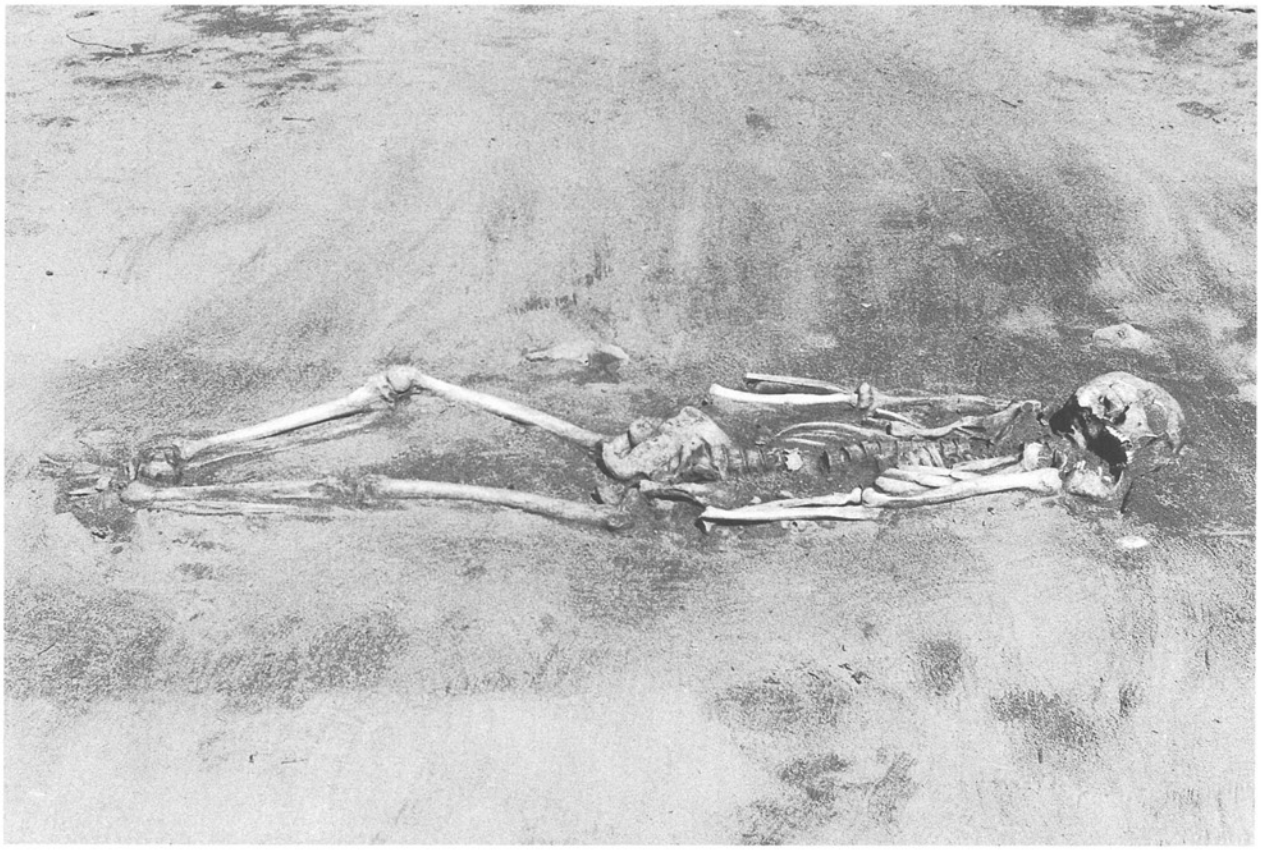


４－２　Ａ区　調査区全景・掘立柱建物ＳＢ43　［西から］

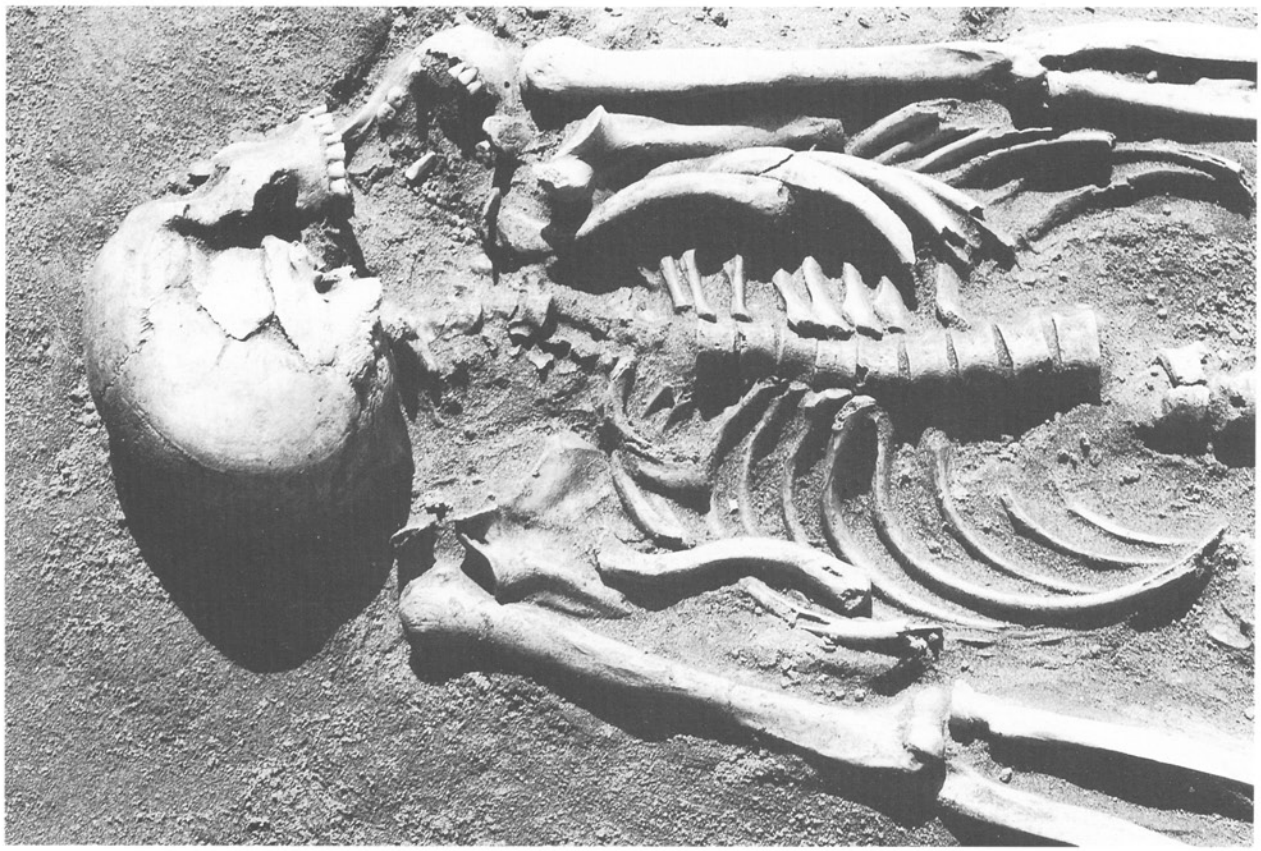
5－1　A区　土坑ＳＫ44　[西から]



5－2　A区　溝ＳＤ51　[北から]

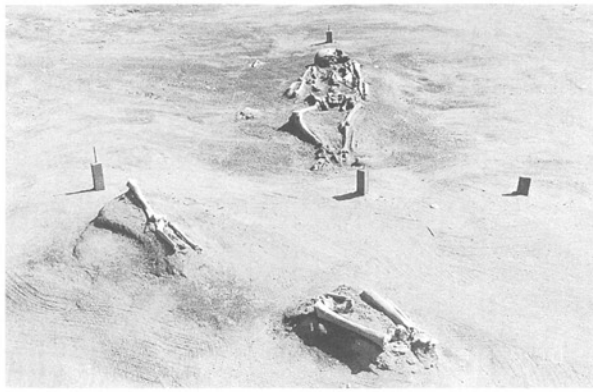


6－1　No.1　[南東から]

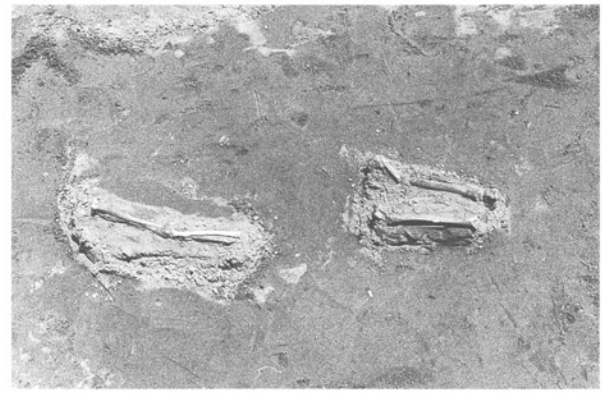


6－2　No.1　[北西から]

人骨出土状況(1)　No.1 人骨

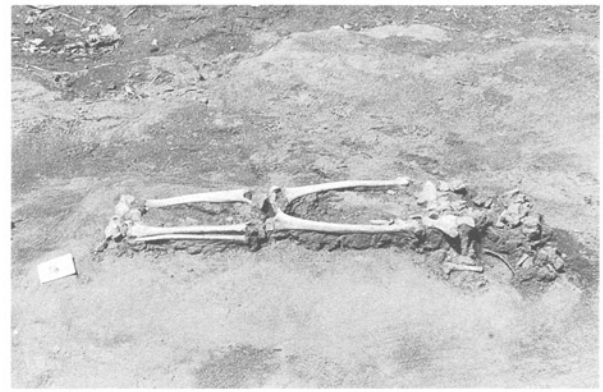


7－1　No.1（上）、No.2（下）　［南西から］

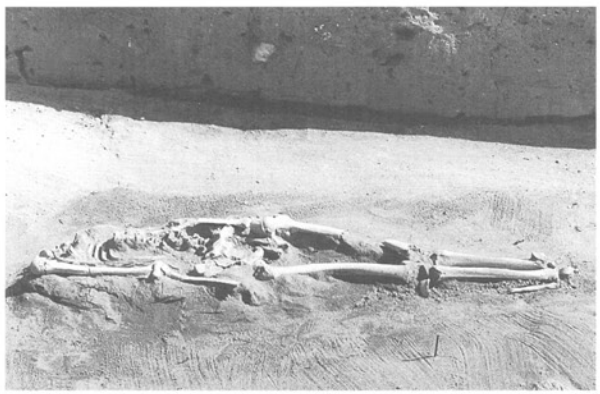


7－2　No.2　［西から］

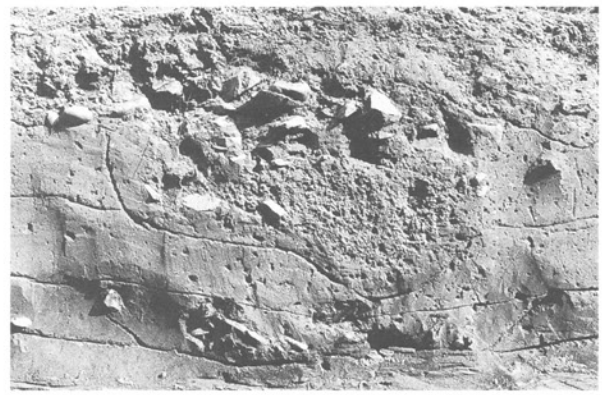
7－3　No.3　［西から］



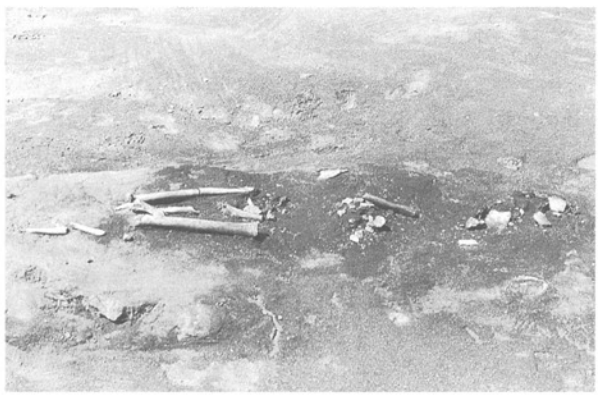
7－4　No.4　［南東から］



7－5　No.5　［北西から］



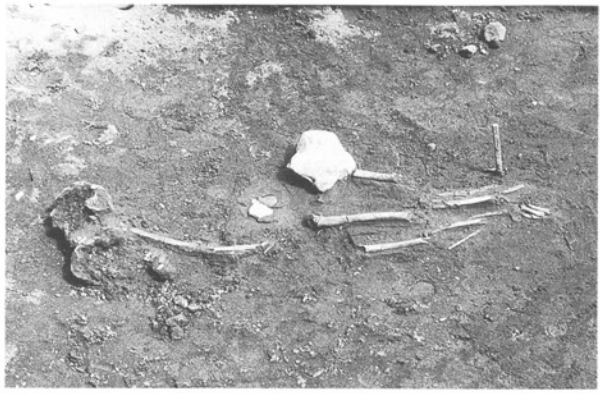
7－6　No.6、南壁土層　［北から］



7－7　No.7　［南から］

7－8　No.8（右）、No.9（左）

人骨出土状況(2)　No.1～9人骨

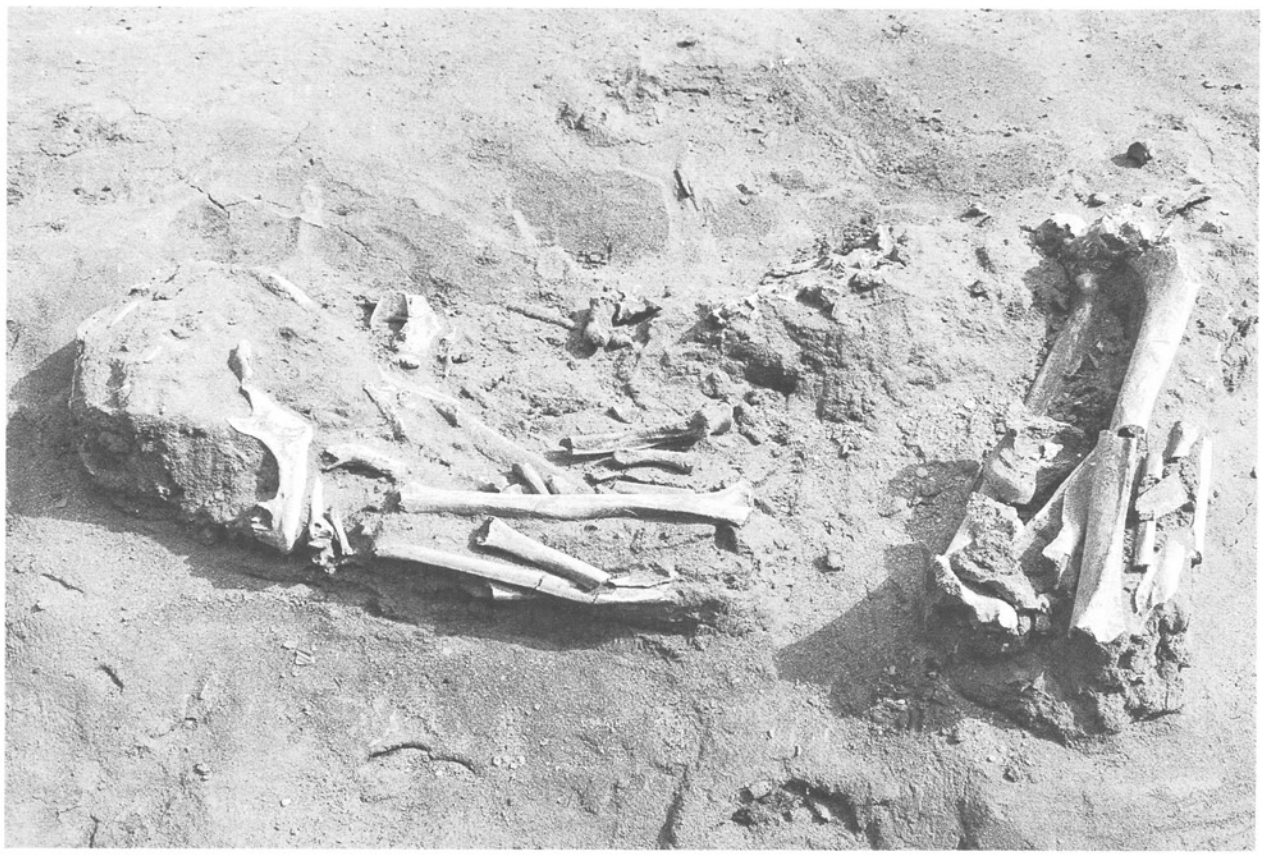


８－１　No.８人骨

８－２　No.９人骨

８－３　No.９人骨、管王（68）

８－４　No.10　［北から］



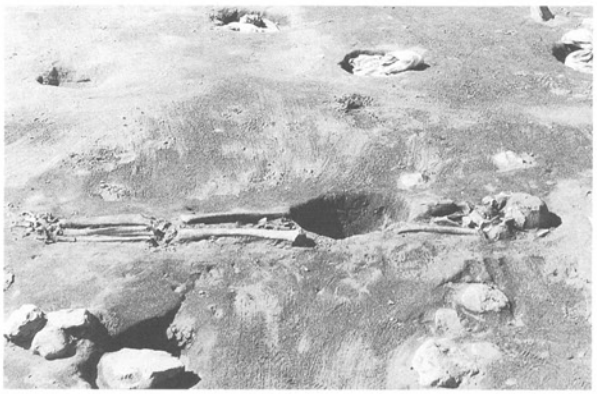
８－５　No.12　［北から］

人骨出土状況(3)　No.８～10、12人骨

9－1　No.13　[南から]

9－2　No.14　[北から]

9－3　No.14（上）、No.18（下）　[南から]

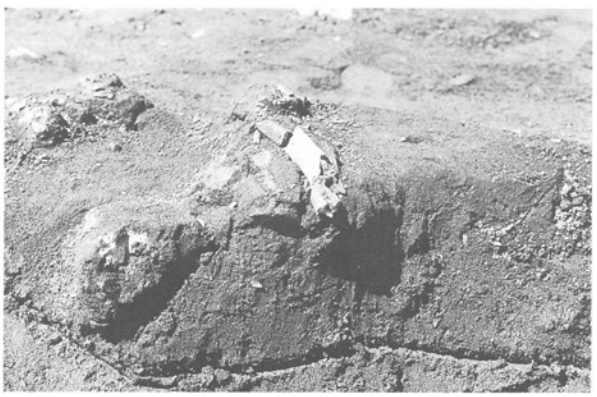


9－4　No.15　[南東から]

9－5　No.16（左が下顎）　[南から]

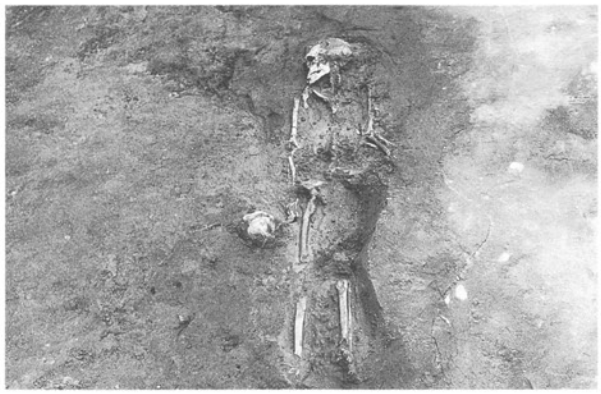
9－6　No.17、ＳＸ17内出土の土師器甕　[東から]

9－7　No.18　[北から]

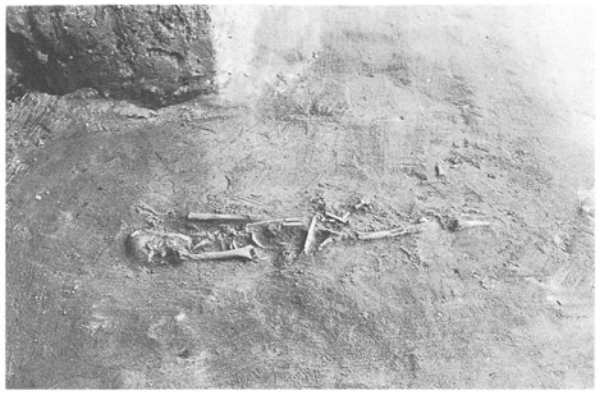


9－8　No.19　[東から]

人骨出土状況(4)　No.13～19人骨

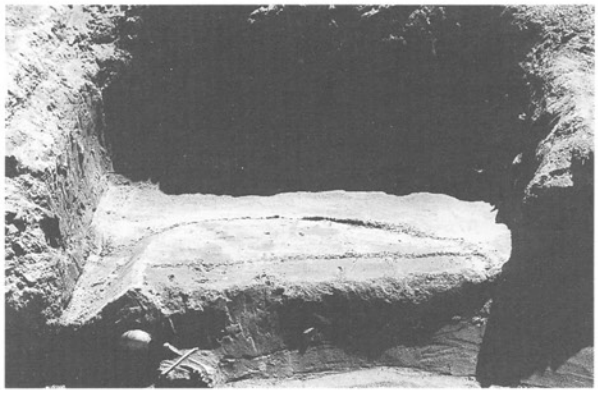


10－1　No.20　［南西から］

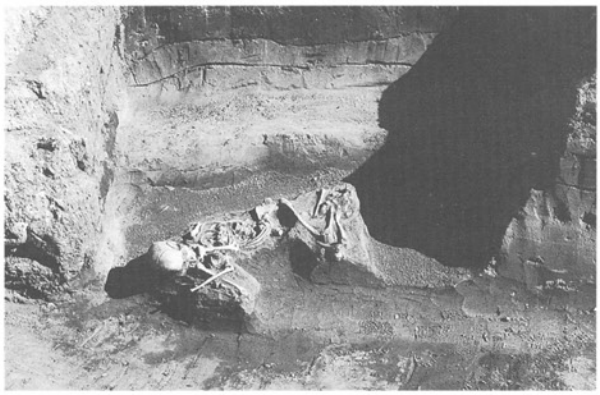


10－2　No.22　［北西から］

10－3　No.23　頭部（矢印）　［北から］

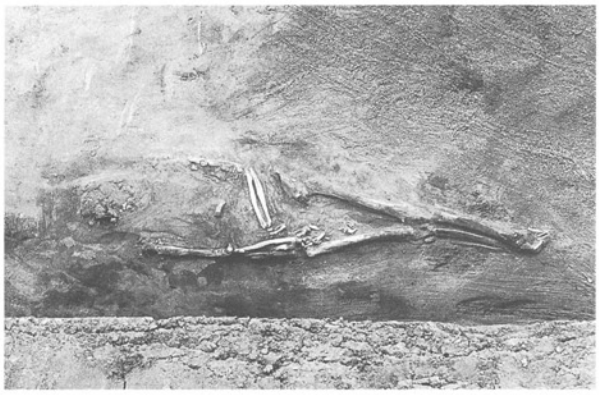


10－4　No.23、ＳＸ23検出状況　［北から］



10－5　No.23、墓坑ＳＸ23　［北から］

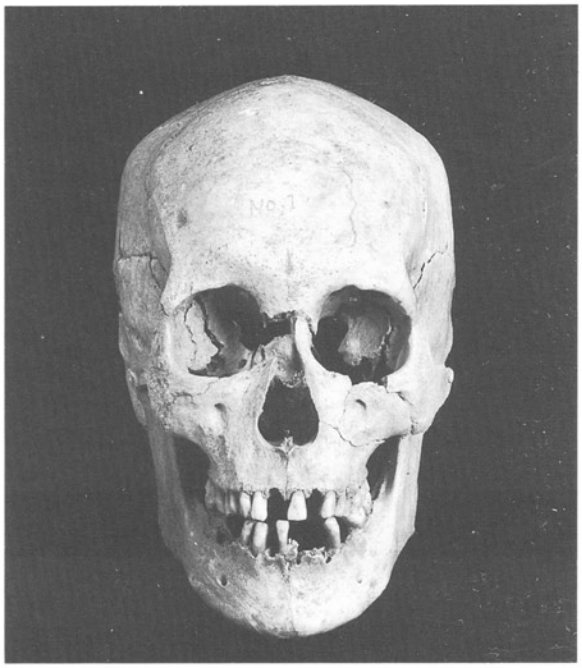
10－6　No.24　［北西から］



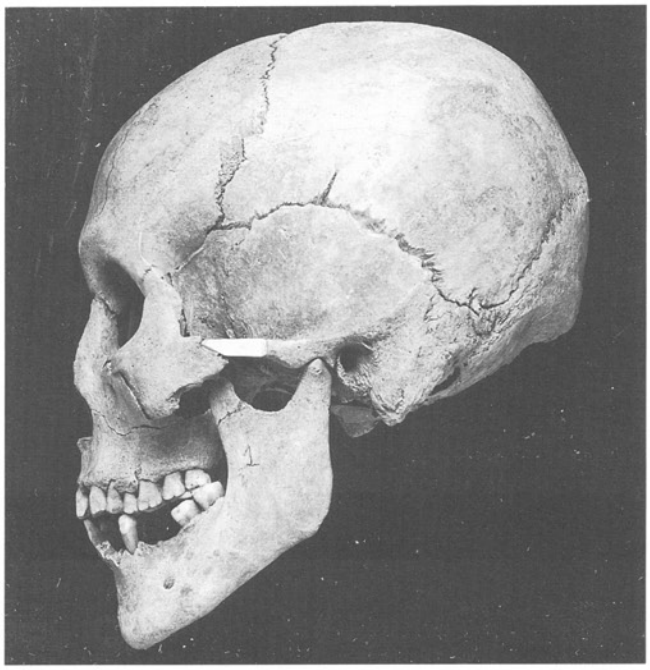
10－7　No.25　［北から］

10－8　No.26　［南東から］

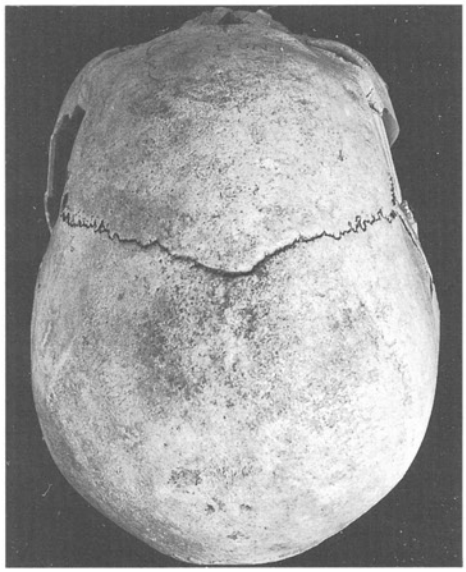
人骨出土状況(5)　No.20、22～26人骨



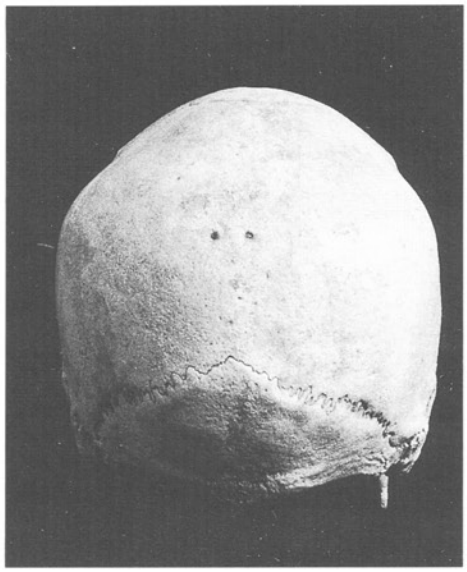
11－1　No. 1　正面観



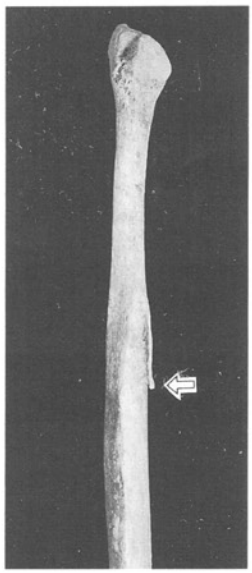
11－2　No. 1　左側面観



11－3　No. 1　上面観



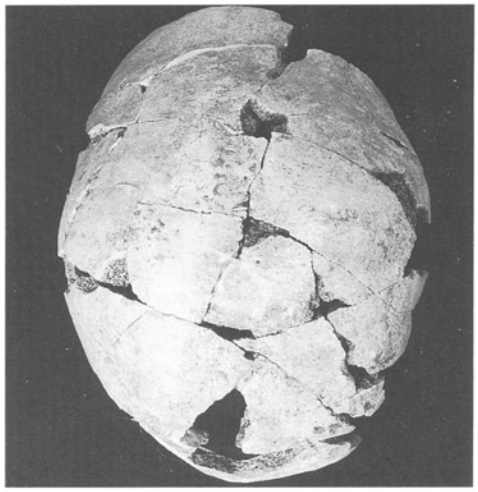
11－4　No. 1　後面観



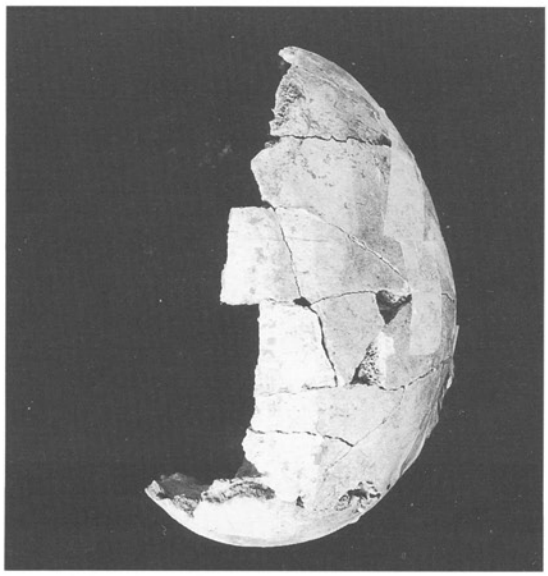
11－5　No. 1　腓骨

◀ 11－6　No. 3
上面観

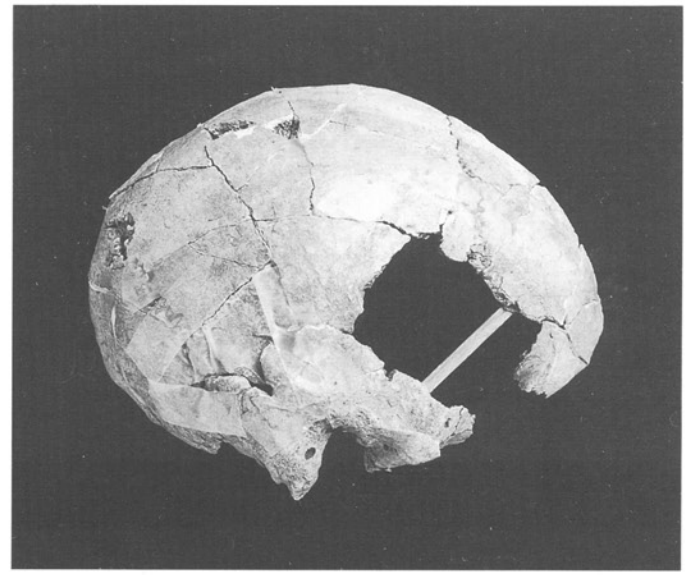
11－7　No. 7 ▶
上面観



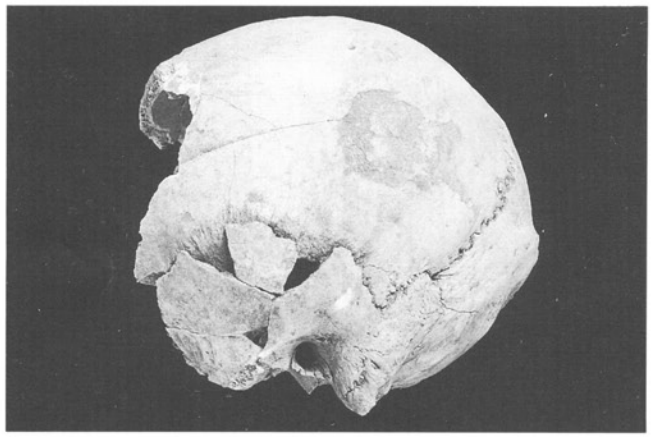
人骨(1)　No. 1 、 3 、 7 人骨　［1 ： 3］



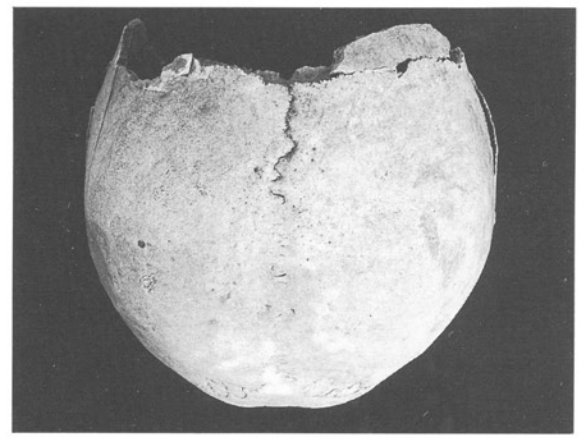
12－1　No.12　上面観



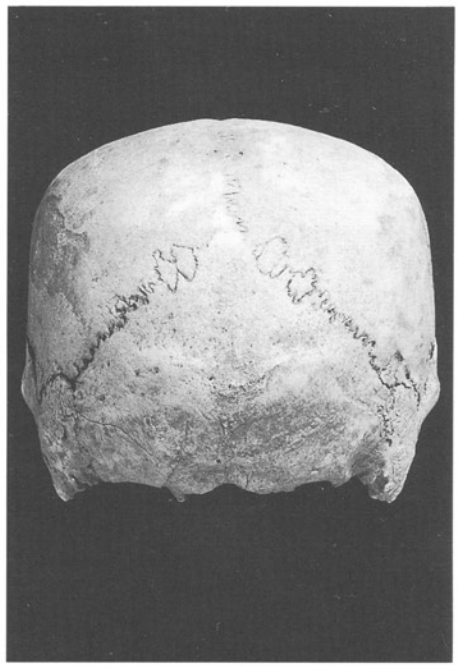
12－2　No.12　右側面観



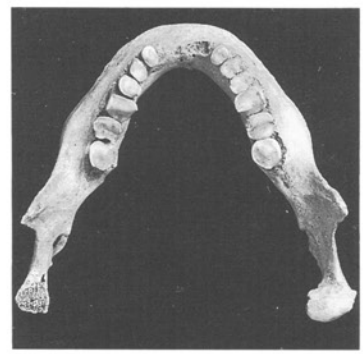
12－3　No.15　左側面観



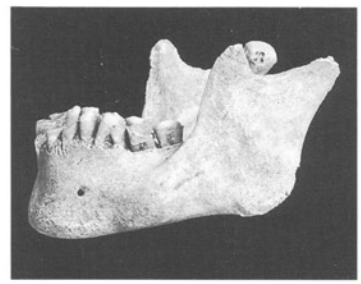
12－4　No.15　上面観



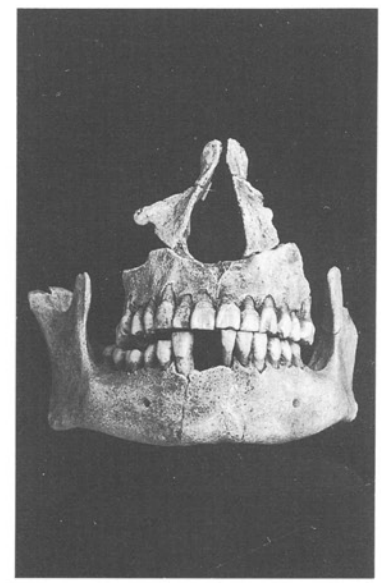
12－5　No.15　後面観



◀ 12－6　No.15　下顎骨上面観

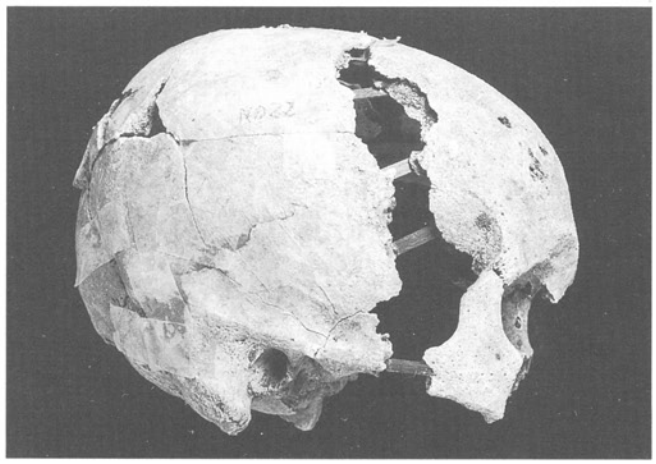


12－7　No.15　下顎骨左側面観

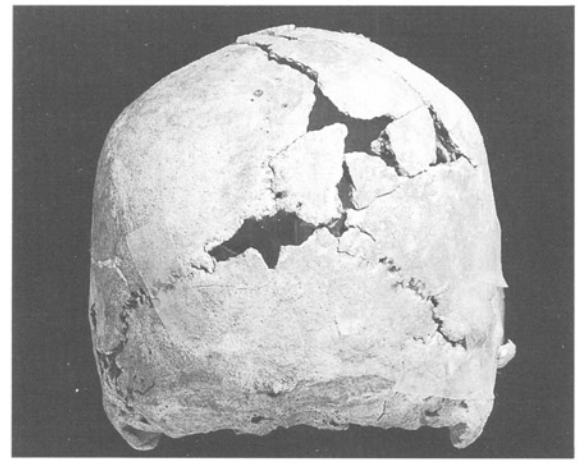


12－8　No.20　上・下顎骨正面観

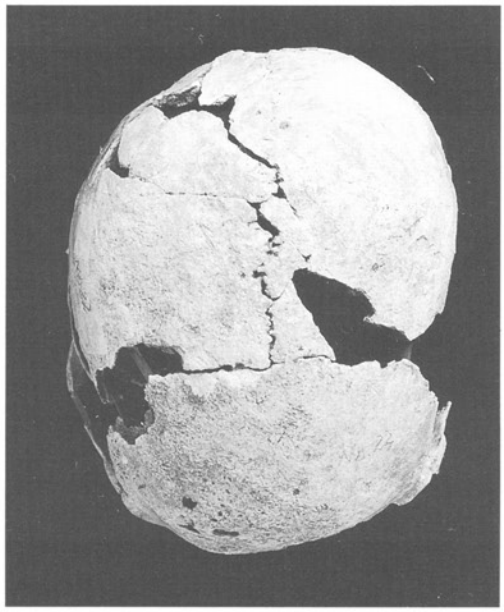
人骨(2)　No.12、15、20人骨　［1 ： 3］



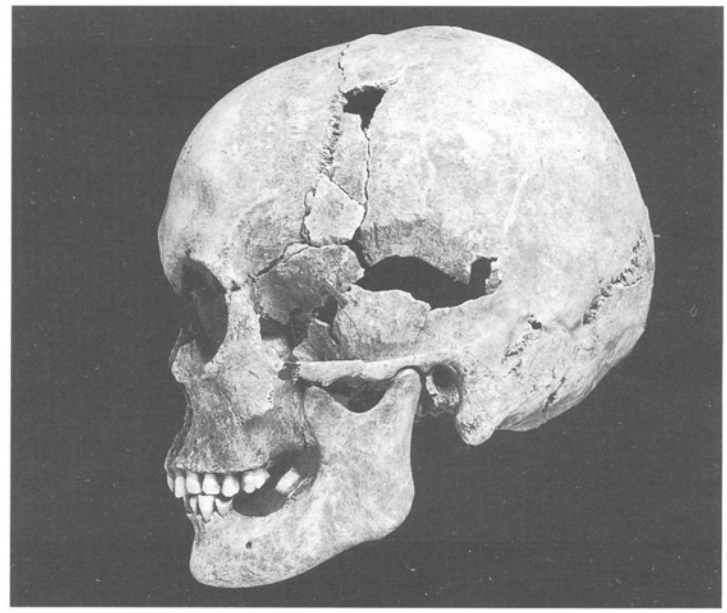
13－1　No.22　右側面観



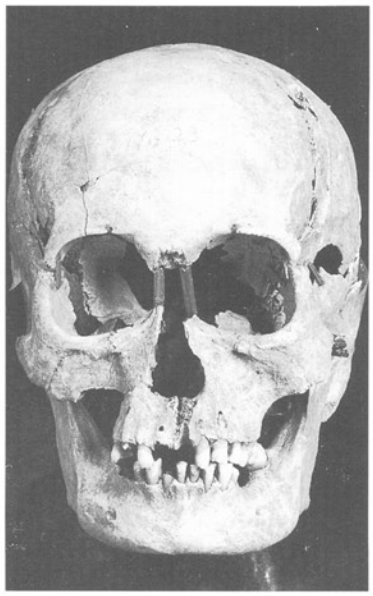
13－2　No.22　後面観



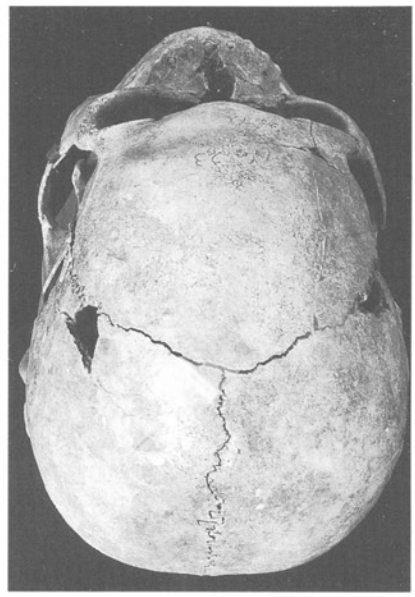
13－3　No.22　上面観



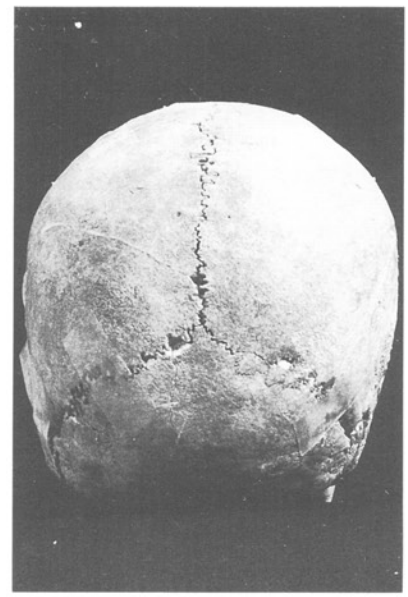
13－4　No.23　左側面観



13－5　No.23　正面観

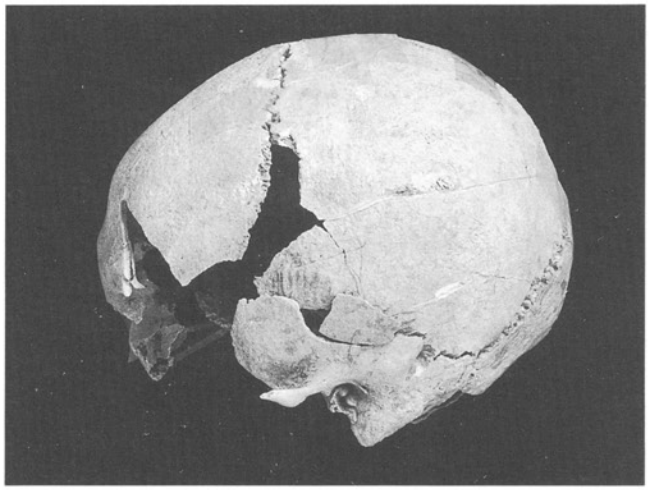


13－6　No.23　上面観

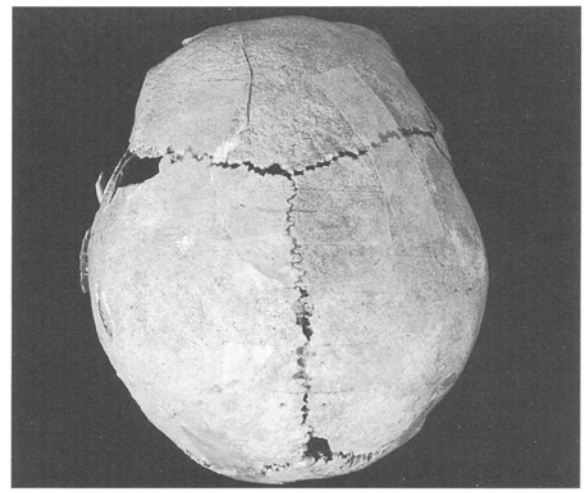


13－7　No.23　後面観

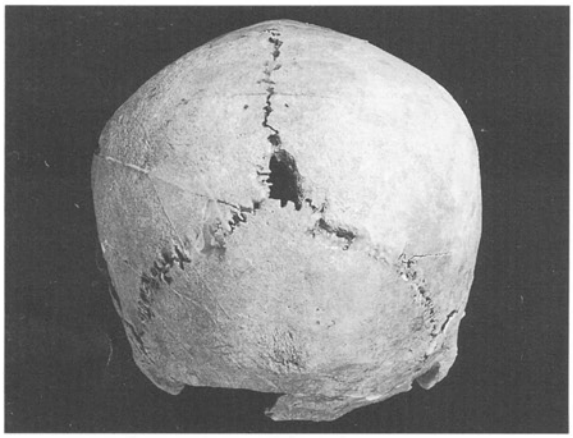
人骨(3)　No.22、23人骨　[1 : 3]



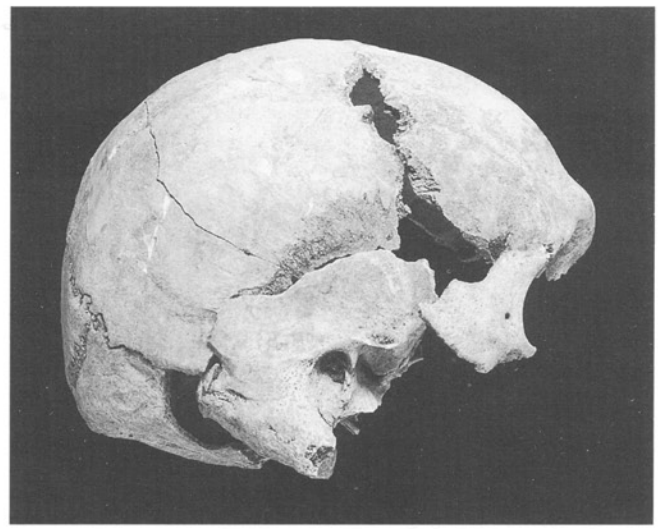
14－1　No.24　左側面観



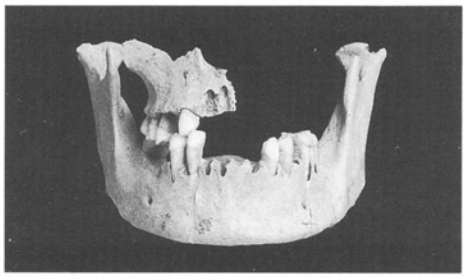
14－2　No.24　上面観



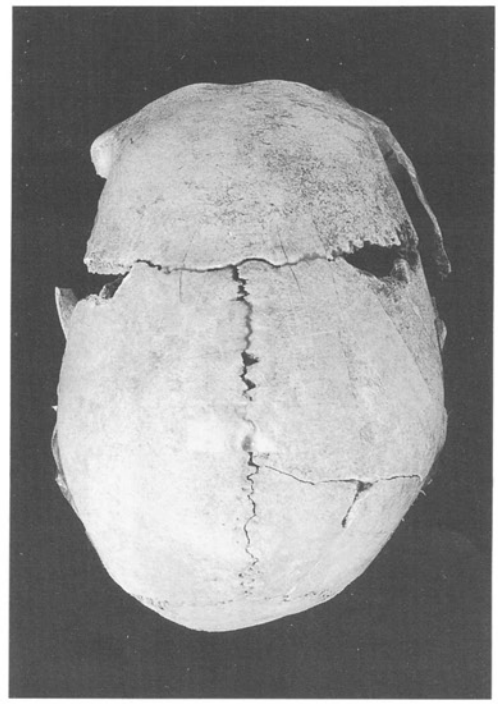
14－3　No.24　後面観

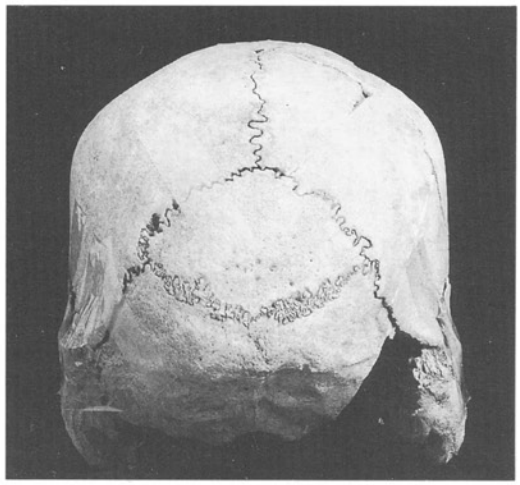


14－5　No.25　右側面観



◀ 14－4　No.24
上・下顎骨正面観





◀ 14－6　No.25
後面観

14－7　No.25 ▶
上面観

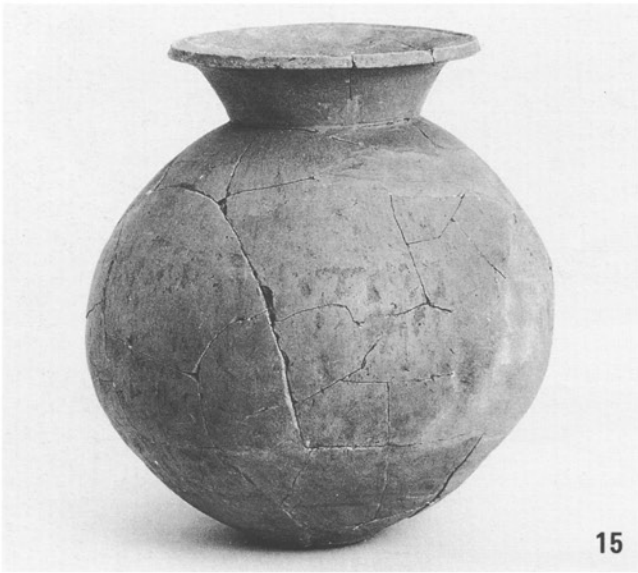
人骨(4)　No.24、25人骨　［1 ： 3］

9

10

8

12

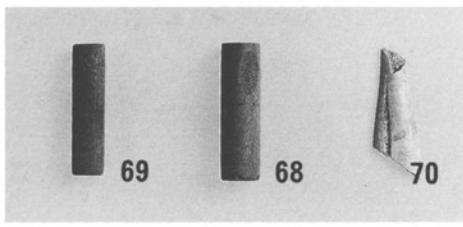

15

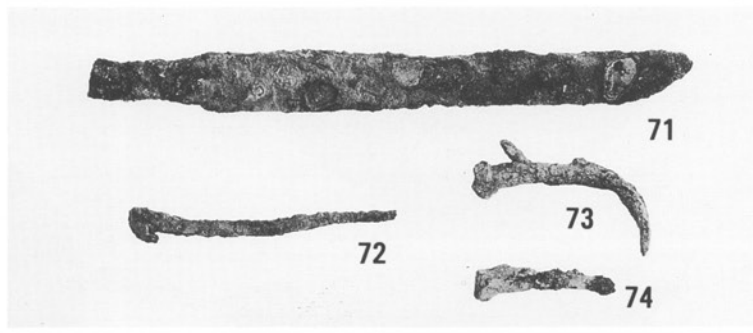
13

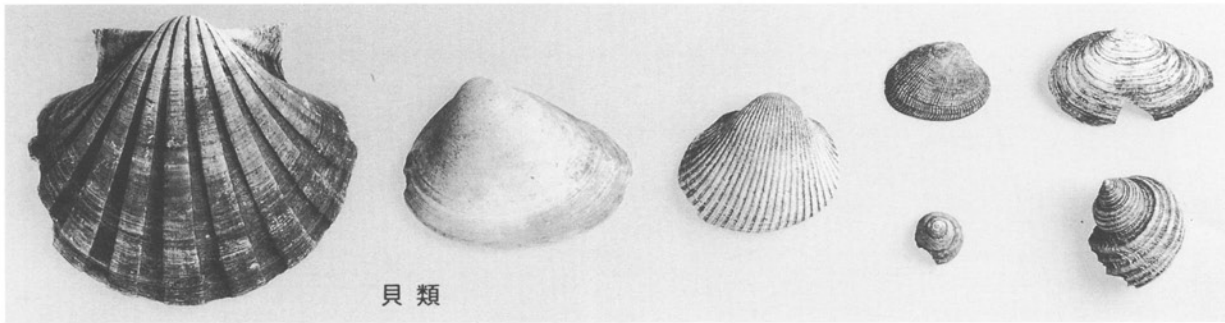
20

11

出土遺物(1) ［1 ： 4］ （9～13は、土坑ＳＫ37一括出土）







出土遺物(2) ［1 : 3，但し、68・69・70は 1 : 2］

平成4(1992)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年1月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告107

一般地方道安乗港線道路特殊改良事業に伴う

西殿遺跡発掘調査報告

— 志摩郡阿児町国府 —

1992（平成4）年3月

編　集
発　行　　三重県埋蔵文化財センター

印　刷　　光出版印刷株式会社